
意志を継ぐ人々

ジングル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

意志を継ぐ人々

【Nコード】

N5824T

【作者名】

ジングル

【あらすじ】

探索者。遺跡を発掘・調査し、そこにモンスターなどの障害があれば、駆逐し遺跡周辺への安全を確保する職業。もしくは、それらを生業とする人々――。主人公のヴェルクも、そんな職に就く一人である。これは、彼とその仲間たちが繰り広げる、あまり壮大ではない物語（予定）。※アルファポリス様及びNEWVEL様に登録してみました。※Arcadia様にも投稿してみました。

01. 酔い潰れた英雄（改訂版）（前書き）

ちよつと描写が淡泊すぎる部分を補強していこうと思います。もちろん、最新話の更新を優先させていきますので、少しずつですが、整合性の部分でおかしな点があったらご指摘ください。

01. 酔い潰れた英雄（改訂版）

馴染みの酒場。そこでオレは、一人で飲んでいた。

こういう時によく使う、店の中で一番奥まった場所にある二人掛けテーブル席。ここなら、他人に干渉されずに一人になれる。

この席について最初に出されるのは、決まって店で一番強い酒だ。付き合いの長いマスターは、オレが酔いつぶれるためにこの席に座ることに気付いている。

酒への愛情が深く、酔いつぶれるための酒そのものを嫌う人だが、職業柄、探索者間の情報に聡い彼は、オレの心情を察してくれているのかもしれない。いつも、こういう時だけは目を瞑ってくれる。

酒をグラス一杯にしてあおりながら、内に芽生えた憤りや絶望を誤魔化す。あまりに巨大で、深く、強い感情。他人の人生を背負うというのは、こういうことなのだろうか……？

「ココ、空いてるかしら？」

今日は、マスターの気遣いを見逃す、無粋なヤツがいるらしい。女のほうから声を掛けられるなんて珍しく、いつもならすぐに応じるところだが、今回は精神的にも体力的にも疲れ果てていた。そのため、顔も向けずに応える。

「あいにく……オレが座ってるんでね」

「あら。貴方の、向かい側の席には誰もいないようだけれど」

……しつこいヤツ。ため息をついて、ようやく視線を酒瓶から外して見上げると、見たことのない女が立っていた。いや、知らない女だということは声で分かっていたが……ただの女じゃなく、陳腐な言葉で言えば、絶世の美人ってヤツだ。……まあ、この世全ての女を見たわけじゃないのだが。

肥溜めに鶴。地獄に女神とはこのことだろうか？ 早くも酔いが回って幻を見てるのかと、思わず目をこするが……どうやら現実らしい。その動作を見た彼女は、フフフと笑って言う。自分の容姿をよく理解している、魅力的な笑みだ。

「あちらは少し……騒がしくて。今日は静かに飲みたいの」

流石に今度は、素っ気無く返すこともできずに、意識して気のないフリをする必要があった。我ながら現金だとは思うが……これも男の性だ。オレは、顎先でその席を示しながら言う。

「ふうん……好きにしたらいいさ」

「ありがとう。一杯奢るわ」

そう言って、彼女は向かいの席に着いた。そりゃどーも。



「ううん……」

日の光が差し込む自分の部屋のベッドに横になっていたオレは、すぐ隣で聞こえた甘えるような吐息に気付いて目を覚ました。横を

見ると、右隣に昨夜酒場で意気投合した(?)らしいネーちゃんが眠っていて、軽く衝撃を受ける。……これは、夢か？

つてのは冗談にしても。

なんとも記憶が曖昧だが、どうやら、酔っていても美人を見分ける能力だけは健在だったらしい。しかし、彼女の名前を聞いたのかさえ覚えてない。それどころか、昨日飲んだ酒が、まだ残っているような気すらする。そんなに飲んだ覚えもないんだが……。

……ま、いっか。

一人結論付けると、ベッドの上で首だけ起こして、周囲を見回すと、いつも寝泊りしている馴染みの宿屋の一室。ベッドの周りには脱ぎ散らかした服やらナニやらがあちらこちらに。ああ、やつぱり酒が残っているのか、いつになく頭が痛え……。こんなに酷い二日酔いは、初めてかもしれないな。

しかし……カーテン越しに見える外の明るさからして、もう昼ごろか。

今日は、いい加減にギルドに顔を出さないと。イロイロと口うるさいのがあるしな……などと、色々思い出して気分がブルーになる。この一週間にあった出来事を考えると、あまり浮かれてもいられない状況だ。

さて……と、自分の胸の上に置かれていた彼女の腕を下ろし、ベッドから降りる。毛布から抜け出すときにちらりと、名前も知らない彼女の裸体が目についた。どうやら昨日は、彼女に大分慰められたらしい。

「眼福眼福っと……」

我ながら親父臭いセリフを吐きながら、いそいそと服を拾い集めて、部屋の入り口近くにある洗濯物用のカゴに放り込む。オレがない時に、この宿屋の娘が回収してくれる手筈だ。ああ、でも今日は客がいるから、面倒だと言っておかないとな。

部屋の空気がずいぶん淀んでいるので、カーテンはそのまま、窓を薄く開ける。自分で分かるほど酒臭かった。まるで、頭からグラスごと酒を被ったかのような。頭痛もあるし……昨日は大分呑んだんだな……。

窓際の棚から、薬剤ギルド特製の消臭薬を取り出し口へ放り込む。これは本来匂いに敏感なモンスターから身を隠すための薬だが、こういう使い方もある。むしろ、今では一般にも広まっていて、こちらの用法が常識的かもしれない。酒飲みや、女遊びが好きなヤツには欠かせないアイテムだ。逆に、亭主が隠れてこの薬を使っていたら、浮気を疑ったほうが良い。

使い慣れた部屋のクローゼットから、適当に服を見繕って着込む。といっても、ほとんどの服が黒色で統一されていて考える余地がない。

別に闇夜に紛れたいとか、変なポリシーがあったりとか、格好付けているわけではなく、単に仕事で服が汚れることが多いという、非常に現実的な話だったりする。返って埃汚れは目立つんだけどな……。

服を着込んだ後、

「用事があるので探索者ギルドへ。

出かけるなら部屋はそのままです。服は洗濯が必要なら入り口脇にあるカゴの中へ。

腹が空いたなら一階の食堂でオレの名前でツケておいてくれ。

――ヴェルク」

とメモに走り書きをしてベッド脇のテーブルに残す。自分の名前を伝えたかも知覚えていないので、名前も記入。一応、着替えになりそうな服も一緒に置いておく。酔い覚ましと特製消臭薬を添えて。

宿屋を営んでいる親子にことの連絡と挨拶をし、建物を出て街中を北に向かう。どうやら丁度昼食時らしく、あちらこちらから良い匂いが漂ってくる。小腹が空いていたので、出掛けに貰ったサンドイッチを片手に歩く。うん、美味しい。今日は宿屋の娘、ミントが作ったんだろう。オヤジさんの作るソレは、あまり丁寧なものとは言い難いからなあ。

街中の喧騒が、若干二日酔いの頭に響いていたが、とある出来事を深く考えずに済むお陰で、逆にありがたかった。ちなみに、昨夜の情事に関してではない。

どちらかというところからは思い出したいほうの出来事だが、今もまるで思い出せない。人間、こういうことはうまくいかないものだ、などと考ええる。

途中、知り合いの探索者に会おう。名前はジフ。気の良いおっさん探索者だ。3年前に、こんな強面がどこで見つけたのか不思議なくらい美人の嫁さんを貰って現場から退き、今ではその間に可愛らしい子供がいたはず。まあ、守るもんができたったら、あんな危

険なところに潜りたくないってのも分かる話だ。残念ながら、オレには無縁の世界だな……。

今は若手探索者の育成に徹しているが、昔はかなりやり手の探索者だった。……いや、そうでなければ若手の育成など任せられはしない。そういうオレも、5年前に探索者になったばかりの頃は、まだ現場にいた彼にずいぶん世話になったものだった。

「おう、ヴェルク。これからギルドか？ ……って、なんだあ？
こんな時間に、まだ眠そうだな」

「二日酔いでね、さっきまで寝てたんだよ。ジフもギルドへ？」
「まあな。これから若手共に講義をしてやらにやいかんのでな……」

そう言ってニヤリと笑うジフ。鬼教官として知られるこの男にしがかれるだなんて、可哀想な新米共だな。まあ、この男に鍛えられた探索者の生還率は高いし、そのしごきに耐えるだけの価値はあるだろう。命の対価になるようなものなんて、この世にはそうそう存在しないからな。

その鬼教官が、そうだ……と言葉を続ける。

「聞いたか？ あの姫さんが、ガルジ遺跡で新しい階層を見つけたって」

「知ってるもなにも、オレもそこにお供してたんだよ」

「ほう……。どうだ？ なんか出たか？」

年甲斐も無く、興味津々といった様子のジフ。まあ、探索者なら誰だって食いつく話だ。とくにその話の中身が我がギルドきつてのエース探索者、「姫さん」ことシルヴィア・ステイナーゼのことじやあな。オレは、肩をすくめて答える。

「さて、どうかな」

「ふうむ、そうか……。まあ、半世紀も前に見つかって、ほとんど探索し尽くされた遺跡だしなあ」

まるでぐらかすように言うオレの、その言葉の裏にあるものを察してくれたジフは、とくに突っ込まずに納得してみせる。ここらへんは、気心しれた探索者同士だけが行える意思疎通ってヤツだ。

そのまま北にしばらく行ったところ、町の中央にある広場の一角に、探索者ギルドがある。昔は国境沿いの小さな村に過ぎなかったこの街が、ここまで栄える切っ掛けとなった「遺跡」関連の施設とあって、なかなかに年季の入った建物だが、今のところはまだ建て替えの予定はないらしい。

まあ、古臭くはあるものの、そこまでボロくはなく、ずいぶんどっしりした石造りの建物だ。入り口に厳つい大男がいて、女子供は間違っても入ってこないような雰囲気醸し出している。・・・探索者にも女はいるし、意外に手練も多いが。

ジフは、建物に入っただけで「じゃあ、またな」と言って奥の部屋へ行ってしまった。オレの方の件には、あまり関わらないほうが良い、と判断してくれたのだろう。

「おい、ようやく来たかヴェルクよ」

大男を顔パスでスルーしてカウンターに近づくと、座っていたゴード爺さんがこちらを見て、かけていた眼鏡を持ち上げながら言う。白髪に白髭、手には分厚い紙の束。

「ああ、こないだの報告にね」

「当事者の中じゃ、お前さんが一番遅いぞ。姫さんなんて、帰還後直接来たというのに。ま、おぬしは大怪我していたっていう話じゃったが、アンナがいたんなら平気じゃろ。……なんじゃ頭を抱えて、二日酔いか？」

オレは爺さんの質問に「さあね」と無言でジェスチャーを返す。それを見た爺さんも、こちらに向けた指をくるくると回して「まあいい」の仕草。

「さてと……」

爺さんは、胸元からペンを取り出して、完全に仕事モードになる。

「それじゃ、今回の英雄さんから、詳しい話を聞こうとするかの」

01. 酔い潰れた英雄（改訂版）（後書き）

2011. 07. 24 改訂

02. 事の発端（改訂版）

一週間前。その日は、遺跡内で新たに発見された階層へ潜るために、腕の立つ探索者を集めてのパーティーメンバーの募集と編成をしていた。

場所は、ギルドの地下にある一室だ。

ギルドにおいて重要度の高い会議などは、普段ここで行われているらしい……が、ギルド内では中堅どころとなったオレも、そこに足を踏み入れたのは初めてだった。

地下にあるせいで窓もなく、ただただ照明魔術の光だけが、周囲の石壁をぼうっと照らし出している。その中央には、大きな四角いテーブルが置かれており、数人の探索者が腰掛けていた。

その一番奥中央に座るのは、新たな階層を見つけた今回の発起人、通称「姫さん」ことシルヴィア・ステイナーゼ。どうやら、元来強い魔力の持ち主が多い貴族の出入りし、まだ十代の半ばにしてかなりの腕前を誇る魔術師だ。

そもそも魔術の素養を持つのは女のほうが多い。ただ、普通は魔術師ギルドに入るか、研究職に就くものが大半で、探索者などという中々危険で泥臭い仕事に就く魔術師は大抵男だ。貴族の女魔術師などというと、うちのギルドでもコイツだけだ。

とくに炎関連の術に関しては、そこらの魔術師じゃ足元にも及ばない。既にギルド内ではVIP扱いで、将来が怖い娘だ。綺麗な見た目も相まって、巷にはファンクラブも存在しているらしい……。

まったく、ついていけねー世界だ……。

「今回集まって頂いたのは他でもありません。先日報告した下層への探索を、貴方がたに手伝って頂きたいのです」

年齢通りの童顔に、大きな瞳を輝かせながら、シルヴィアはそこに集まったギルドのメンバーに告げた。前もって簡単な情報は貰っていたので、その内容に驚きはなかったが……。

「しかし、ずいぶん急ぐんだな、姫さん？」

「ええ、ヴェルクさん。いくら永らく未発見だったとはいえ、いつ下層から未知の脅威が上ってこないとも限りませんし。そんな出目の確率は、早めに小さくしておきたいのです」

それ聞いたメンバーの一人、回復術師のアンナが舌っ足らずな声で頷く。

「そんりゃ、立派なこってすねえ。つーことならば、わたすは賛成だす」

大きなフードを被り、アレルギー対策のフルフェイスのマスクで顔を覆っていて、まるで人形みたいなシルエット。田舎の教会で育った12歳の女の子、アンナだ。コイツが今回のパーティ最年少だ。と言っても、12歳じゃあ大抵のパーティで最年少になるのだが。

戦闘中はフォローが必要なものの、回復魔術だけならギルド内でも指折りの使い手だ。探索の無い時には街の教会で医療ボランティアに参加してるらしく、教会や一部の人間からは、聖女様扱いされている。人柄もあってか、老若男女分け隔てない人気だ。探索に参加する理由も、教会の運営費のためだというのだから、頭が下がる。

「そうですね、可愛いアンナ。どんな危険が迫っても、僕が守りますよ」

アンナに優しい眼差しを向ける男、彼女の保護者兼サポート役の剣士、フェンだ。肩書きの前に凄腕と付くくらいの使い手だが、仲間内では絶賛ロリコン扱いされてる残念美男子。通称「凄腕ロリコン」のフェンだ。……ちなみにこちらは姫さんのソレと違って大っぴらには言えないあだ名だが。

オレとしては、コイツが幼女趣味なのは他に対する競争率が低くなるのでありがたいと思っていた……のだが、それでもモテるのだから始末に負えない。本人はどんなに好意を寄せられようと、意に介していないようなのだが。

「ありがとうございます。急な仕事になりますので、勿論お礼は弾みますわ」

そんな二人に、にこやかな笑顔を向ける姫さん。その隣に座っていたもう一人が、オレの訝しげな表情に気付いてニヤリと笑う。……一体なんだよ？

「なんだあヴェルク。ビビってんなら帰ってもいいんだぞ？」

「別に……。そういうワケじゃねーよ……」

赤髪の女剣士ヴィー。黙っていれば美人だが、いかんせん口が悪すぎる。この街に来てすぐに知り合ったのでイイ加減に付き合ひも長いが、コイツが姫さんとパーティを組むようになってからは、それらしい会話もしなくなっただ……。こうしてパーティを組むのも、久しぶりな気がするが。

ま、いちいちコイツの相手をするのも面倒なので、肩をすくめてみせる。

……その後の話し合いで、その場にいた全員でのパーティ結成となった。おそらく、都合の悪い人間は始めから呼んでいないのだろう。そのくらいの情報網を、彼女は持っているはずだ。自分の動向を知られているというのは、あまり気分の良いものではないけれども。まあ、組まれたパーティのバランスも良いし、オレは文句を言う立場にない。

結局、帯同を同意したメンバーは、

シルヴィア（P Tリーダー／魔術師／炎使い／お嬢様）

アンナ（回復術師／鉋物アレルギー／田舎少女）

フェン（剣士／双剣使い／ロリコン）

ヴィー（剣士／大剣使い／口が悪い）

そしてオレ。

ヴェルク（剣士／盾剣使い／金が無い）だ。

姫さん印のお仕事は、いつもギャラの払いが良くて非常に助かってます……。



翌日。街の周囲にある遺跡の中で、最も初期に発見された「ガルジ遺跡」へと、オレたちのパーティは足を踏み入っていた。

ここが見つかったのは、もう半世紀も昔のこと、それは、当時まだ国境沿いの小さな村の集まりだったガルジの地が、一個の大きな街に発展する契機となった。

ここは、とつくに調べつくされていたと思っていたが、他の遺跡からとある文献を見つけた姫さん……シルヴィアが調査を続け、最近更なる下層への入り口を見つけた、とのことだった。同時代の遺跡を調べていると、稀にそういうことが起こる。

「ここです」

姫さんが、現在知られている最下層にある通路の途中で、立ち止まった。常備されている照明に照らされたそこには一見なものもないが、姫さんが手をかざして封印解除の呪文を唱えると、その壁面にうすぼんやりと新たな入り口が浮かび上がってくる。どうやら、先は小さな小部屋になっているようだった。

ヴィーが先行し、姫さんと共にそのまま、中へと入っていく。オレたちも続いて中に入っていくと、そこはこじんまりとした空間で、入り口からまっすぐいったところに更なる地下へと続く階段があった。

「なるほど、ここから先が未知の領域ですか」

「ええ、フェンさんには、ヴィーさんと共に前衛をお願いします。十分に気をつけて」

「よォし！」

先鋒を務めるフェンとヴィーが、他のメンバーに先立って新たな下層への階段を確かめる。入り口へと続く小部屋は、長く魔術的結

界の張られていた場所らしく、周囲には他の探索者やモンスターによって荒らされた形跡がまるで無い。階下へ続く階段も、キレイなものだ。

「シルヴィ、照明魔術を頼むぜ」

「はい、了解しましたわ、ヴィーさん」

ここまでは、遺跡内に取り付けられた照明のお陰で不便はなかったが、ここから先は魔術師によるフォローが必要になっていく。照明魔術は、遺跡を探索する際に必要な最も初期の魔術の一つで、腕の良い魔術師になればなるほど、周囲を明るくし、数を多く照らすことができる。姫さんの場合は、その光に指向性を持たせることも可能で、不用意に誰かの視界を邪魔することも無い。

魔術師シルヴィアと、大剣使いのヴィー。一見、気のあわなそうなこの兩人だが、普段は二人だけのパーティで探索しているくらいで、行動の連携が非常に取れている。

とくにパーティでの戦いとなると、戦術眼を持つ人間と、それを信頼して実行するメンバーとの連携がなによりも大事になる。そういう意味では、この二人を含めたパーティ編成というのは、そこらの野良パーティよりいくらか安心ができるというものだ。なにせ、ギルド内でもトップクラスの実績を持つバディなのだから。

「ヴェルクさんは殿をお願いしますわね」

「了解」

明るくなった下層へ続く階段を、ヴィー、フェン、姫さんの順番で降りていく。

「んでわ、オラもお先に失礼するべや」

「ああ、転ぶなよ」

「なはは、そーんなドジじゃな——んぎや……っ!!」

言ったそばから瓦礫に足をとられてすっ転ぶアンナ。それを後ろから抱きとめる。殿担当のオレは、アンナを階段にしっかり立たせる。……まったく、まるで子守だな。

「はあ……。まったく気をつけろよ」

「す、すまね」

と、不意に殺気を感じる。……ああ、フェンの視線が、怖え。マジ怖え。ありゃあ、本気で人を殺せる目だよ。アンナ、本当にしっかりしてくれよ。オレがああ、のロリコンに殺されかねんからな……!!

「……けっこう、広いべな」

下層に降りると、案外広い通路が続いていた。どうやら上層と同じ迷宮タイプの遺跡のようだ。この上層に出るモンスターはスケルトンやゴブリンといった比較的弱いものたちだが、かといって、この階層にどんなモンスターが出るか。油断はできない。同じモンスターにも、個体差があるしな……。

横幅5メートルほどもある通路では、オレが前衛になっても二人の邪魔になるだけだ。よって、陣形はこのまま進むことになった。

「何の気配も無いな……。気味が悪いくらいだぜ……」

「ヴィーさん、気を抜かないように」

「わかってるっつーの」

フェンの心配は杞憂だ。ヴィーの全身からは、絶え間ない気の発露を感じる。それに、オレのすぐ前に行く二人の少女も油断はしていない。アンナはむしろ、若干緊張しているようだった。さっきもすっ転んでたしなあ……。

「おいアンナ、お前は肩の力を抜いてくれ」
「わ、わかってるだよ」

だめだこりゃ。しかし、パーティ唯一の回復要員にこんな状態でいられては、いざというときにピンチに陥りかけない。なにか冗談でも言えれば良いんだが、そんなボキャブラリーは無いのだった。
……お、そうだ。

「終わったら、知り合いの店で特製ベリーパイ奢ってやるから」

しかし、冗談替わりに言ったつもりのこの一言に、意外な反応が返ってきた。

「特製ベリーパイ？　そ、それってまさか西の風って店のだか？」
「お、おう。なんだよ、目の色変えて。ナターシャのこと知ってるのか？」

「とんでもねえ！　西の風のナターシャさまといったら、女子の間では神様だべさ！」

「はあ……？　アイツが？」

さっきとはうってかわって、瞳をキラキラを輝かせながらこちらに詰め寄るアンナ。いや、テンションの上がり方が異常だぞ。前向け、前。

知り合いのナターシャの店が、最近街の女子供にやたら人気があ

るという話、本当だったのか。本人曰く、とくに特製ベリーパイは朝一番で並んでも入手困難とかって話だったが……。オレは甘いものに興味が無いので、思いつきり冗談かと思っていた。

「ヴェルクさん」

「あ、姫さん、すまん。探索中に不謹慎だった――」

「その話、本当ですか？」

……え。

「おいヴェルク、その話マジなんだろうな？」

「不埒な誘い、と言いたところですが、僕も興味がありますね」

おいおい、ヴィーにフェンもか？ ……思わぬところで、知り合いの凄さを実感したオレは結局、この仕事のあと全員に特製ベリーパイを奢るハメになった。とりあえず、みんな前向け、前！！



その後、慎重な足取りで階層を二つほど下がって……。そこにあった封印の扉を姫さんが開く。そこには、これまで無かったモンスターの気配があった。

「さあて、ようやくお出ましだ」

ヴィーのその声に合わせて、通路の角から一匹のモンスターの一群が現れた。死霊系モンスターのスケルトンだ。ご丁寧に、全身を甲冑で覆い、手にはそれぞれ剣、盾、槍などを装備している。規則

正しいその動き、どうやら通路を巡回しているらしい。

スケルトン自体、決して手ごわいモンスターでは無いが、固体によつては弓矢を使うものもいたりして、厄介な場合がある。しかし、今回は近距離用の武器を持っている個体ばかりだ。このパーティの敵ではないだろう。あの骨に宿っている魂が、よほど上質のものでない限りは。

向こうも、こちらの存在に気付く。

『我が名において命ずる。魂亡き者を滅せよ、業火！！』

姫さんが古代語でそう唱えた次の瞬間、こちらのファーストアタックが敵の前衛を襲った。魔術によつて生み出された高熱の炎は、スケルトン三体の体を燃やすどころか、その甲冑すら溶かしはじめ。炎に触れた部分が、熱で真っ赤に光り、闇の中で浮かび上がっているように見えた。

燃えた敵の体と溶けた鉄の独特の匂いの中、こちらの前衛二人組が通路を駆ける。そのヴィーとフェンの体には、すでにアンナによる守護魔術が掛かっていて、通路内の熱気から二人を守っていた。うん、アンナは緊張から上手く抜け出してくれたようだな。

「でえええりゃあー！！」

気合一閃、ヴィーが手にする大剣が唸りを上げてスケルトン二体をその鎧ごと上下に真っ二つにし、その下をくぐる様にして更に前方へと駆け抜けたフェンが、後続のスケルトン二体の首を双剣で撥ねる。これで七体。うーん、お見事。

「……暑い」

後方で、ただ一人守護魔術を掛けてもらっていないオレが、前方から漂ってくる熱気に文句を言うころには、戦闘は終了していた。

02. 事の発端（改訂版）（後書き）

2011. 07. 24 改訂

03. 封印の扉（改訂版）

最初の戦闘からしばらく経ち、オレたちは大分下層の方へ降りてきていた。

「おいおい、またかよ……」

前方で、ヴィーが封印魔術の掛かった巨大な扉を見上げている。その台詞が指し示すとおり、階層を下るごとに数回、封印された扉を魔術で開錠する作業を繰り返していた。一層ごとの迷宮自体が広いもので無いため、次の階層への扉は比較的簡単に見つかるのだが、その全てが嚴重に封印されていたのだ。

こういった封印を解除するには、特殊な古代の魔術に精通した者の存在が必要になるが、このパーティに限っては、そういった心配は全く要らなかった。

「シルヴィアさん、頼みます」

「了解ですわ。周囲の索敵をお願いします」

そうフェンにお辞儀をして、姫さんが一步前へ出る。今回、他の遺跡で見つけた古代の文献を自分一人の手で読み解いたように、彼女の中には常人には及びもつかないほどの「知識」が蓄えられている。それを駆使すれば、一見解読不能な文字や魔術も解き明かすことができるのだ。

「……これは、また別の種類の封印ですわね」

しかし、そんな姫さんでも、今回の多重封印には手こずっている

様子だった。どうやら扉ひとつひとつに掛かっている封印魔術が個別のものらしく、それぞれの解除に結構な時間を要している。そのために、探索のテンポが悪くなってしまうている状態だ。

地上では、そろそろ日没といったと頃合だろう。正確な時間は、やはりいつでも万能な姫さんの魔術頼みになってしまいが……ほぼ、間違いないはずだ。

集中している姫さんの邪魔にならないよう、小声で話す。

「なあ皆。今日は、ここらで一旦休むべきじゃないか？」

「ああん？　だらしねえなあヴェルク。おっさんにはキツイか？」

「あのな……」

オレの言葉に、フェンを傍らに従えたアンナがこちらを向く。

「ヴィーさん、オラも少しだけ横になりてえだ」

「そうですね。僕も、そろそろ今日は休みたいかもしれせん。敵も、強くなってきましたし」

「ホラ見ろ。お前の体力が異常なんだよ。大体オレは、まだ30だ。おっさん扱いされる年齢じゃねえ」

「アタシから見たら十分トシだよ。……ま、アンナが言うんじゃ仕方ねーか」

肩をすくめて腕を組むヴィー。たしか今年で18歳……だったか。出会ったところはまだまだガキだったが、今じゃギルド屈指のパワーファイター、か。街でも姫さんに次いで美人だと評判で、鍛え抜かれたスタイルも申し分ない。これで口の悪ささえ治ってくれば、恋人の一人も出来るんだろうが……、ムリだろうなあ……。

「おいヴェルク、今すげえ失礼なこと考えなかったか？」

「……そんなことないさ」

「なんだよ、その間」

変に勘が良いんだよなあ、コイツ。それも昔から、だけれど。

「気にするな。ていうかお前、オレにだけやたら当たりがキツくないか？」

「な、なに言ってんだよ。んなわけねーだろうが」

オレの言葉に、何故か慌てる様子のヴィー。一体、どうしたってんだ？

……と突如、背後で「気」が爆発的に膨らむ気配。慌てて振り向いた直後、姫さんのいた方向で爆炎が上がる。あまりに衝撃的な音と、その熱波に、全員が一瞬身を竦める。閃光の中に浮かび上がった姫さんのシルエツトが、網膜に焼き付く。

「これでよし、ですわ」

思わず瞑ってしまった目を開けると、そこには炎が燃え盛っていた。

姫さんこと、シルヴィア・ステイナーゼの放った業火が、迷宮内を明るく照らし出していて、もはや照明魔術が必要無い状態だ。封印されていた扉は吹き飛び、その周囲の石壁がドロドロと溶けていて、もはや溶岩と化している。

他人と比べて無尽蔵の魔力を持つという姫さんだが、これは……やりすぎじゃねえか？

「な、何が起こったのか？」

「驚かせてしまって申し訳ありません。ですが、あとちょっとのところで、その、封印が解けなくなつて……」

つまりイライラしてやりました、つてことか。いくら可愛い娘ぶつても、魔術で強固に封印された扉を、無理矢理吹き飛ばすって……人間離れしすぎだろ……。古代の魔術師が、どれだけ苦労してこの封印魔術を編み出したと思つてんだ。

「さあ、それでは。そろそろ一旦休息をとりましょう！」

どうやら、作業(?)をしながら、こちらの会話を聞いていたらしい姫さんが、両手をパンツ、と合わせて気を取り直すように言つた。その笑顔が、背後からの炎に照らされて、まるで悪魔のように見える。

なににせよ、話が決まったので次の行動を進言してみる。

「……暑いし、少しここから離れねえ？」

ここから早く離れたい。姫さんを除く皆も同じ意見だったのか、コクコクと頷いた。



探索開始から、2日目。しばらく探索していると、新たな封印の扉に突き当たった。時間はかかったが、今回はきちんとした手順で

封印を解くことに成功した。これには、パーティー一同ホッと胸を撫で下ろした。……アレはなんというか、心臓に悪い。

「なんだべ、ここは……？」

アンナが思わず、そう呟いてしまったのも無理はない。オレたちが出たのは、やたら広く豪華な作りの空間だったからだ。もちろん、あちらこちらには既に朽ち果てていて、どうにも不気味な雰囲気漂わせてはいるが、こんな空間は、上層を含めてこれまでに無かったものだ。

「大分老朽化してますけど、造りは豪華、ですねえ」
「うーん、お宝の予感」

朽ち果てているとはいえ、豪華な装飾を施された室内を眺めてフエンとヴィーが暢気に言う。念のため、忠告しておく。

「おい、ヴィー。油断するなよ」
「わーってるっつ。……少しはアタシのこと、信用しろよな」
「なんか言ったか？」
「別に」

ヴィーは詰まらなそうに片手を挙げた。なんだか気分を害したようだが、いちいち気にしていたらキリが無い。反抗期の娘がいたらこんな感じだろうか、などと考える。

しばらく周囲を調べるが、敵の気配も、お宝の気配も全くと違っていいほどに無い。少し落胆してしまう。おいおい……あの封印は、なんのためのモンだったんだよ。それとも、この場所自体に、なにか重要な意味があるとか？ もしそうなってくると、オレには全く

旨味の無い話になってくるなあ……。まあ、今回の探索で姫さんから頂ける報酬だけでも、十分といえば十分なんだが。

「どうやら、近くに敵の気配は無いようですし……。少し手分けして、調べてみましょう」

「了解です、シルヴィアさん。さあさあ、アンナはこちらへどうぞ」
「じゃあ、アタシとシルヴィのペアだな」

そう言つて、フェン&アンナペアと、ヴィー&姫さんペアに分かれる。うん、バランスの取れた組み合わせだ……。ってアレ？

「おい、オレはどうすんだよ」

「あーん？ おっさんは退路確保に決まってるんだろ。ここに待機」

おいおいマジかよ……。などと言っている間に、それぞれ思い思いの方向に散っていった。基本的に見つけたお宝の分配優先度は見つけたものが高くなるのだから、これは圧倒的に不利な状態だ。まあ、ここまで最後尾で戦闘ではラクしてたからなあ、仕方ないか。

若干無然としてしまう感があるが、どうしようもない。元々、2対2対1の組み合わせだ。どうしても最終的には少数派になってしまう。オレは辺りを見回して、入り口間近にあった椅子に腰掛ける。どうやらここで何も見つからなければそのまま引き返すことになりそうだ。さっさと索敵を済ませて、少し休ませて貰おう。

ここに来るまで何もしていないように言われたが、その実、気を探ることで密かに敵の所在を探っていたため、神経を使っていたのだった。

まあ、「気」だなんて、言っても理解されないの口には出さな

いが。この技術のお陰で、これまで所属したパーティで死人が出たことは無い。どうやらそれが、ギルド側にも良い印象を与えているらしく、重要な任務にプラスαで派遣されることも多かったりする。お陰で死にそうな目にも何度かあったが、厄介なことにギャラが良いいんだよなあ……。

と、そんなことを考えながら、「気」を使った索敵を行っている
と……。

「アンナ!!」

フェンの、悲鳴に似た叫び声が広間に響き渡った。

03. 封印の扉（改訂版）（後書き）

2011. 07. 27 改訂

04. 鎧の怪物（改訂版）

オレは、索敵への集中を解いて声の発生源へと駆け出し……思いがけない光景を目にした。玉座に見えなくもない古ぼけた椅子の傍でアンナがぐったりと床へ伏せ、そのすぐ隣に立ち上がっている漆黒の鎧に向かって、フェンが双剣で高速の斬撃を放っていた……のだが。

「嘘だろ……？」

その鎧は、最小限の動きでそれを躲してしまった。フェンの實力は、ギルド内でもトップクラスに位置するものと言われており、その剣の軌道を捉えることすら並の探索者にはできないというのに。そこへ、声を聞きつけたヴィーと姫さんが駆けてくる。すぐさま詠唱を始める姫さんを背に、そのままダッシュで漆黒の鎧へと接近したヴィーは、長大なその大剣の間合いギリギリから、その刀身を一気に振り下ろす。駆ける速度をも上乗せしたその一撃は、恐らくミノタウロスやオーガといった、遺跡に生息する大型のモンスターをも一刀両断してしまうだろう。

しかしそれもまた、漆黒の鎧には通じなかった。片手の甲を剣の「腹」の部分に合わせ、振り下ろされれば変えようのないハズの剣の軌道を、無理矢理変えて見せたのだ。コレには、地に伏したアンナ以外のパーティ全員が目を瞠る。

「下がって!!」

そこへ、詠唱を唱え終えた姫さんの声。見ると、十数本の灼熱の矢が、空中に停止していた。本来、相手に火を射掛けるだけのハズ

のその魔術は、姫さんのその技量と魔力によって、岩をも焼き貫く極悪なものに変貌している。局部的な攻撃力と固体への命中力も高く、アンナの気絶によって保護魔術が切れている現状では、味方への魔術による熱波の影響を一番抑えられる攻撃手段だろう。こんな時でも、いや、こんな時だからこそ、姫さんは冷静だった。

「くっ……」

アンナを抱え、どうにか退くフェン。ヴィーもまた、その場から動こうとしないその「怪物」相手に、慌てて飛び退いた。そこへ、姫さんの放った高速高温の矢が放たれる。鎧の怪物は、それでも片手を上げるだけで動かない。終わった、と誰もが思ったその時……。

「……なんだありゃあ」

「あ、あれは……」

その片手の先、空中に漆黒の空間が開かれ、その直前で、姫さんの放った炎の矢が、まるで強風に煽られてバラバラに飛ばされるボロ屋根のように、魔力へと分解されて吸い込まれていく。やがてそこに現れたのは、その鎧よりも更に漆黒に塗られた剣。いや、「塗られた」というよりも、まるでそこだけポツカリと世界に色を塗り忘れたかのような、異様な存在感がある。……これはマズイ。オレは、その状況を見て撤退を判断し即座に動く。腰につけた探索用ポーチから球状の物体を取り出し、怪物へと投げつける。これも、殿の役目だ。

「退くぞ!!」

探索者御用達の撤退球。それを相手は手にした漆黒の剣で正確に切り裂くが……しかしソレはこちらの迷惑通り。切り裂かれた撤退

球はその役割を正常に果たし、対象者の視界を遮る煙幕と、それぞれの器官が発達したモンスターを惑わす、特殊な匂いと音を発した。……が、オレはそこで気付く。相手の「気」に、些かの迷いや戸惑いが無いということに。鎧の怪物がいた場所を中心に煙幕が広がる中、オレは駆けた。目指すは、動き出した怪物と、撤退する仲間たちとの間。そして――。



探索3日目。

命からがら、どうにか広間から撤退したオレたちは、一つ上の階層にあった比較的綺麗な小部屋に隠れていた。その部屋の隅には毛布が重ねられ、一人の少女が横たわっている。それを横目に、オレは扉の外の「気」を伺っていた。今のところ、「あの怪物」が階下から上がってくる様子は無い……。

「ヴィー、少し頼む」

「あ、ああ……」

そう言っで見張りをヴィーに任せ、アンナの容態を診ていた姫さんに近づくと、彼女もこちらに気付いて立ち上がる。その顔には、心なしか焦りの表情が見られた。

「……駄目です。我が家に伝わる知識にも、該当する呪術はありませんわ」

「ってことは、結局アイツをやらないといけないワケか……」

オレは、姫さんの言葉を聞いて、額に手を当て天井を仰ぐ。そして溜息を一つ。

周囲にアレルギー反応の出る鉱物がないことを確認してマスクを外したアンナは、目を閉じて、荒い呼吸を繰り返している。こうして見ると少女らしい可愛いらしい顔をしているのだが、その表情は辛そうに歪んでいる。フェンの話によると、広間の隅でホコリを被っていたらしい「あの鎧」に、アンナが手を触れた瞬間、いきなり昏倒してしまったそうだ。どうやら、途轍もなく強力な呪いが張られていたらしいが……。普段、教会で笑顔を振りまいているという少女の表情は、今は苦悶に満ちている。それがまるで自分のことのように、沈痛な面持ちでアンナに寄り添うフェン。二人の様子を見ながら、出口のほうへ近づき、階下の方角を見やる。

「なるほどね。ここまで俺たちが解除してきた封印は、外からの侵入者を拒むものではなく、内側に封じ込めた、あの化け物を外に逃がさないためのものだった……ってわけだ」

「どうやらそのとおりのようですわ。私は自身の浅はかさのために、途轍もない怪物を開放してしまったようです……」

「……………」

真っ黒な、鎧の怪物。手には、漆黒の剣。

鎧そのものも、禍々しい異形の魔物をモチーフにされたものらしく、見たものに強烈な印象を与えるものだったが……。なによりも、その実力が異常だった。回復術師として呪いの魔術には耐性のあるハズのアンナをあっさりと昏倒させ、剣士としては一流であるフェンの剣捌きを最小限の動きで潜り抜け、鋼鉄の鎧をも叩き斬るヴィーの攻撃を片手で弾き返し、姫さんの規格外の魔術を、手にした剣で完全に吸収。オレも、パーティの撤退を図った際に盾と鎧の脇腹

部分を粉々に砕かれた。危うく、腹の中身を床にぶちまけるところだ。

あとひとつ何かが違っていれば、あそこで全滅していても全く不思議ではなかった。

「シルヴィのせいじゃねえよ……。あんなの、誰が想像できつかよ……」

しかし、そう言って姫さんを慰めるヴィーの言葉にも覇気が無い。先ほどヴィーは、ギルド屈指のパワーファイターでありながら、大剣による渾身の一撃を片手で弾かれてしまった。これまであらゆる敵に対して必殺の一撃だったソレを、いとも簡単に払われる。その実力差に、未だ愕然としているのだろう。

「お前も、あんまり落ち込むな」

「……わかってるよ、ヴェルク。……まだ、終わってないからな」

「なら、良いんだが……」

いつもの威勢の良さも、鳴りを潜めている。勝手な話だが、これはこれで調子が狂うな……。

「とりあえず今のところは、アンナさんの容態は安定しています。けれど……」

「このまま動かしても大丈夫だとは限らない、と」

「はい……」

はあはあ、と苦しそうな呼吸を繰り返すアンナと、その手を握るフェン。本来、未知の呪いがどういう経路で「感染」するかも分からない状態での安易な接触は控えさせるべきだが……。どうやら、

それはムリそうだ。フェンから発せられる「気」には、鬼気迫るものがある。

通常、呪いを解除するためには、解呪魔術によって呪いそのものを除去する方法と、呪いをかけた本人を排除する方法とがある。しかし、そのどちらにも一定のリスクがあって、前者の場合は解呪に失敗すれば、その解呪魔術を使った人間に呪いが跳ね返る可能性があること。後者の場合は、呪いが術者の死によってより強化されてしまう可能性があること……などが挙げられる。前者が上手くいきそうにない今回の場合は、必然的に後者を選ばなくてはならないワケだが……。

「魔法の通じない鎧の怪物か。ヤツと戦うにしても、姫さんは足手まといだな……」

「返す言葉もございません……」

力なくうな垂れる姫さん。そう、これが一番の問題だ。先ほどの戦いで、パーティの最大火力である姫さんの最大魔法が、空気中で魔力そのものに分解されて漆黒の剣に吸収されてしまった。これは、ただ魔術が通じないだけという場合より、タチが悪い。例えば、先日のように炎の温度で壁や床を溶かして足場を崩す、などといった戦い方も出来ず、最悪吸収された魔力によって反撃を食らう可能性すらある。第一、あの怪物相手では、前衛に後衛を守るだけの余裕が無く、戦うとなれば魔術を打ち込む隙すら得られないだろう。巻き添えを食らうこと前提で接近戦を繰り返す覚悟があれば別だが。……確実に死ぬだろうな。

ヴィーが、姫さんへと顔を向ける。

「なあ、アタシは初めて見たんだが、アレはやっぱり……」

「ええ……。魔剣、でしょうね……」

光を一切反射していなかった漆黒のソレは、魔剣と呼ばれる超一級品の「遺物」だ。古代に作り出されたと言われる魔剣は、総じて強力な武器であり、先の戦争でも一握りの使い手たちによって大いに活用された。例えば、オレたち探索者が入手したとしても、恐らく所持し続けることは難しいだろう。不用意に国外に持ち出そうものなら、国家間の問題になってしまうくらいのシロモノだからだ。ソレを、あれほど異常な実力の持ち主が使っていると……問題は、更に深刻になる。

「さて……」

そう呟いて、オレは部屋の中央へ進み、周囲を見回す。

敵への対抗手段を失った姫さん。茫然自失のヴィー。呪いを受け動けないアンナに、その付き人のフェン。現状のパーティは、最悪の状態だ。……しかし、このままここで、ただただじっとしているワケにもいかない。唯一、精神的なダメージの軽いオレが、部屋の真ん中で皆へ提案する。

「どうする？ 一旦、ムリにでも戻って体制を立て直すか？ それとも……」

「冗談じゃない！！」

それまでアンナの傍に膝をついていたフェンが急に立ち上がりオレの言葉を遮る。

「ヤツは僕の手で殺すッ！！ アンナを、死なせはしない……ッ！！」

「おい、フェン……」

ヴィーが止めるのもままならぬ内に、憤怒の形相で部屋を出て行ってしまふフェン。それを見て、腰を浮かせかける姫さんを手で制し、ヴィーと共にアンナを守るように伝える。姫さんは、アンナの呪いを調べるために長時間集中していたし、術師二人にはヴィーの護衛が必要だ。……まあ、こういうのは年長者の役目だしな。

「あの馬鹿は、オレが連れて帰るよ」

「申し訳ありませんが、よろしくお願いいたします」

結局立ち上がり、深々とお辞儀をする姫さん。出口を守りながらフェンを止められなかったヴィーのほうも、どこかバツの悪そうな顔をしている。まあ、アイツがあんな風になるとは思わんよな。しかしヴィーは意外と、失敗を気にするタイプなのかも知れん。……いや、昔もこんなこと、あった気がするな。

「なあ、ところで姫さんさ」

「……なんででしょう？」

ガチャガチャと、フェンを追いかけるために全身の鎧を外しながら、それまでと違った軽い口調で言うオレに、姫さんと、ついでにヴィーも首をかしげる。

「あの化け物を仕留めたら、いくらくれる？」

ニヤリと笑うオレの言葉を冗談だと思ったのか、曖昧な表情になる姫さんとヴィー。ていうか、ほとんど呆れているようにも見える。こちらら帰ったら皆に特製ベリーパイを奢らなきゃならない約束だからなあ……。

一人でも死なれたら、困るんだよ。

04. 鎧の怪物（改訂版）（後書き）

2011.08.11	2011.08.01
文章追加	改訂

05. 怪物との戦い（改訂版）

幸いなことに、鎧の怪物は例の広間から動いていなかった。

「アンナを、あの娘を治すにはどうしたら良い!? 答えろ!!」

フェンを追って広間に入ったところで、絶叫に近い問いかけが耳朶を打った。ふう、どうやら間に合ったようだ。まったく、激昂するのの良いが、少しは他人の迷惑も考えてくれよ。

『……簡単ダ。我ヲ倒セバ良イ。ソレデ、娘ノ呪イハ解ケルデアロウ……』

怪物は、広間の奥にある玉座らしき椅子に腰掛け、つまらなそうに言った。そりゃそうだ、一度戦って圧勝した相手なのだから、興味がないのも頷ける。……てか、アイツ喋れるのか。たしかに、その技はモンスターのものではなく、卓越した人間のソレだったが。

なんにせよ、お陰でアンナの呪いを解く方法が分かった……と、その言葉を聞いたフェンの殺気が、露骨に膨れ上がっていくのがよく分かる。おいおいおい、キャラが違わねーか？

慌てて、フェンと怪物の間に割って入る。

「おい、フェン」

「邪魔するな……ッ!!」

「落ち着け。今のお前じゃ、どうあがいても倒せる相手じゃない」
「黙れえッ!!」

正気を失い、オレに向かって剣を向けるフェン。まったく、最初の印象とはまるで別人だな。……まあ、最愛の者であろうアンナがあんな目にあっただから、見境を無くしてしまうのも仕方が無いのかもしれないが。オレは、ため息を一つついて、飛び掛ってきたフェンに向かって剣を抜く。

フェンが激情に駆られて双つの剣を振るおうとしたその瞬間の気……「機」を捉えて、オレは最小限の動きでそれらをかわした。フェンの両目が、驚愕に見開かれる。おいおい、そんなに驚くなよ。

『ホウ……。我ノ攻撃ヲ防イダノハ、偶然デハ無カッタカ……。』

ソレを遠目に観ていた鎧の怪物が、昨日のことを思い出したのか、感心したように呟く。撤退時、オレは鎧の怪物の「機」を察知して、繰り出された攻撃を受け止めたのだった。それでも上手く受け切れず、盾と鎧は破壊されてしまったのだが。……結構値段の張った、良い品だったというのに。

「ぐは……。ッ!？」

カウンター気味の峰打ちを食らってフェンが、広場に床に蹲る。オレはソレを抱えて出口へと歩き、最初に訪れた際に腰掛けた椅子に彼を座らせた。男のくせに軽いな、コイツ。

「……悪いなあ、フェン。アイツはオレの獲物なんでね」

怒りに任せた渾身の攻撃を全て受け止められた拳句、手加減された攻撃を受けて地面へと沈んだ、ギルド屈指の双剣使い。いかな達人であろうとも、冷静さを欠いた状態である怪物に挑めば、その結果は火を見るより明らかだ。恐らく、先ほどのフェンは、その実力

の半分も発揮できていなかっただろう。

大抵、何かを為そうとする時にこそ、冷静さが求められるものだ。……なんて。それは、自分に言い聞かせるようなものだったけれど。振り返り、その脅威を前にして、オレは冷静を装う。

「さて、アンタの相手はオレ一人だ。正々堂々とやろうぜ？」

『……ッガガガ、我ヲ前ニシテ其ノ態度トハ、面白イ奴ダ。ヨカロウ……ソノ勝負、受ケテヤル』

ゆらりと、玉座から立ち上がる怪物。黒い鎧と共に全身に纏わせた気を、まるで隠そうとしない。まさに、王者の風格といったところか。

機。

瞬時に目前へと迫った怪物による一撃目の居合いを、どうにか身体の寸前で受け止めるが、その威力にギシ、と身体と剣とがきしむ。……くそっ、すごい威力だな。

『ホウ、我ガ機ヲ捉エタカ。生身ノ人間ニシテハヤリオル』

「ぐっ……!!」

機。

続けざまに放たれる斬撃を、どうにか受け流す。それでも手が痺れる程の威力だ。こちらの剣先が、僅かに欠けて空中に飛び散る。

畜生、コレだって大金払って手に入れた業物だっていうのに……!!

機。

次に放たれた斬撃を利用して、大きくバックステップ。間合いをとって気絶しているフェンのそばへ。このままでは手数で負けると考え、床に落ちていたフェンのメインソードを左手に構える。……よし、コイツも中々良いシロモノだな。借りるぜ、フェン。壊れても弁償はしねえがな。

「はぁ……はぁ……。ふう」

興味深そうにこちらを見る怪物を前に、努めて呼吸を整える。

相手の発する「気」を感知し、攻撃のタイミング……「機」を読むことには自信があったが、その発露と攻撃との間があまりに少なく、剣捌きの速度も異常だ。昨日、攻撃を受け流せずに盾と鎧とを破壊されたのも、そのせいだった。ただ、昨日のアレがなければ、今こうして攻撃を凌げなかったかもしれないな。

しかし、今もこうして相手の動きについていくのがやつとの有様だ。こちらら、盾や鎧を捨て、最大限に身軽になっているというのに。これは、思ったよりも面倒なことになりそうだ。あの状態のフェンじゃ相手の動きについていけず、やはり殺されていただろうが……果たしてオレはどうだろうか？

『ガガッ、ココマデ我ノ攻撃ニ命絶エルコト無ク耐エルトハナ』

「……お褒めに預かり光栄だ」

途轍もない集中力を要求され、こうして対峙しているだけで体力を消耗していくのを感じる。どうやらこれは、これまでにはないほどの修羅場らしい。正直、逃げ帰りたいくらいだ。しかし、一人だけならどうにかなるかもしれないが、フェンを担いで帰らにやな

らん。余計な手間を増やしやがって……と、気絶させたのはオレなんだよな……。

『ナラバ、コレナラ如何カナ?』

ズズズズ……、と圧倒的かつ背筋が凍るような嫌な感覚が、部屋中に広がっていくのが分かる。これは……。

「おいおいおいおい、この化け物め……ッ」

『ガガガ、才褒メニ預カリ光栄ダ』

通常、人と相対するときにおいての「気」の発露は、相手に「機」を読まれることにつながる。よって、憤怒や激昂といった感情から冷静さを欠いていたり、疲労や体調不良などによる精神の乱れがあれば、それは即ち死に直行することを意味する。

しかし、この鎧の怪物の殺気は、この空間全てを包んでしまった。その「気」はまるで真夏の日差しのように、全身をくまなくピリピリと差してくる。これでは、より集中しなければ、殺気の発露からの「機」の察知どころか、その方向すら掴めない。

殺気を隠さず、あえて放出することで微弱な「機」の察知を防ぐ。そんなことが生物にできるものなのか……? 今更だが、やはりコイツ……普通じゃない。

『ソウイエバ、貴様、名前ハ何トイウ?』

「ふん……オレに勝てたら教えてやるよ」

そう言って、オレは自分の「気」を内に治めていく。目の前の怪物が行っているのはまるで真逆の方法で、己を消していく。特に、

この「気」の充滿した空間の中でなら、より有効な手段だろう。

それを察して、鎧の怪物がニヤリと笑った。……そんな気がしたのは、相手の「気」に当てられているためだろうか。黒い兜に覆われた顔を伺うことはできない。

『ソノ言葉、自暴自棄トハ違ウヨウダナ。気二入ッタゾ小僧!!』

気気気気気機気気気気機気気気気機気気機気気機機機機機
キキキ――。

ガッガガガガガッ!!と、広間中に金属音を反響させながら、オレと怪物は高速で剣を撃ち合わせていた。

相手の「機」を捉えることが難しくなったことで、向こうの手数を減らすためにこちらから仕掛けざるを得ない、といった状態だが……オレが二振りの剣で繰り出す斬撃の防御にも余裕のある鎧の怪物は、時折反撃を交えて応戦。攻撃の最中であっても、こちらはそれに反応するために極限の集中力が要求され、脳の神経が焼き切れそうになる。

充滿した怪物の「気」の中でまだ、どうにか「機」を捉え続けるオレと、目の前で繰り出された攻撃を、ただただより速いスピードで受け止めるだけの怪物。そんな戦いをしていけば、消耗の度合いにも明らかな差が現れ始めるのは当然と言えた。もはや、ただただ「機」に反応するだけでは間に合わない。先の先、さらにその先を読む必要があった。集中しろ、ヴェルク……ッ!!

『ガガッ、ソノ研鑽ハ認メルガ、マダマダ実力不足ダナ。残念ダ』
「くっ、そ……う、かよッ」

事実、既に攻守は逆転していた。こちら先読みへの「慣れ」によって相手の動きには辛うじてついていけているが、所々で防御が間に合わなくなってきた。上腕、大腿部、首筋、下腿部と、次々に浅い切り傷が刻まれていき、それによって自分の動きが鈍くなっているのを感じる……。両手の剣も、刃先は既にボロボロで、刀身からはギシギシという音がしだしており、今にも碎け散りそうだな。このまま戦い続けられれば、十中八九こちらが死ぬハメになるだろう。ならば……。

オレは、相手の気が充満する部屋の中で極限まで己を消していく。しかし、剣捌きは全て後手。果たして、チャンスはやってくるのか。

そして――。

「……っ!!」

相手の剣がオレの左前腕部を切り飛ばした。失われる左手の感覚。フェンの剣を握ったままのその腕はビチャリ、という音と共に広間の床に落ち、切断面から溢れた血が赤い模様を描いた。

『イイ加減ニ、終ワラセテヤロウ!!』

そこへ、トドメを刺そうとこれまで以上に力を込めて振るわれる斬撃。その動きを辛うじて読んで、右手に残った剣で受け止めるが、そちらも物理的な限界を超え、刀身が弾けるように碎け散ってしまう。その瞬間……。

オレは残された右手に握っていた剣を、そのまま空中に手放した。

『ナニ……ッ!?!』

姿勢を低くし、迫りくる斬撃と碎けた己の剣とをギリギリでかわしたオレは、瞬間的に出せる自己のトップスピードへと達し、相手の懐に深く潜り込む。戦いの中で、己の「気」を極限まで消し続けていたオレの「機」を、鎧の怪物は捉えることはできなかったのだろう。そこで初めて、狼狽した声を出してみせた。

左腕から流れる血が、オレのその動きをなぞる様に空中に漂い、背後では、怪物の斬撃を受けて碎けてしまった愛剣が、バラバラと床に落ちる音が響く。まるで、時の流れが遅くなったかのような感覚。……久しぶりに味わう、極限の戦いだ。オレは思わず、ニヤリと笑う。

「発ッ!!」

相手の間合いの中に潜り込んだオレは、己の中で練り上げた「気」を相手の胸に当てた手から体内にぶち込む。直後、鎧の胸部が膨らみ、金属音を立てて内側から炸裂する。その碎け散った破片が、オレの頬を掠めて血の筋を残す。

一步二歩と、胸を押さええて後退する鎧の怪物。そして、ガガッ……と笑って剣を振り上げてオレを見下ろし……。

『グ、ググ……ッ』

……ガシャン、とそのまま後ろに倒れ込んだ。鎧の怪物が持っていた漆黒の剣がその手を離れ、自重のみで床へと突き刺さった。

そして、しばしの静寂。

『……成程。我が戦ッテイタノハ、剣士デハ無ク拳士デアツタカ。練リ込ンダ気ヲ、寸分ノ狂イ無ク相手ノ体内デ爆発サセルトハ、カナリノ使イ手ダナ……』

「アンタに、この手を通じるかは賭けだったけどな……」

オレは、ハア、ハアと肩で息をしながら座り込むと、腰の探索用ポーチから包帯を取り出し、どうにか左腕の切断面の止血をする。これは、探索者を廃業するしかないかな……などと、朦朧とした頭で考える。施術する回復術師の腕によっては、繋がる可能性もあるかもしれないが……。

倒れた怪物の胸部をよく見ると、鎧の内部は空だった。これはどういうことだろうか。古代の死霊術を使って生み出されたりビングアーマー……という割には、明らかな意思を持って動いていたし、こうして会話までしてみせた。使う技も桁違いではあったものの、熟練した人間のソレだ。「気」による攻撃が効いたということは、内側になんらかの生命力が働いていたはずだが。まさか、魂だけを鎧に封じ込めてあったのか？

……そんな魔術は、これまで聞いたことがない。

『ソノ技術、一体誰カラ受ケ継イダ？』

「誰かから受け継いだものじゃ、ねえよ」

『ガツガツガ。素晴ラシイ、素晴ラシイゾ。小僧、最期ニ名前ヲ聞カセテ欲シイ』

「……ヴェルク」

左腕の痛みに乱れる呼吸を整え、立ち上がりながら告げるオレに、

怪物はやはり、ニヤリと笑ったように見えた。こちらを見上げながら、とても楽しそうに……。そして、相手が何をしようとしているか悟ったオレも覚悟を決めて、笑う。

「手の内晒したからな。次にやったらオレが負けるだろうさ。それで、アンタの名前は？」

『我が名ハ、ハルマツゾ。ソウイエバコウシテ名ヲ名乗ルノモ、随分ト久シブリダナ。……ヴェルク』

今にも朽ち果てようとしている鎧の怪物——ハルマツゾは、それでも威厳を持って言う。まるで、自分を超えて見せた我が子を、微笑みながら讃えるように。

『貴様ニ、褒美ヲ与エヨウ』

そして、周囲が光に包まれた——。

05. 怪物との戦い（改訂版）（後書き）

2011.08.10	2011.08.06
指摘いただいた点を修正	改訂

06. 漆黒の剣（改訂版）

「それで、そのハルマツゾから、おぬしは何を受け取ったのじゃ？」
「あー、それは……」

時と場所は戻り、探索者ギルド。一通りの話を終えて、爺さんに尋ねられたオレは俯き、なんと答えたものか迷っていた。自分でも信じられないような物を受け取ったからだ。しかし、オレの中の「記憶」が、それが嘘ではないことを示している。オレが答えあぐねていると、奥の部屋の扉が開く。

「魔剣ですわ、ゴードさん」

「……なんだ、いたのかよ」

視線を上げると、そこには姫さんの姿。ええ、と優雅に頷いて、ギルドの奥から歩いてくる。いつもなら、傍らにヴィーが立っているはずだが……今日は、知らない顔を連れている。恐らく、スティネーゼ家に雇われている護衛だろう。その油断の無い「気」から察するに、かなりの使い手だ。

「ヴェルクさんが宿を出たという情報を得ましたので」

「おいおい……そいつは怖いな」

「快復されてから、真っ先に酒場に行かれるとは思いませんでしたけど」

げ。冗談かと思ったが、昨日の行動まで筒抜けなのか、と軽くシヨックを受ける。左手を、アンナの術で無事にくっつけて貰ったオレだが、この2日間は宿のベッドで寝込んでいたのだった。目が覚めて、まず宿を抜け出して最初にヤケ酒を飲みに行ったんだから、

まあ呆れられても仕方ない。そういえばまだ、約束のベリーパイも奢っちゃいないな……。

「てか、ヴィーは一緒じゃないのか？」

「ヴィーさんは……」

俯いて、なんだか寂しそうな表情を見せる姫さん。そして、意外な言葉を口にする。

「修行へ行かれました」

「しゅ、修行？」

「件のハルマツゾに負けたのが、よほど堪えたのでしょう……」

それはまあ、たしかにあんなあらしい方をされれば、剣士であればプライドが傷つくのも無理はない。しかし今更修行って……一体なにをするつもりなんだ、アイツ。

「無茶してなけりゃ良いが……」

「あら？ ヴィーさんのこと、心配されているのですね？」

「……当たり前だろ」

「それは良かった。ヴィーさんも、貴方のこと心配しておられたのですよ。まあ、元気になった貴方が酒場に出かけ、拳句の果てに女性を連れ帰ったと聞いて、かなりお冠でしたけど」

うふふ、と変に優しい笑みを浮かべる姫さん。オレの行動は全部コイツらに筒抜けなのかよ。なんら気配を感じなかった以上、尾行とかってんじゃないくて、普段から街中に情報網が敷かれてるんだろうが……。あまり、周囲がスパイだらけみたいな状況を、想像したくはねえな。

しかし、あのヴィーが修行か……。姫さんだって、魔術の通じない相手が存在したことに、何も感じていないはずはない。しかも、その剣の所有者が、いまや同じギルド内にいるのだ。ギルド内の勢力図が変わりかねない。……ま、無派閥のオレが相手では、関係のない話だったか。

そこで、ウォッホン、とゴード爺さんが咳払い。……ああ、姫さんの存在感が強すぎて、忘れていた。

「おぬしら、積もる話もあるのじやろうが、今はこちらに専念してくれんかね。……探索は、ギルドで報告を終えるまでが仕事じゃ。……しかし、魔剣のう。それが本当なら、ギルドの公開記録にはそう簡単に残せんが……。一応、ティアに調べて貰っておくんじゃぞ」



探索者ギルドには、複数人の非戦闘要員がいる。それは、例えばゴード爺さんだったり、責任者のギルド長だったりするが、それ以外にも、特殊な技能を持った人間が存在している。それが例えば、今日の前にいる遺物研究員のティアだ。

そもそも「遺物」ってのは、遺跡から発見・発掘された古代のシロモノで、特に、高度な魔術が付加されているものを指す。中には、戦闘用に作られたと思われるものもあり、その中でも特に危険なものに関しては、王国の管理下におかれる。勿論、その対価は支払われるが。「魔剣」はその中でも有名かつ強力なものの一つで、かつて、たった一人の魔剣使いがとある国と敵対して大惨事を招いた……。なんていう噂もあるくらいだ。

それらの遺物を専門的に扱っているティアの仕事は、それらを解析・研究し、社会に役立つ新たな技術を生み出すことだ。……と言っても、現在の技術と比べてかなり高度な技術によって作り出されている遺物から得られるものはあまりに少なく、長年研究を続けたとしても、良くて劣化版の複製が世に出回るくらいのものだ。

そんな仕事をしているティアは、放っておけば一日中遺物と睨めっこ……ほとんど研究室に籠りきっているという変人で、特殊な事情がなければ滅多に外に出てこない。おかげで、研究室の中は生活に必要な全てが揃っている有様だ。調理場から浴室まで完備していて、もはやティアにとっては自分の家と変わらない。それだけの環境が与えられるのは、彼女が有能だという証拠でもあるのだが。

街を歩けば、男共の視線を集めずにはいられないような肉付きの良い美人なのに、ギルドメンバーですら、彼女を見ること自体かなりのレアケースだ。……勿体無いよな、ホント。

「それで、ヴェルちゃんが魔剣を手に入れたってのはホント？」

姫さんを引き連れ、研究室に足を踏み入れた瞬間、そんな質問がとんでくる。オレは、探索で遺物が出る度に、こっそりとここへ売りにくるので彼女とは顔馴染みなのだった。本来は、ギルドを通して王国に収めなきゃならんのだが……どういうわけだか、ここに持ち込むのは黙認されている状態だ。……てか「ヴェルちゃん」で。その呼び名、いい加減に変えてくれんかな。「凄腕ロリコン」よりはマシかも知れんが。

「本当ですわ」

オレが微妙な顔をしていると、姫さんが代わりに前に出て答える。ソレを見て、嬉しそうな表情をするティアは、オレへと向かって底意地悪そうにニヤリと笑う。

「ありゃ、ヒメちゃんもご一緒？ ヴェルちゃん、モテるわねえ……」

「モテてるのは、オレじゃなくて魔剣のほうだけだな……」

肩をすくめて答えると、ティアは口に手を当て、楽しそうにアハハと笑った。その振動で、胸が揺れる。おお、じーざす。視線がついついそっちへ向いてしまうのは、男の性だ。どうしようもない。だから、軽く殺気を飛ばすのやめてくれませんか、姫さん……。

ちなみに、姫さんの護衛はオレが引き継いだ。ことが魔剣絡みとあって、姫さんが気を遣ってくれた形だが、彼女を屋敷までエスコートしなきゃならんのが面倒でもある。正直、姫さんに不埒な真似をしようとするヤツが存在するのか知りたいくらいだ。……触れた先から炭化するぞ。

「そりゃそうよ。新たな魔剣なんて、ここ数十年では国内でも数本しか確認されてないんだから」

「それも、完全な状態で見つかったものは更に稀ですものね」

「まあ、柄や刀身だけでも、武器としては十分な性能を持っていたりするケドね。形が不完全だと、消費魔力が多くなることもあるみたいだけど」

いつの間にか、2対1の体制になっている。ってか、魔剣のほうが魅力的っていうの、誰も否定してくれないんだな……。

「それじゃ、ヴェルちゃんが手に入れたっていう魔剣を出して頂戴。

……ほらほら、さっさとする!」

「へいへい……」

仕方ねえな、と空中に右手をかざし、集中する。すると、意識した空中の景色が歪み、ゆらりと漆黒の剣が実体化する。右手に収まる位置で実体化した柄を握ると、キンという音とともに、魔剣が確かな存在になったことが解る。どうよ、とティアの方を見ると、なにやら俯いてぷるぷると震えている。

「う……」

「? どうし——」

「っきゃあああああああ!! これは!! これは本物だわ……っ!!」

ギンギンと頭に響く声で叫ぶティアに、思わず顔をしかめる。姫さんも、ティアの反応には流石に面食らったのか、目を丸くしてその様子を見つめている。飛び跳ねるティア。もちろんアレも盛大に揺れる。オレが心配することじゃないかもしれないが、コイツ、ちゃんと下着付けてんのか……?

「こんなに喜ぶティアさんを、私、初めて見ましたわ」

「勘弁してくれ……。オレ、二日酔いで頭が痛えんだよ……」

「それは、自業自得です」

06. 漆黒の剣（改訂版）（後書き）

2011.08.07 改訂

07. <石> (改訂版)

あの後、ティアが中々オレを……ではなく、魔剣を離してくれず、結局ギルドを出たのは夜半過ぎだった。

姫さんは、普段から魔術の研究を通してティアと付き合いがあるらしく、オレと魔剣が検査されている間、まるで研究室の主のように振舞っていた。……まあ、彼女の場合、どこにいてもそうなのかも知れないが。その場にいるだけで、まるで主役のような雰囲気醸し出すからなあ。それもまた、先祖から「受け継いだ」ものなのか。

「おつかれさまでした」

「……ああ」

ティアに付き合っただけで憔悴しきったオレを見て、姫さんがにこやかに言う。まるで「天罰だ」なんて言いたそうな顔。今日はやけにトゲがあるような気がするが、オレってなにかしでかしてしまったんだろうか。時々表情を伺ってみたが、魔剣についてはどうこう思っていないようだし……。

とにかく……。

「……疲れた。これまでティアとの付き合いっていうと、遺物を売ってハイ、サヨナラ。正直、男としては寂しいもんだったが……」

先ほどの嬉々としたティアの様子を思い出して、げんなりとする。姫さんが止めてくれなければ、しばらくあそこに軟禁状態だったかもしれん、などと考える。

「……正直、そのままが良かったのかもしれない」

姫さんが、オレの言葉を聞いてクスクスと笑う。

「私の知る限り、ティアさんに言い寄ってまともな返事を貰えた殿方は、おりませんわ。ギルド内でも不沈艦で有名ですもの。でも、定期的に検査を受けることになったようですし、良かったですわね」
「なんか今更だが、あんまり嬉しくねえなあ……」

あの、爛々と輝く瞳は、人間に向けられるソレじゃないような気がしてならない。オレのことは、もはや実験動物としてしか見てないんじゃないのか？ 研究に付き合えば、金をくれるってことだったが。しかも、そこそこの額の。それだけ、魔剣は研究対象として魅力的なんだろうな。

「そーいや、アンナとフェンはどうしてる？」

「聞いた話によると、アンナさんはまだ本調子じゃないようで、教会のお仕事もお休みになられているようです。本人は大丈夫だと言っているようですが、フェンさんが無理矢理寝かしつけているとか」

その様子が簡単に思い浮かんで、思わず笑ってしまう。

「はは。まあ、あんなだけ強力な呪いを受けたんだ。フェンのヤツも心配するさ。色々な意味で、しばらく安静にしているのが無難だろ」

「その言葉、貴方にこそ言って差し上げたいですわね。全身に裂傷と左手を欠損させておいて、起き抜けにとった行動が、まるで軟派男のソレでしたし。病み上がりの人間のものとは思えません」

「あー、申し訳ない。昔から、体だけは丈夫なんでね」

まさか、体内の気の流れを操って回復を早めただなんて、胡散臭いことは言えない。どうにも、こういった技術は、この国ではまるでオカルト的な秘術のような扱いを受けるからなあ。かつてのティア曰く、古代にはこうした技を使う人間が多数存在していたらしいけれど。

……あの、ハルマツゾのように。

「どうしたんですの？」

「え？」

「ずいぶんと、怖い顔をなさってましたけれど」

なんでもないよ、と言って笑う。ハルマツゾから伝えられた「コレ」は、他人に言ってしまうって良いことなのかどうか、オレには見当もつかない。どうせ、今となっては遥か過去のことなのだ。しかし、もし真実だとすれば無視も出来ない……。

あんの野郎、魔剣と一緒にとんでもねえ宿題を置いて逝きやがって。

「そういえば姫さんは、親父さんから<石>を受け継いだんだっかな」

「え、ええ。いきなり、どうしたんですの？」

「いや、ちょっと……。そんな時って、どんな感じだったのかな、と」

「……それは勿論、悲しかったですわ」

話題を変えようと思って、ついそんな言葉が口をついた。しかし、これは正直オレが浅はかだった。

それは、通称＜石＞と呼ばれる魂の結晶だ。この世界で人は、自らの生の終わりを自覚したとき、自分の意志を継ぐ相手に己の全てを託す。力、技術、思考……それら全ての経験を石へ込め、次の世代へと託すのだ。しかし、受け継がれるのは、あくまで技や知識といった経験からなるものと、ほんの少しの記憶。それ以外は、本人があの手へ持つていくことになる。そうでなければ、受け取った側の人間は耐えられないだろう。人間、二人分の人生を生きようにはできていない……。

ちなみに、先日探索で一緒に行動した早熟なメンバーたちだっ
てそうだ。

姫さんは父親から、代々伝わる当主としての手腕と炎の魔術を。
アンナは流浪の法術師から、巨大なマナと優れた回復魔術を。フェンやヴィーだって、それぞれがかけがえのない人たちから技術を受け継いできたのだろう。……だからこそ、ヴィーはハルマツゾに負けて愕然としていたのだ。それは、自分が尊敬してきた故人が負けた、ということに等しいのだから。

故に、＜石＞を受け継ぐという行為は、大切な人の死を意味している。だから、先ほどの質問は、我ながらデリカシーがないにも程がある。これまで、＜石＞を受け継いだ経験が無かったからこそ、こんな質問を何気なくしてしまうんだろうが、それも言い訳だ。

「そ、そうだよな。すまん」

「いえ、もう3年も前のことですし。……でも、そうですわね。私には兄がいたので、当主の証である＜石＞をステイナーゼ家唯一の男系である兄でなく、女の私に受け渡すと聞いたときは、正直混乱しましたけれど」

そうやって、右手に嵌められた白い手袋を取り、その手の平にある小さな十字の刻印を見つめる姫さん。それは、＜石＞を受け継いだ者の証。……オレは拳を握り、自らにも刻まれたものの感触を確かめながら、口を開く。

「へえ。姫さんに兄貴がいたのか。それは知らなかったな」

実際、初耳だった。まあ、オレが知らないだけかもしれない。貴族の長男坊なんていうのは大抵の場合、そこそ名が通っているものだ。ましてや、強力な魔術師の家系とあったら尚更だ。このフェイド王国に住む者として、オレも少しは勉強しなくちゃならんかな……。

「美しく、強く、優しい兄でした。今は、どこでどうしているのやら」

「行方不明なのか？」

「ええ。父が後継者に私を選んだその晩、兄は行方を眩ませました」

俯いて、悲しそうに言う姫さん。ついつい忘れてしまいが、彼女はまだ16歳の娘なのだった。……もしかして、姫さんの情報網がやたらと発達しているのは、その兄貴を探し出すためなのかもしれないな、などと考える。……やがて、彼女の暮らす屋敷が見えてくる。

「送っていただき、ありがとうございます。そういえば、先日の報酬をまだお渡ししていませんでしたわね。館に来て頂ければ、すぐにでもお渡しできますけれど」

姫さんの住む、えらく豪華な屋敷の門前まで辿りつくと、お礼の言葉と共にそんな提案をされた。ああ、そういえば報酬の話はうや

むやになってたな。装備も一式失ったし、それらを再度揃えらなると、手持ちの金だけじゃ心もとない……っていうか全然足りんだが……。

「ああ、いや。こんな時間にお邪魔したら、例の執事さんが良い顔しないだろ。それに今日はちよっと人を待たせてるんでね。……まあ、待ってくれているかは分からないんだけど」

そう、部屋に昨日のネーちゃんを寝かせたまま出てきたのだった。待っている可能性は正直言って低いが、しかしまあ、できることならば名前くらいは聞いておきたい。しかも、すぐに渡せると言っても門から屋敷まで、また少し歩かなくてはならないのだった。まったく、金持ちの家ってのは、どうしてこうも無駄に広いのかね？

「ああ、なるほど。部屋に残してきた彼女のことですわね」

「まあ……そんなところだ」

あっさり事情を察してくれやがった姫さん。仕方なく、曖昧に頷く。

「それはそれは、よろしいですこと。……まったく、ヴィーさんには同情しますわ」

「え？ 何か言ったか？」

「いいえ、なにも。それでは、ごきげんよう」

07. <石> (改訂版) (後書き)

2011.08.07 改訂

08. 意外な展開（改訂版）

姫さんと分かれて、その帰り道。

辺りがシン、と静まり返った中で押し殺した殺気を感じた。どうやらお客さんらしい。それも複数人。……8人、といったところかな？

「隠れてないで出て来いよ」

立ち止まって声をかけると、一瞬の静寂の後、周囲の暗闇の中から黒い装束を纏った、いかにも裏稼業といった様子の男たちが現れる。ちなみに人数も丁度8人と大当たり。まったく、何から何まで分かりやすいヤツらだ。黒装束の男たちのうち一人が、一歩前に進んで言う。

「ふん。こちらの気配に気づくとはな……」

「なんだ、こんな時間に。……オレのファンか？」

これがオレじゃなくて姫さんだったらありえそうな話だけどな。……などと思わず笑いながら考える。しかし、オレが調子に乗っていられるのもココまでだった。次の言葉に、己の表情が凍りつくのが分かる。

「貴様の女は預かった」

……ああ、このクソツタレ！！ オレは心の中で悪態をつきながら、表層では平常を装う。

「女？ オレの女って、誰だよ？」

「とぼけても無駄だ。あの女を無事に返して欲しければ、1時間後に、一人で、この場所へ魔剣を持って来い」

一句一句確認するように言って、リーダー格らしき男が一枚の紙切れを地面に落とした。ああ、やっぱりな、と思う。こちらの事情は調べつくされている。相手の手際と錬度からしても、決して小さい組織ではない。魔剣の存在が姫さんによって報告されてから3日目。王都からこの街へは、魔術で強化した馬で飛ばせば2日程度で辿り付ける距離だ。そちら方面から来たどこぞの悪徳ギルドのヤツらか、それとも……。

「こちらからも条件がある」

「条件？ 言える立場だと思っているのか？」

相手は高圧的な態度をとるが、それを無視して続ける。

「彼女に手を出すな。触れたヤツは全員、両腕を切り落とすぞ……ッ！」

「ふん。よからう」

興奮したオレ（もちろん演技だが）の要望を容易く飲んだ。十中八九、相手はプロだ。彼女、恐らく本当に無事だろう。魔剣という強力な超レアアイテムに関わることにだけに、不埒な真似をされているということは無いだろう。幸か不幸か、そんな安いヤツらじゃあ無いようだ。それらが原因となって、万が一にも人質作戦が失敗となると、最悪、魔剣の持ち主を相手に戦うか、無事逃げ帰ったとしても組織によっては制裁が与えられる可能性すらあるのだ。魔剣使い相手に人質として使える彼女は、利口な相手にとっては大切すぎる切り札だ。

まったく、名前も知らない（もしくは忘れている）女のために、こんな心配するハメになるなんて……。ま、昨日はイイ感じだったし、今後のための初期投資と思って諦めよう……。って、考えてみればオレの問題に彼女を巻き込んだ形になるんだけど。さて、事が済んだらどう言い訳しようかね。機嫌を損ねてなければ……。って無理があるか。

「一時間後、一人でだ。魔剣を忘れるな……」

リーダー格の男が、確かめるようにそう言い残して闇の中へ消え、とりまきの黒い影たちもまた、暗闇の中へ消えていく。見事な連携だ。手練の探索者でも、こうはいかないな。影共が全員視界から消えたのを確認して、オレは相手が置いていった紙切れを拾い、内容を確認して握り潰す。

「……まあ、相手がオレだったのが運の尽き、だな」

そして、オレはそのまま黒装束の男たちを追った。ハルマツゾ戦でやったように、己の気を極限まで消して、相手の気を追跡する。一応、あんな化け物にも通じる技術だ。誘拐犯ごとき卑怯者に見破れるはずもない。黒い服を好んでいる理由は、こういうところにもある。まあ、こんなことは滅多にないし、一番はやっぱり「汚れるから」という理由だけだ。

……やがてたどり着いたのは、ヤツらの隠れ家らしき街はずれの廃屋だ。庭も含め、かなりの広さのある屋敷らしいが、手入れはされておらず草木が茂っていて現在人が住んでいる気配は全くない。どこかの金持ちが、老朽化に合わせて移住したのだろうか？

「こんなトコがあつたなんて知らなかったな……」

屋敷の広い庭にある茂みの中で、一人呟く。ちなみに先ほどの紙に書いてあつた約束の場所は、ここから10分もない場所にある。恐らく、オレが魔剣を手にとっていないとみて、取りに戻る時間を与えてくれたんだろうが、それが命取りだ。こう見えてオレは、デートの待ち合わせ場所には早めにつくタイプだ。すっぱかされることは良くあるが……まあ、今回はその心配も無い。

辺りの気を伺いながら、そっと屋敷の窓へと近づいていく。よく見ると、明かりが漏れないよう、暗幕が引かれている部屋がある。つまり、そこがヤツらの使っている部屋で、彼女が捕らえられている場所だ。と、普通は考えるんだろうが、気配がまるで感じられない。こいつはワナだ。「気」を感知できるオレでなければ、今頃ブービートラップの餌食になっていたかもしれん。

ちなみに、いくら「気」が扱えたって仕掛けられた罠自体は判別できない。念の込められた呪いの類だったら判ることもあるんだけど……ハルマツゾには通じなかったな。とにかく、こちら側が罠ということは、侵入者に対応する時間を稼ぐためにも反対側の位置が拠点のハズだ。

途中、邪魔だった見張りを昏倒させながら進んでいく。隠れているつもりだったのだろうがまるで「気」を隠せていない。それではいかにも、こちらに我らの首魁がおりますよ、と言っているようなものだ。コイツら、敵からの襲撃に備えているというより、なんらかの理由で人がやってきた場合に備えているだけなんだろうけれど。

昏倒させたヤツらは、最初から茂みの中にいてくれたので、そのまま居眠りしてしまったように見せておく。こないだの拳士として

の戦いといい、こういうのも傭兵だった頃以来、久しぶりだな。……っと、この辺りか。さて、どうやって侵入したものか。

オレは、先ほど昏倒させた黒装束の男が倒れている茂みに目をやった。



「貴方たち、一体何者なの？ 彼に、一体なんの用なの？」

その後、どうにか隠れ家となっている部屋の中の様子を伺える場所を見つけたオレは、黒装束の男たちと、椅子に座らせられた彼女に「一方的な」再開を果たした。

彼女の周囲にいる敵の数は8。「今の状況」から奇襲を仕掛ければ一瞬で終わらせられるが……ここは、再発防止のために相手の正体を探っておこう。死体から情報を得るより、生きている人間から情報を得るほうが、遥かに簡単だ。

そんな打算を巡らせながら、オレはちらりと囚われの「姫」を見る。うーん、やっぱり美人だ。どの角度から見ても、まるで美術品のようですらある完璧な美貌。よくもまあ、こんなのと一夜を共にしたものだな、昨日のオレは……我ながら感心するというか、なんというか。そしてよくもまあ、忘れられたものだよなあ……。勿体無さ過ぎる。

ちなみに彼女は、オレが置いてきた服を着たまま、まるで傷つけられた様子も無い。ヤツらからは丁重なもてなしを受けていたよう

だ。……これで後ろ手に縛られておらず、紅茶のひとつも出されていけば、ますます完璧だったな。と、彼女の質問に対して、先ほど会ったリーダー格の男がギシ……と傷んだ床を鳴らして一步步み出た。その顔には、不気味な笑みが張り付いている。

「ククク……。それはこちらの台詞だよ」

「……それは、どういう意味かしら？」

彼女は、自然と男を見上げる格好になる。不安そうな表情をして見せているが、しかしその発せられる「気」には、恐怖の色がまったく無い。圧倒的不利な状況の中で、なんて胆力だ。これはまるで……。

「いやまさか、あのような手を使ってくるとは、王国もなかなかやるじゃないか。……なあ？ フェイド王国魔剣調査室所属の魔剣調査官、マリア・フォーレス君」

「……え？」

そう、彼女から放たれる「気」は、けして素人のソレじゃ無い。これは意外な展開になってしまった。……さて、どうしよう？

08. 意外な展開（改訂版）（後書き）

2011. 08. 28 改訂

09. 魔剣調査官の女（改訂版）

魔剣調査官。

その名のとおり、魔剣の在り処や能力、魔剣所有者の所在などを調査・報告し、可能であれば魔剣を「回収」する国王直属のエリート集団。その存在は秘匿とされ、魔剣などを含む遺物を発掘しているオレたち探索者にも、噂話のひとつとして知られているだけだ。恐らく姫さんやティアあたりなら噂の真相を知っていそうだったが、どうせ無関係だしと思い、尋ねてみた事はなかったな……。尋ねたところで教えてくれたかどうかは知らないけれど。

魔剣を所有するには適正が必要で、魔剣と所有者は精神の根っこの部分……つまり「魂」で繋がっている。そのため、他者が魔剣だけを手に入れようとすることは、魔剣所有者の命を奪うことと同義だ。つまり、魔剣の回収というのは、所有者を王国側に引き入れてしまうか、もしくは所有者を殺害し奪取するということになる。

彼ら（今回は彼女、だが）が一番恐れているのが、魔剣の国外への流出。古代文明の強力な遺物である魔剣には、ものによっては一個大隊レベルの戦力が備わっている。それが万が一にも他国の力になってしまうようであれば、所有者一人の暗殺くらい、安いものだろう。とくに、このフェイド王国の隣に控える「帝国」との関係が未だ危うい現在の状況では、尚更だ。

魔剣として有名なのが、この国の国王が持つ「光の魔剣ディジタ1」だ。先の大戦末期に、当時はまだ王子だった彼の魔剣による一振りで、帝国軍数千人が焼き尽くされたというが……この目で見てないので何とも言えないし、実際どうなのかは知らない。しかし、

地理的な問題から、数カ国からなる連合軍の矢面に立たされた王国が今もこうして帝国のとなりでのうのうと存在している辺り、あなたがちホラ話とは言い切れない。

そんな魔剣の力を知っているだろう国王だからこそ、魔剣調査官の噂には説得力があり、オレたちの間でまことしやかに囁かれていたのだ。いやしかし、まさか彼女がその魔剣調査官だったとは。世の中狭いものである。……って完全にオレの魔剣狙いですよね。ああ、オレのモテ期、一日で終了か……!?

「おい」

いや待てよ。これは単なる出会いだ。客商売やっててお客さんにホレちゃうなんてことだってあるだろうし、魔剣調査官が魔剣所持者にホレることだってあるかもしれない。……遺物研究員のティアがその対象者であるオレにホレることはなさそうだけど。いやいや、とにかく、そう……昨日だって、熱い夜（記憶が無いけど）を共に過ごしたわけだし、脈がないわけじゃあ無いんじゃないか？ 最近、まったく浮いた話も無いわけだし、ちょっとくらい期待してもバチは当たらないだろう。

「おい、貴様!!」

「え？」

なんだか、先ほどから煩いヤツがいるなと思ったら、黒装束のリーダー格がオレを睨んでおり、周囲では数人の男たちがこちらに向かってナイフを構えている。その後ろでは、彼女……マリア・フォーレスが呆れた顔をしてこちらを見ている。

「この状態で、よくも呆けていられるな」

そう。先ほど考えられないような大ポカをやらかしたところなのだ。先ほどの会話を思い出す。



『いやまさか、あのような手を使ってくるとは、王国もなかなかやるじゃないか。……なあ？ フェイド王国魔剣調査室所属の魔剣調査官、マリア・フォーレス君』
『……え？』



この『……え？』という素っ頓狂な声。アホなことに、昏倒させた敵から黒装束を拝借して敵の中に紛れ込んでいたオレの発したもののなのだった。彼女が魔剣目当てというのがそれだけ衝撃だったのだが……しかし、黙っていれば誤魔化せると思っていたが、無理だったみたいだな。いや、当然だけど。

観念して、拝借していた覆面を外す。

「……貴様、魔剣を取りに戻ったのではなかったのか？」
「いやあ、アンタらのやり方に従ったら、確実に両方殺されちまうだろ？」

ヘラヘラと笑いながら応える。結局、魔剣を手に入れるには籠絡

か殺害かしか無いわけなんだし、あんなに心証の悪いことを最初から仕掛けてくる相手が籠絡戦法をとってくるハズが無いのだ。ヤツらに残された道は、どうあっても魔剣と奪取すること。そして、魔剣を「無かったこと」にするための完全なる証拠の隠滅。

「いくら魔剣初心者であっても、こちらら遺物のプロ……探索者なん
でね」

「ふん……。墓泥棒風情が」

鼻で笑う男に対し、オレはニヤリと口を斜めにする。

「誘拐犯には言われたくねーよ、クソツタレの帝国野郎」

「な、に……？」

売り言葉に買い言葉だが、意外に効果があってニヤリとしてしまう。まあ、確信があったわけでも無し、相手がそう簡単に反応してくれるとも思っていなかったが、恐らくオレの外見と言動から油断していたんだろう。自分で言うのもなんだが、頭良さそうには見えないだろうしなあ……。

大体、王国内で最強と目される国王に歯向かうだなんて、国内の人間では考えられないことだ。国内の暗部である盗賊ギルドや暗殺者ギルドの連中だって、目下おとなしくしてるというのに、まだ正体も性能も分からない魔剣一本のために、国王直属の魔剣調査官を攫ってきて平然としてるなんて。どうせ、オレから魔剣を奪ったが最後、そのまま帝国ヘトンズラする腹積もりだったんだろう。

「ま、そもそも傭兵やってた時間の方が長いんだけど……。それより、良いのか？ 彼女から目を離して」

「な……っ!？」

リーダー（多分）は、最後まで言えずに絶句した。それはそうだろう。先ほどまで縛られて椅子に座らされていた捕虜が、自分の首筋にナイフを突きつけているのだから。ちなみに、椅子に一番近い場所にいた黒装束二人は、音も無く頸動脈を切られて絶命している。溢れ出る血が、床の上に広がっていく。うーん、なかなかの技量だ……。これなら、探索者になってもやっていけるだろう。

「私の正体を知っていた割に、油断したわね。……一応、助けに来てくれた札を言っておくわ、ヴェルク。ありがとう」

「それはどうも……」

前半を流暢な帝国語で捕らえた男に、後半を王国語でオレに向かって言う彼女。今の手際を見るに、助けは必要無かったんじゃないかなろうかとも思うが……考えまい。彼女に対するオレの心証は良かっただろうし、もう一度くらいデートに付き合ってくれるかもしれないしな……。っと、危ねえ！

鋭い殺気を感じて上体を捻ると、そこを黒装束のナイフが通り過ぎる。

「おいおい、こっちには人質がいるんだぞ？」

『ククク……そんなものが通じるのは堅気の間人だけだよ、魔剣使い』

無言の黒装束たちに代わって母国語でそう言うと、リーダーの男は自分の首に突きつけられたナイフに向かって思いっきり体重を乗せて横に動いた。その首筋が、綺麗に裂ける。

「なっ!？ コイツ……ッ!！」

「おいおい、マジだよ……」

部屋の中の死体が三つになったところで、形勢はまたも不利になった。一応、敵の数は確実に減っているのだが、あまり嬉しくない。彼女の方も意外だったようで、目を見開いている。……とはいえ気が散っている様子は無いので、周囲が見えなくなっているワケでは無い様だ。さすが、国王直属のエリートといったところか。

室内に転がる三つの死体。それを見て、動揺した様子も無い周囲の男たち。場慣れしてるのか、こういう部分は徹底してるようだが、どうにもあまり好感は持てないな。しかし、オレの実力を量りかねているのか、一気に攻めてくることはしない。敵を前にしたまま、背中越しに彼女へ尋ねる。

「で、これからどうするんだ？」

「コイツを盾に、ここから脱出するつもりだったのだけれど。外に見張りもいるだろうし……」

油断無く、足元にひれ伏した死体を視線で示して彼女は言う。しかし肝心の「盾」がソレじゃあ、その作戦はもう使えねえな……。

「見張りならオレが大体片付けといたよ。さっきの覆面もそいつに拝借したモンだ」

「……それが本当なら、あなたって何者？」

更なる心証アップを狙ったんだが、上手くいかなかったようだ。悲しいことに、返ってきたのは疑いの言葉……。まあ、お互いよく知らないし、仕方がないか。特にオレのほうは、前日の出来事をまったく覚えていないからなあ。

「話してなかったか？ 元傭兵で現探索者のヴェルクだ。魔剣以外については、そのくらいしか話することが無いつまらない男さ。……そういうアンタは？」

「どうも、ソレだけだとは思えないけど。こちらのことは……どうせバレちゃったしね。魔剣調査官のマリア・フォーレスよ。昨夜と同じく、マリアで良いわ」

……良し。違和感なく名前を確認することが出来た……って昨夜も本名を名乗ってたのかよ。できることなら、その記憶が無いなどと知られたくは無かったが、無用の心配だったか。あとは、ここを潜り抜ければチャンスがありそうだ。しかし、名字があるってことは貴族の出なのか。それともそもそも偽名なのか。まあ、学の無いオレが考えてもしかたない。

「オーケー、マリア。それじゃあ兎に角、コイツらをどうにかしないと、な……！！」

その言葉の終わりと同時に、オレとマリアは敵に向かって飛び出した――。

09. 魔剣調査官の女（改訂版）（後書き）

2011. 08. 28 改訂

10. 殺戮の夜（改訂版）

その後、無事に部屋での戦いを切り抜けたオレとマリアは、屋敷の門扉から少し離れた茂みの中に身を隠していた。……オレの視線の先には、周囲を取り囲む多数の敵。

「随分多いな。こりゃあ、簡単に脱出してワケにもいかないか……」
「解るの？」

「……ま、ざっと50人くらいかな？」

部屋に残された数人の男たちを無事に倒し、屋敷から出たところで気付いた。魔剣奪取のために用意された人員なのか、ヤツらを迎えに来たのか、もしくはヤツらごと始末にきたのかは分からないが、屋敷の周囲をかなり多数の気を取り囲んでいたのだ。

発している気から察するに、質・量ともに先ほどのヤツらよりも数段手ごわい連中だということは間違いない。家並みの暗がりに紛れているヤツらの防具は黒く塗られて闇に溶け込んでいる。ほぼ全員が比較的軽装だが、装備の質は良さそうだ。ハルマッゾ戦で鎧を失った身としては、羨ましい限りだ。……げ、魔術師らしいのまでいる。

「この街が比較的国境に近いとはいえ、そんな数の人員を一体どうやって……」

「そんなことを考えてる場合かよ？」

とりあえず、ギルドにでも入り込んでしまえばどうとでもなるかと思っていたが、あの数が相手ではそうもいかない。しかし確かに、これだけの数の武装集団に、誰も気付かないものか？

うーん、これは試されている予感。主に「あの女」に。

「ああもう、仕方ねえな。オレが隙を作るから、さっさと逃げろ」

「逃げろって、この状況で……一体、どうするつもり？」

「丁度良い機会だ。魔剣の力を見せてやるよ」

「近くに隠してあるの？」

「……さてね。それじゃ、ちょっと行ってくる。いいな、上手く逃げろよ？」

怪訝な表情でこちらを見る、それでも美人な彼女にオレはそう言
って、隠れていた茂みから出る。左手をヒラヒラと振りながら門へ
向かい、古びた門扉を押すと、ギイイ、と錆びた鉄の音が暗闇に響
く。周囲に展開する「敵」へと届きかねない音量だが、オレは構わ
ずに堂々と出て行く。

相手の攻撃を警戒して「気」の動きを探るが……意外なことに、
相手はこちらがかなり至近距離に近づくまで行動を起こさなかった。
もしかすると、黒ずくめの服をまとったオレを、黒装束のヤツらの
一味と思ったのかもしれない。しかし、相手も馬鹿ではない。ここ
らは何者であろうと、けして油断はしていなかった。

「貴様、何者ダ？」

たった一人黒塗りの鎧で全身重装備をした男に、帝国訛りの声で
尋ねられる。その様子を見るに、普段から街に潜入して市民に化け
ていた、というワケではなさそうだ。やりやすくて助かるよ。

『アンタらが探してる魔剣使いさ。丁度、お仲間を殺してきたところだよ』

『……………』

相手の使う王国語より、遥かに流暢な帝国語でそう応えてやると、静かに爆発する殺気が、周囲の暗がりからひしひしと感じられた。どうやら、本当に迎えにきただけだったようだな。ここは街はずれだし、特に塀で覆われてるわけではないから進入・脱出は簡単だろうが、マリアの言うとおり、国境はどうやって越えて来たのだろうか。まあ、ソレを考えるのはオレの仕事じゃ無い、か。

『アンタらをここで全滅させてやっても良いんだが、オレも街中じやあ出来るだけ戦いたくない。さて、どうする？』

オレは、肩をすくめて提案してみせる。相手の殺気が、よりこちらに集中するのが分かる。これだけこちらに意識を集中させれば、マリアも大分逃げやすいだろう。……と、黒塗り鎧の男がこちらの姿をジロリと睨み付けながら、口を開く。

『……今、魔剣は持っていないのか？』

『だったら？』

『それは残念だ。お前が死んでから、ゆっくり探すことにしよう』

そう言って、ヤツは飛びのいた。……嫌な予感がして、足元を見る。おいおい、なんだよこの魔術陣は……っ！！

『死ね』

次の瞬間、足元に敷かれた魔術陣に大量の魔力が流れ込み、爆発。周囲が閃光に包まれた——はずだった。

「……ふう、危ねえところだった」

しかし、炎はオレの体を焼かずに掌の先に流れていく。それを見て、炎と魔力の明るさに照らされたヤツの顔が照らし出される。その驚愕の表情に、思わずオレはニヤリと笑う。

「どいつもこいつも、そんなに見たきゃ、見せてやるよ……ッ」

オレは空中に手をかざした掌の先に、魔剣の存在を意識する。最初は慣れなかった感覚だが、ティアに繰り返しやらされて随分と慣れてきた。炎を魔力に分解しながら取り込むソレが漆黒の姿を空中に現す。

『非実体化できる魔剣！？ しかも魔術を吸収している、だと……！？』

オレの手に収まったソレを見つめながら、黒塗りの鎧の男が呻く。しかし、いつまでも驚いていくくれるワケもなく、しかし、それでもいくらか焦った様子で右手を上げて振り下ろし「やれ」の合図。今度は遠距離から放たれた氷結魔法が、闇夜に紛れて飛んでくる。しかし、それも意識することで空中分解、魔剣に吸収される。

次の瞬間に身を低くして飛翔してきた数本の矢をかわし、前方へダッシュ。まずは司令塔を潰すために黒塗りの鎧の男の懐に潜り込み、一閃。相手も上手く反応して剣を合わせて来たが、その業物らしい金属製の剣は、魔力で構成された魔剣によって紙のように切り裂かれてしまう。そのまま、オレの剣筋は相手の首を通過する。

以前のオレだったら、勝てなかったかもしれないな。

『……………ッ』

男は、最期に何か言おうとしたが、そのまま兜を被った首だけが地面に落ち、闇に包まれた街はずれの家並みに金属音を響かせる。それを背後に聞きながら、かなり遠くの距離から正確に矢を放ってきた男たちを見つける。右手に意識を集中させ、魔力の塊である魔剣の形を変化させる。

やがて、魔槍と呼べる形になったソレを投擲。遠くに見える弓使いの男のうち一人の胸にぽっかりと穴が開く。背後の壁に槍の形をした漆黒の魔剣が突き刺さり、近くに潜んでいた男が駆け寄りソレに手を伸ばすが、ソイツが触れる直前に魔剣は空中に霧散し、その手をすり抜ける。

魔剣は空間を跳躍してオレの右手に戻り、オレは、槍型のソレで魔術を吸収する魔剣を手放した隙を見て放たれたのである。雷鳴弾を瞬時に分解・吸収。そのまま他の弓使いに向かって再投擲し、今度は頭を刎ね飛ばす。

その間に切りかかってきた男たちの斬撃を余裕で躲し、ハルマツゾに使ったような「気」の一撃を食らわせて心臓を破裂させ、近くの路地に入る。そこへ、頭上から短刀を構えた男が二人飛び掛ってくるが、「気」によってソレを正確に把握していたオレは、再度呼び戻した魔剣ですれ違いざまに切り伏せて、狭い路地の壁を三角跳びで駆け上がる。

見晴らしの良いその場所にいた魔術師の腹に魔剣を突き刺し、そのまま頭頂部までを両断。その手には発動しかけた雷鳴弾が残っていたが、手の肉を焦がしただけで消えてしまう。その場所で、槍型から数本の投げナイフに変形させた魔剣を、残った魔術師と弓使いを主に狙って次々と投擲する。物陰に隠れていた者も、壁をすり抜

けて飛翔してきた魔力製の刃物が頭を貫通し、絶命する。

頭領を最初に潰され、援護役の魔術師・弓使いを中心に仲間たちが次々と命を落としていくのを見て、相手に動揺が走るのが分かる。しかし、こちらはその動揺に対して決して容赦なく攻め続ける。剣型に戻った魔剣で近くに潜んでいた三人の男たちを斬り殺す。

やがて街はずれに響き渡る、絶叫と怒号――。



その後も、オレは敵を狩り続けた。古代の英雄ハルマツゾから受け継いだ、魔剣とく石の力を使って……。

10. 殺戮の夜（改訂版）（後書き）

2011.08.28 改訂

11. 戦士の休息（改訂版）

闇夜の「狩り」は終わった。

街はずれに放たれていた獲物は全て狩りつくされ、通りや路地裏、屋根の上に至るまで、あちらこちらに黒塗りの装備に身を固めた男たちの死体が転がっている。その死屍累々の様相の中で、オレは一人、狭い路地で蹲っていた。傍らには、狩り最後の獲物が体を上下に分断されて横たわっており、血の気の失せたその顔は、恐怖に歪んでいる。

「はぁ……、はぁ……」

確かに、ハルマツゾから受け継いだ魔剣と＜石＞の力は凄まじいものだった。

魔剣は、それ自体を構成している魔力を源にしているお陰で、魔剣でありながら使用者の魔力を消費しない。ハルマツゾの＜石＞から受け継いだものの中には、その使用方法や魔術の知識、剣技、槍技、オレの得意としている「気」の技術まで、古今東西ありとあらゆる知識や技術が詰まっていた。

先ほど使った帝国語も、ハルマツゾの知識から得たものだったりする。かつて傭兵業をしていた都合上、オレも少しは話せたが、あそこまで完璧な発音は出来なかった。正直、いくら＜石＞の力とはいえ、これだけのものが自分の頭の中に納まっているということが不思議に感じる。到底、ハルマツゾ一人によって蓄えられたものだということが信じられない。

通常は、ステイナーゼ家の当主にのみ伝来されていく<石>のよ
うに、多数の人生の積み重ねで技術や知識を蓄えていくのだ。……
しかしそれも、ハルマツゾの知識の中にあった、ある秘術によって
覆されている。

不老。

古代から、時の権力者たちが必ずといって良いほど最後に追い求
め、そしてその誰もが叶えられずに朽ち果てていった、永遠の命を
可能にする秘術……ソレが、ハルマツゾ個人が数千年分の知識を持
ち合わせていた理由だ。ある理由から封印され、鎧の身に魂を移し
ていたハルマツゾだが、そんな出来事が無ければ今の世を統べてい
たのはヤツだったのかもしれない……。

そして、そのハルマツゾの数千年分の記憶の一部も、オレの中に
ある。

<石>によって引き継がれる記憶の総量は、その人間の想いの強
さや寿命の長さによって左右される。それは代々、人から人へ受け
継がれていく中で薄まっていくハズののだが、今回の場合は通常
と違い、ハルマツゾ個人の記憶として色濃く残されていた。

その巨大な絶望と憤りの記憶や感情は、ハルマツゾの人生のたっ
た一部とはいえ30年しか生きていないオレの許容量を圧迫し、そ
の苦しみから逃げるために、オレは酒の力を頼った。そこで、魔剣
調査のためにオレに近づいてきたマリアと出会ったワケだが……。

今回の戦いの中で、ハルマツゾの知識や技術と共に、その憤りや
怒りの感情も、自分のソレと同化して激しく燃え上がるのを感じた。
今、こうして正気を保っていられるのが不思議なくらいだ。しかし

……。オレの人生、早くもハルマツゾに影響を受けすぎている気がするなあ……。

そんなことを考えていると、オレは瞼が重くなるのを感じた。魔剣の影響もあるのだろうか。どうやら流石に、今回は「気」による疲労回復が間に合わないようだ。あまりの眠気と脱力感に、意識が飛びそうになる。

「……ヴェルク？」

その記憶の最後、夜明け直前の明るくなり始めた空をバックにして、聞き覚えのある女の声が聞こえたような気がしたが、それを確認することなく、オレの意識は暗闇に沈んだ。



昔、我が魔剣や不老の秘術を手に入れるよりも、もっと前の話だ。

ある戦の最前線で剣を振るっていた我は、相手方の罠に掛かった味方を助けるために無理な行いをして、その身に重傷を負った。結局、気を失った我は、助けた筈の味方に背負われて前線基地まで運ばれたのだから、笑える話である。

『……♪……♪』

意識を取り戻したとき、すぐ傍で女性が鼻歌を歌っていた。それを聞いて、己が安全な場所にいると理解し安心しきってしまったことを、はつきりと覚えている。

『あら、起きたのね。お寝坊さん』

そう言ってこちらを覗き込んできた女性は、手に縫い物を持って微笑んだ。我も、声を出そうとしたが、喉が酷く乾いていて、上手く声を発することが出来ない。それに気付いた女性が、陶器製の吸飲みを使って水を飲ませてくれ、ようやく声を出すことが出来た。

『こ、此処は……？』

『貴方の戦っていた場所からずっと遠く。私の住む城です』

それを聞いてハツとする。彼女の胸元には、王族の証である金色のペンダントが下がっていたのだ。思わず礼を示すために起きあがりうとするが、全身の痛みに呻くだけに終わってしまった。それを見た彼女は、我の肩に触れて優しく言う。

『無理をしないで。今は、ゆっくりと休んでいてください』

優しいその言葉に甘え、全身に掛かる全ての力を柔らかな寝台に任せてしまう。すると一つ、非常に気がかりなことが思い浮かび、非礼を承知で尋ねずにはいられなかった。

『皆は……皆は無事ですか？』

『……大丈夫、貴方が助けようとした人たちは全員無事です。皆、貴方に感謝していましたよ』

我の質問に一瞬目を丸くしてから答えてくれた彼女は、それからクスクスと笑った。

『随分と酷い怪我をした自分の体より先に、他人を心配するなんて

……。優しい英雄さんね」

『そ、そんな……。私は……。ただの人間です』

空が高く感じるくらいの晴天に恵まれたその日。窓から差し込む日の光の中で出会った彼女こそが、後に我の妻となる女性だった。その時の彼女の笑顔を、我は一生忘れることはないだろう……。



「……一生どころじゃなかったぜ、ハルマツゾ」

目を覚まして最初に、夢の内容を思い出して呟く。恐らく、それは単なる夢なんかではなく、ハルマツゾの過去の記憶・・・＜石＞になっても強い想いによって守られた、大切な心の欠片だろう。数千年生きてきた中で、彼女の記憶だけが、まるで宝石のように輝いていた。あの時相対したオレたちには、異様な強さを持った鎧の怪物としての印象が強すぎるが、アイツにもただの人間として生きてきた時代があるのだ……。

「……ん？」

ふと、寝ているのが自分の借りている部屋のベッドだということに気付く。どうやら、夢の中のハルマツゾではないが、誰かがわざわざここまで運んできてくれたらしい。血塗れだったハズの服も、いつの間にか新しいものに取り替えられている。

コンコン、とノックの音。返事もせずにはぼんやりと眺めていると、静かにドアが開き意外な人物が現れた。オレに気を使ってか、そろ

りそろりと入ってくる。……その手には、美味しそうな香りを漂わせる料理を載せた大きな目のトレイ。

「……ヴィー？」

「うわっ、起きてたんなら返事くらいしろよっ。……ホラ。起きたならメシだ、メシ!!」

そう言って（叫んで？）数日振りに会ったヴィーは、オレの部屋の中心に置かれたテーブルの上に料理を載せていった。二人分あるところを見ると、どうやらコイツも食べていくつもりらしい。戦闘の影響か、はたまた、考えてみれば昨日はまともに食事をとっていなかったからか、確かに腹は猛烈に減っていた。外を見れば大分明るい。丁度昼食時なのかもしれないな……ってアレ？ デジャヴ？

とにかく、全身がダルかったが仕方ない、と重い体を起こしてベッドから降りる。

「あれ？ ソレってオレの服？」

「アンタを運んだら汚れたから勝手に拝借したんだよ。まったく、シルヴィに言われてあそこに行ってみれば、血まみれのアンタが倒れてたんだからビックリしたぜ……」

なるほど。どうやら最後に聞こえた声の主はコイツだったらしい。しかし、修行中だったはずのヴィーを呼び出して、わざわざオレの元に寄越すなんて、姫さんは何を考えてるんだろうか？

「なんにしろ助かったよ。ありがとう、ヴィー」

「べ、別に、当たり前前のことをしたただけだ……っ」

何故か顔を赤くしているヴィーの向かいに座る。

やはり、姫さんは街へ侵入していたヤツらの動向に気付いたうえで、オレとぶつかるのを静観していたのだ。恐らく、戦闘中に周辺の家屋の中に住人の気配が無かったのも、姫さんが事前にどこかへ避難させていたということだろう。一体全体、どうしたらそんなことが出来るのか見当もつかないが……オレもヤツらも、そして魔剣調査員であるマリアですらも、完全に彼女一人の掌上で踊らされたってワケだ。今頃は、あれだけの数の死体の処理も、済ませてしまっているんだろうな……。

「……もう一つ、尋ねたいんだが」

「……なんだよ」

いざ、目の前に広げられた美味しそうな料理を頂こうというところで、オレは一つの疑問を口にした。

「なんで、エプロンなんかしてんの？」

「……なんだよ、アタシが料理をしたら、そんなに变か？」

「い、いや……」

そうか。それは、食べる前に聞いておいて良かったな。万が一、気付かずに食してマイナスな反応を示した場合、鉄拳が飛んでくる可能性があるってことだ。そして、オレが知る限り、コイツは家事をしたことが無かったはず。覚悟して臨む必要がある。オレは、全ての知識を総動員し、一瞬で戦略を組み立てた。

「そんなことはないさ。案外似合ってるよ。珍しく、髪も下ろしてるし……」

「なっ!？」 良いんだよ、そんなことは……っ」

よしっ。ヴィーが照れて俯いた、今がチャンスだ。

昔はまるで男の子みたいだったヴィーは、女性らしい点で褒められると、未だに耐性が無いのかすぐに照れる。普段そんなことを言えば、最悪、照れ隠しの鉄拳が飛んでくる可能性もあるのだが、こういう時には使える手だ。我ながら何故か非道な手段を用いた気もするが、今はそんなことを言っている場合では無い。覚悟を決めて、魚料理と思いきソレを口に運ぶ。……不味くても、我慢だヴェルク
！！

「……ってアレ？」

「……どうだ？」

料理を口にして、目を丸くしているオレに、ヴィーが上目遣いでこちらを見る。

「……う、美味いっ。いやマジで、本当に美味いぞ!？」

「そ、そうか……」

ヴィーが、心底ホッとしたような顔で、自分の作った食事を口に
する。オレも、思わぬ味に愕然として止めていた動きを再開する。
いや、本当に美味しい。ヴィーとはそこそこの付き合いがあるが、
こんな特技があったとは知らなかった。ここのオヤジさんには悪い
が、普段、この宿で出されるモノよりも数段上の域に達しているよ
うに感じる。

「……コレ、本当にお前が作ったのか？」

「なんでそんな嘘つかなきゃならないんだよっ。本当にアタシが作
ったんだっての!!」

「だ、だってお前、全然……料理なんか出来なかっただろ？ その

割に、美味すぎるぞ、コレ」

パクパクと、手の止まらないまま行儀悪く尋ねると、ヴィーは怒ったような、嬉しいような表情を見せる。やっぱり、作ったものを美味しいと言われると、たとえ相手がオレであっても嬉しいのだろうか。やがてヴィーは、そっぽを向いて小声で言う。

「そ、それは……いつかヴェルクに披露しようと、シルヴィのところで練習させて貰ってたから……」
「え？」

なにかブツブツ言っているが、よく聞こえない。コイツ、たまにこういう時があるんだが……何かそんなにオレに隠しておきたいことでもあるのだろうか？ ……まっ、いいか。

「いやしかし、これは良いお嫁さんになれるんじゃないか、お前」
「……ッ！？ うるさいっ、早く食え！！ ……馬鹿ヴェルク」

そうして……オレは一週間ぶりに、心から安らいだ時間を過ごしたのだった。

11. 戦士の休息（改訂版）（後書き）

2011.08.28 改訂

12. 幕間／調査報告書

●ガルジ遺跡より発掘された魔剣についての経緯報告

王都に待機していた私、マリア・フォーレスの元に、探索者ギルドに潜入している諜報員から、帝国領寄りにあるガルジ遺跡で、探索者たちの手によって魔剣が発掘されたとの情報が入る。

その時のパーティーメンバーの情報は以下の通り。

ヴェルク……30歳、男。黒髪黒眼、短髪無精髭。痩せ型で背は高め。元傭兵の探索者で、盾剣使いとしてギルドに登録。探索者としての経歴に目立ったところは無く、特筆すべき要素も無い。ただし、彼と組んだ探索者の生還率は100%となっており、隠れた実力者である可能性も。今回、ガルジ遺跡で魔剣を入手したとされる人物。

シルヴィア・ステイナーゼ……16歳、女。銀髪赤眼、透き通るような白い肌と美しいロングプラチナの持ち主。王国でも有数の権力を持つステイナーゼ家の現当主で、屈指の炎術使い。その若さと可憐さで有名な彼女のような人物が、何故探索者をしているのかは、王国七不思議の一つである。今回、魔剣に繋がる遺跡の情報を入手したのは彼女。

ヴィー……18歳、女。赤髪緑眼。長い髪をポニーテイルにしており、女性としては背が高い。大剣使いの探索者で、普段はシルヴィアの護衛をしている模様。粗暴な振る舞いが目立つが、ドレスを着れば貴族の令嬢と言われても差し支えない美女。実際、シルヴィア

の護衛のためにその姿でパーティに参加したこともあり、軟派な貴族男に話しかけられ前歯を叩き折ったことは、一部では有名な話。

アンナ……12歳、女。金髪碧眼。12歳の割には子供っぽい印象の可愛い少女だが、外出時は鉱物アレルギー対策のマスクとフードを被っており、その姿が確認できるのは教会内だけとのこと。ギルド内でも最高の回復魔術使いで、田舎の孤児院から引き抜かれてきたらしい。教会術師としての毎月のお給金と、探索者としての収入は、そのままその孤児院へ送られているとのこと。

フェン……18歳、男。金髪碧眼。痩せ型。男性にしては背は低め。アンナ付きの護衛兼保護者。彼女が田舎にいた時からの付き合いらしく、双剣使いとしての腕前は超一流。探索者になったのも、彼女を危険から守るためらしく、その過保護っぷりは有名。幼女趣味の可能性も噂されているが、その美貌から街の女性たちからは羨望のまなざしで見られている。

以上の情報を得て現地に急行した私は、街についたその夜に、魔剣所持者とされる元傭兵で探索者の「ヴェルク」と接触到成功。今回の探索で酷い怪我をしたという情報もあったが、そのような様子は見受けられなかった。回復術師「アンナ」による治癒の成果か。

酒場に入った彼に近づき、葉を使って酒に酔わせ情報を引き出そうとするも失敗。介抱するフリをして、所持者の借りている部屋へ潜入・搜索するも、魔剣の姿は見当たらず。仕方なく、所持者を油断させるために関係を持ったように偽装。

翌朝、昨夜の記憶を失った所持者のそばで、眠ったフリをして様

子を伺うも、部屋で魔剣を取り出す様子無し。所持者はその足で探索者ギルドに向かったため、街に出て仲間の諜報員と接触。ギルドに潜入しているその諜報員へ一時調査を引き継ぐ。

所持者が留守の間に、彼の滞在している宿の経営者父娘に接触。最近変わったことが無かったか、それとなく確認するも成果無し。娘のほうには睨まれた。部屋の中を搜索しながら、仲間からの連絡を待つ。

夕方。再度諜報員と接触するために外出したところ、路地裏で何者かに拉致される。睡眠薬を嗅がされ目隠しをされたが、咄嗟に奥歯に仕込んだ薬で覚醒、視界は奪われたものの、耳を澄まして正体を探る。

すると、仲間同士で使っている言葉が帝国語であることが判明。その内容から察するに、どうやら同じ部屋に泊まっていたことで所持者の恋人と勘違いされ、人質にされたようだった。残念ながら、我々の得た情報によると、所持者に今現在恋人と呼べる存在はいない。

その後、どこかに運ばれ、椅子に座らされ縛られる。所持者が助けにこない可能性が大きかったため、相手の正体を探って脱出しようとするが、その直前にこちらの素性が漏洩（我々の組織内部に不穏分子の可能性あり）してしまう。

そこに所持者が現れて（見張りから奪った服で、黒装束の帝国人に変装していた）、私が魔剣調査員だということが発覚してしまう。驚いてはいたようだが、特にこれといった悪い反応も無く、協力し

て監禁されていた部屋からの脱出に成功。

しかし、その屋敷周辺を多数の帝国軍人に囲まれる（こちららも国内への侵入方法の調査が必要と思われる）。

そこで初めて、所持者が魔剣を使用。陛下の持つ魔剣「ヴィジター」と同じく、異空間に保管できる無形タイプのもので、剣・槍・投擲用ナイフなど、多種の武器に形状を変える能力を持つ。

特筆すべきは、飛翔してきた攻撃魔術を空中で分解し魔剣に吸収してみせた魔力吸収能力で、また、使用者の能力を増大させている可能性も有り。たった一人で武装した50人からの帝国人部隊を殺戮し、確認出来たその戦力は王国最強の聖貴士団員レベルと思われる。

戦闘後、使用者が気を失うと同時に消失した模様。「回収」を行う場合は、所持者の意識がある状態でしか方法は無いものと思われる。

その直後、事前の情報にあった、探索者仲間の「ヴィー」と呼ばれる女性が現れ所持者を回収。その後同じ部屋で一夜を共にしたらしく、更なる接触は叶わず。

●現段階における、魔剣の調査結果

所持者本来の能力も考慮せねばならないが、以上のことから推測される魔剣自体の性能は少なくとも「B+」。放出能力は現在のところ確認できず。

戦果は上々だが魔剣自体の攻撃的な能力は低く、その分、防御的な能力には優れており、もしヴィジターのようなS級魔剣の攻撃をも吸収できるようであれば、戦略的な価値は十分にあるだろう。

また、もしそのような能力を持った上で万が一敵対した場合も、直接的な魔術の使用を避ければ、聖貴士たちの持つ「秘匿された13本の魔剣」による魔剣封じは通用するものと考えられる。

ただし、現在の所持者は王国に友好的な様子で、かつて傭兵として戦争も経験している。そのため、来るべき帝国との再戦に備え、王国側に引き込むのが最良と思われる。

● 追記

先ほど入った情報によると、魔剣は「ハルマッゾ」と名乗る鎧型モンスターから入手されたもの、とのこと。こちらについても情報を収集していく。

——魔剣調査員　マリア・フォーレス

13. 志願者

結局その日は、やたらとオレの身体を心配するヴィーを説き伏せられず、彼女の世話の元、一日中部屋で過ごすことになった。

考えてみればハルマツゾとの戦いで、全身にけして浅くない切り傷を付けられ左手を切り離されたり、昨夜だって路地裏で血まみれで気絶してるところを見つかってしまったのだから、まあ、心配されても仕方ないのかもしれないが。

口とは裏腹に性根の優しいヴィーとしては、放っておけないのだろう。

「ふああ……。ヴィー、ちょっと酒が飲みたいんだけど。あと煙草も……」

「駄目だ駄目だ。今日は寝てろ」

てなワケで、オレは体力回復のために、嫌というほどの睡眠をとられた。その間ずっと傍らにいたヴィーの視線がくすぐったかったが……。

ヴィーは、その後もなんだかやたらと気合を入れて夕食も作ってくれたりしたのだが……。昼食より豪華になったソレは、やはり格別だった。それを伝えると、ヴィーはやはり照れながら俯き、

「そ、そんなに言うなら、毎日作りに来てやろーか……。？」

などと、上目遣いで、まるで冗談のようなことを言うので、オレは少し本気にして悩んでしまった。

「いや、非常に魅力的な提案だが、遠慮しとく。普段、飯を出してくれるこの二人にも悪いし」

「……た、確かに、そうかもな」

気を落としたヴィーを見て、どうやら本気で美味しいと言ってなように思われたかな、と不安になる。考えてみれば、コイツも年頃の子なワケだし、一時は半ば兄代わり（父代わりでは絶対無い）として面倒を見てやったこともあるオレとしては、そういう様子を見ると罪悪感に苛まれて仕方がない。うーん。

「そうだなあ。でも、あれだけ美味しいと、たまにお前の部屋にでも食いにいくのも悪くないかもなあ……」

「ア、アタシの部屋……ッ!??」

オレの、フォローのために言った言葉に対し、ヴィーは何故か先ほどよりも赤くなって、座っていた椅子から勢い良く立ち上がった。それからうろうろと視線を彷徨わせる。

「し、仕方ねーな。そそそ、そんなに言うなら、今度、部屋に来るか……?」

いやいやヴィーさん、そこ、拒否るところだろ? お前の部屋に、オレが行くんだぞ?

しかし、時既に遅し。今度、ヴィーの修行が一区切りついたところ、ヤツの借りている部屋にお邪魔することになってしまった。……ていうか、考えてみればどこに住んでるのかも知らないんだけど。

それにしても、好きでもない男にあそこまで献身的に尽くしてくれる様子を見てしまうと、なんだか……ヴィーの将来が不安になる。変な男につかまらなきゃ良いが。一度、そういうことをきちんと伝えたいほうが良いかもしれないな……。

昨晚のやりとりを思い出して、ヴィーの将来に一抹の不安を感じながら、ギルドへ出掛ける準備をした。そして……。

オレはベッドと反対側に置かれたソファの上で毛布に包まる「ソレ」を見た。

「すう……すう……」

ヴィーは、オレが宿を抜け出さないよう見張るために泊まっていたと主張し、帰宅を促すオレの必死の説得は、虚しく玉砕してしまった。いや、なんていうか、ものの見事に押し切られたのだ。

まあ確かに、大怪我しときながら宿を抜け出し、酒場で女を引っ掛けてきたオレに対抗できる手段はほとんど無かったんだけど。言い訳じみたことしか言えなかった……。

さて、ソファに寝かせたままっていたのもなんだし、ベッドに運んでおいてやるか……と、毛布に包まったヴィーの傍に跪き、肩と膝の裏に手を入れて立ち上がる。うーん、こんなに軽いのに、あれだけの大剣を振り回すんだからなあ……。

「……ヴェル……ク」

「おっと、起きたかー……って、おい」

寝言かよ。まったく、幸せそうな顔をして、どんな夢見てるのかね？

「昨日もお楽しみでしたね」

「なに言ってるんだよ、オヤジさん。気色悪いぞ」

部屋にヴィーを置いたまま抜け出して階段を降りてくると、この宿屋の経営者であるオヤジさんが、カウンターでこっちを見て意地悪そうにニヤニヤしている。凶悪そうな髭面も相まって、人によっては獰猛な肉食獣と見間違えるかもしれない。

「そのまんまの意味だよ。まったく、連日違う女を連れ込むたあなあ……」

「ヴィーはそういうんじゃないよ。分かってンだろ」

「さあてねえ……」

こんのハゲオヤジ、笑いが止まらないつつー顔をしてやがる。○
○してやろうか……。

心の中で他人には聞かせられないような悪態をついていると、オヤジさんの娘であるミントが、カウンターの奥にある部屋から出てくる。ちなみに、父に似ず、非常に愛くるしい子だ。いずれ恋人が出来たなんてことになったら、オヤジさんは怒り狂うだろうなあ。

「あ、おはようヴェルク！」

「おはよう、ミント。ほら、朝の挨拶ってのはこうだろ、オヤジさ——」

「結局、昨日はヴィーお姉ちゃん、泊まっていたの？」

「……………」

瞳をキラキラと輝かせて尋ねてくる13歳の少女。この年で家業を手伝う（つていうか、今やほとんど彼女主導だ）見習うべき孝行娘だが、女つてのは、いくつであつても……。はあ……。

「わたし、こないだの怖そうなお姉さんより、ヴィーお姉ちゃんが良いなあ」

「……ちなみに、理由は？」

「だって、強くて優しくて、それに可愛いし。お料理も上手でびっくりしちゃった。……あ、でもヴェルクにはちよつと勿体無いかも」

13歳に可愛いって言われるヴィーつて。……いや、昨日の様子を見ると、わからんでも無いかもしれんが……。

「大丈夫だよ。アイツにも、いずれ良いヤツが現れるさ」

そう言うと、何故かミントは白けた様な表情で、こちらを見る。

「ふーん。……ヴェルクつて、頭悪いのね」

「ガハハ。オレは知ってたぞ、ミント」

ひでえ。この父娘は、客オレに対する心遣いってもんが欠如しすぎている気がしてならん……。誰か、オレに敬意を表してくれるヤツとかいねえもんかね……？

「ヴェルク、いや先生。僕を、弟子にしてくださいっ」

はい。というワケでやってまいりました。弟子入り志願者。いや
ていうか何言ってるんだよ……フエン。

14. 街の女王

「……で、どうということだ？」

宿の食堂で朝飯食ったオレんところに現れ、いきなり片膝をついて弟子入りを志願しだしたフェンを椅子に座らせて、オレは問い掛けた。そのまま食事は継続中だ。食べながら話すよりも、食事を中断した時のほうがオヤジさんも煩いからな。今は、気を利かせてくれたのか、食堂から出てカウンターに戻っているが……。

「アンナも元気になったので、先生に弟子入りを、と」

「先生って……あのなあ、そういうことじゃなくて、どうしてオレの弟子になんかなりたいんだってことだ」

「それは……」

表情を曇らせ、俯くフェン。ミントが出してくれたマグカップを掴む両手には力が入り、一言一言、吐き出すように呟く。

「あの日、僕一人ではアンナを救うことが出来ませんでした。それどころか、あのまま戦っていれば、僕はあの怪物に殺されてアンナを悲しませることになっていたでしょう。だから……」

「あー……」

なるほど。ただ、ハルマツゾに勝てなかっただろいうことを悔いているのではなく、将来同じことがあってもアンナのやつを守るようににしたいってことか……。その身も、心も。

しかし、姫さんからの情報に、コイツが落ち込んでいるなんてのは無かったし、きつとアンナの前ではそういう面を見せないように

努力しているのだろう。まったく、格好付けやがって。

だが……そういうのは正直、嫌いじゃ無い。

「……ま、いいだろ」

「良いんですか!？」

「まあ、オレが教えても、強くなれるかはお前次第だけだな。あと、先生ってのはナシだ。オレが恥ずかしいからな……」

「ッはい、師匠っ、よろしくお願いします!!」

「……あのな、だから――」

それじゃ意味ないだろ、と言おうとしたところで、食堂の扉が勢い良く開いた。おいおい、この宿、そんなに新しくないんだから壊れちまうぞ？

「ヴェルクッ、どこ行きやがった!？　って、アレ……フェン？」

恐らく、自分が眠った隙にオレがまたどこぞへ抜け出したのだとも思ったのだろう。部屋に置いてきたヴィーが、怒りの形相で食堂に駆け込んできたのだ。

しかし、オレと、対面に座るフェンを見て動きを止めた。……その身に、一目でオレのものと分かる服を着たまま。

食堂を、嫌な沈黙が支配する。やがて、フェンが「ああ……」と納得したように頷く。……いやな予感しかしねえ。

「おはようございます、ヴィーさん。貴女、ヴェルク師匠とはそういうご関係だったんですね」

「な、ななな、そういう関係って……ッ!？」

「うふふ、ヴィーお姉ちゃん、顔があかーい」

いつの間にやら、騒がしくなった食堂の様子を見に来たらしいミントまで加わって始まったその喧騒に、オレはげんなりとした様子で肩を落とす。

「もう、いい加減に勘弁してくれよ……」

その後、萎えそうだった気持ちを奮い立たせたオレは、どうにか誤解を解いて、ヴィー、フェンと共に姫さんの屋敷にやってきた。一昨日の出来事について、恐らくオレよりも詳しいであろう姫さんから情報を得ようと思ったのだ。……それを確認するのが、恐ろしくもあるが。

やがて、オレたちの待つ応接間の扉が開いて、姫さんと執事の爺さんが現れる。たしか、名前はラステイとか言ったハズだ。

「ごきげんよう、皆様。大変お待たせいたしました。……ヴィーさんも、お疲れ様。あとでお話を聞かせてくださいね」

「お、おう……」

「……ヴィー？　なんだよ、お話って」

「な、なんでもねえよ」

あくまで優雅な動作で、オレたちと向かい合う位置に座る姫さん。執事のラステイ爺さんは、そのまま部屋の部屋の隅に行って、姫さんの分の紅茶の準備を始める。その動きはとても洗練されていて、さすがプロだな、と思わせるものだ。

「それで、今日はなんのご用件ですか？」

にっこりと微笑み、そう切り出す姫さん。

「わかってんだろ、姫さん。一昨日の、あの連中のことだよ」

「それは、魔剣調査員マリア・フォーレスさんのことかしら。それとも、街に入り込んだ帝国の鼠さんたちのこと？」

「……両方だ」

参ったね。覚悟はしていたつもりだったが、こうはつきりと言われると、目の前に座る貴族のお嬢様が、どれだけ規格外の存在かを思い知らされるぜ……。

「……あの、ヴェルク師匠？ 一体なんのお話をしているのですか？」

そこに、上手く事情を飲み込めていないフェンが質問をする。ああ、コイツ、ここんとこアンナの世話に付きっ切りだったせいで、街中で起きたことがよくわかってないのか。もしくは、姫さんによる情報規制が敷かれている……なんていう可能性もあるけれど。

と、その姫さんが意外そうな顔でこちらを見ていることに気付く。一体どうしたってんだ？

「……師匠？」

「あ、ああ。今朝方コイツがやってきて、オレに弟子入り志願してきたんだよ」

「ええ。師匠の手で、この身を鍛えなおしていただこうと思いましたが……」

「そうでしたの……」

少し驚いた表情を見せる姫さんを見て、なんていうか、姫さんも人間なんだな、と思えて少し気が楽になった。まあ、このことを知ってるのは、宿屋の親子含めて5人だけだしな。流石にあの二人を疑う真似はしたくない。

オレが、フエンに簡単な説明をしている間に、執事の爺さんが淹れたての紅茶を姫さんの前に置く。彼女は、その高そうなカップを口に運び、美味しそうに微笑む。

「ああ、美味しい。それでは、そろそろよろしいでしょう。……ラストイ」

「はい、お嬢様。ヴェルク様、まずはこちらをどうぞ」

そう言って、執事の爺さんは懷から一通の便箋を取り出して、ソレをオレが受け取る。姫さんが「どうぞ」と促すので、そのまま開いて中から手紙を取り出す。手紙に目を通す前に、姫さんに尋ねる。

「これは、なんなんだ？」

「今朝方書かれた、マリア・フォーレスさんの魔剣調査報告書ですわ」

「ぶは……ッ」

な、なんでそんなモンがこんなところにあるんだよ。くそっ、やっぱり前言撤回だ……。聞くのも恐ろしいが、尋ねずにはいられない。

「どうやって手に入れた？」

「企業秘密です。さあさ、お読みくださいな」

姫さんは、にっこりと笑って続ける。

「個人的には、ヴェルクさんが彼女と出会った夜の部分なんて、面白いですわ」

15. 師匠と弟子

「……これが、あの時のフィニッシュブローだよ」

フェンの修練のためにやってきた遺跡内。オレは気の一撃でスケルトンを四散させて、背後にいるフェンに言った。

「まあ、元々の戦闘スタイルを考えると、お前は何か別の技を考えたほうが良いだろうけどな」

「なるほど……」

オレの繰り出した技に目を見開いて、それでも頷くフェンは、続けて尋ねる。

「ところで師匠は、拳士だったのですか？」

「ああ、昔ね。……ま、ギルドには盾剣使いで登録していたし、それを前提とした仕事 came 来たから、知ってるのは……昔からの知り合いくらいかな」

姫さんなら知っていても不思議じゃないけれどな……などと、昼前に彼女の屋敷であった出来事を思い出す。本来知りえるはずのない情報を、あんなに簡単に教えて貰っておいてなんだが、全然嬉しくない。ヴィーのやつは、なんだか喜んでいたけれど。

手紙を読んで動きの固まったオレに慰めの言葉を掛けながら、やたらニコニコとしていて……せめて、同情するフリくらいしてくれと言いたい。

「師匠。その、マリアさんに騙されていたのが、よっぽどショック

だったようですね」

「……それはもう、言わないでくれ」

男として情けなさすぎて、本当に涙が出そうになった。あの日、マリアに出会って有頂天になっていた自分を呪い殺してやりたい!!

……平常心、平常心。

さて、話を本題に戻そう。フェンの行動ってのは、アンナを心配させないことが前提になっているみたいだし、夜には教会に帰らなければならぬだろう。さっさと始めないと、いつ帰れるか分からない。

「で、今回お前に教えておきたいのは、コレだ」

「……？　なんですか、コレは？」

オレは、黒く細長い布をフェンに手渡して、言った。

「目隠しだ。お前にはコレから、暗闇の中で戦ってもらう」

「は…ッ、は…ッ」

数時間後、遺跡内には荒い呼吸音が響いていた。それはまるで獣の呼吸のようで、そこに、あの華麗な技を見せていた双剣使いの姿は無い……。

「は…ッ、は…ッ、……くっ!!」

視界を奪われたフェンは、敵の気配を感じるたびに、圧倒的な手数を繰り出して相手に攻撃させないという戦法をとっていた。もちろん、剣士として大体の当たりをつけて剣を振るっているわけだが、それは敵の剣や、身に着ける鎧などにぶつかり、とても効率的とは言えない。

その無理矢理な戦い方のせいで、彼の持つ剣は、二つともボロボロになっていた。……コイツが使うくらいなのだから結構な業物なのだろうが、諦めて貰うほか無い。手にも余計な負荷がかかり、マメが破れて血まみれになっているが……それはまあ、アンナに治して貰えるだろう。

さて、そろそろ限界か……と思い始めていると、遺跡の奥、階下の方からスケルトン5匹の気配。

なんだか……あの殺戮の夜から、感覚がより研ぎ澄まされている気がする。＜石＞によって得たハルマツゾの技が、オレの体に馴染んできているということだろうか。

とにかく、タイミング的に丁度良い、と思ってフェンに声をかける。

「フェン、そろそろ目隠しを外して良いぞ」

オレの声を聞いたフェンが、ビクツと肩を震わせる。当然だ。オレはフェンの邪魔にならないよう、己の気配を極限まで抑えていたのだ。

視界を遮られたフェンにとっては、誰もいないはずの場所から声だけが聞こえる状態だ。……というか、考えてみると、オレの気配

が消えても目隠しを外さないで戦い続けたのだから、結構根性あるよな、コイツ。

言われたとおり、フェンが目隠しを外すと、そこには汗びっしょり、憔悴しきった美少年がいた。18歳を美「少年」というのかどうかは知らんが、疲れ果てても損なわれない美しさっていうのは、殺意を通り越して感嘆の念すら浮かぶな……。

「もう、今日は……ッ、終わり、ですか？」

「ああ、そろそろ良い時間だしな、切り上げよう」

「これでっ、僕は、本当に強く、なれますか？」

「うーん、そうだなあ」

両手を地面につき、息も絶え絶えなフェンから視線を外さず、オレは右方向に親指を差す。その先では、5匹のスケルトンが丁度、階段を上がってくるところだった。

「とりあえず、コレを続けるところということが出来るようになる……ハズ、つてのを見せておこうか」

オレは二人に掛けていた照明魔術を解いてしまった。スケルトンの群れを前に、周囲は闇に包まれ、ヤツらの装備のガチャガチャという音だけが辺りに響き渡る。地下深くにある遺跡は、明かりが無ければ完全な闇になる。

オレは、意識を集中させて前方へ一歩踏み出した。

「し、師匠!？」

「まあ、見てろ……つつても、見えないか」

驚くフェンを尻目に、そのまま一番先頭にいたスケルトンの横薙ぎの剣を身を低くしてやり過ごし、胸に一撃。バラバラになる骨と鎧。

そこに、横から突き出された錆付いた剣。それを身を軽く捻ってかわし、カウンターを相手の頭部にぶち込む。そこに脳があれば四方の壁にこびりついただろう勢いで、頭蓋骨が破裂する。

その首の無くなった体の肩部分を軽く押して地面に倒すと、それに躓いて一匹のスケルトンが転び、それを踏み台にジャンプ。最後尾にいたスケルトンを、その背後にある階段に蹴り飛ばし、着地。

踏み台にされたスケルトンが起き上がったところで照明魔術を掛けなおし、明るくなった遺跡内で、スケルトン越しにフェンを見る。チェックメイト。

「え……!?!」

オレに気を撃ち込まれて崩れ落ちるスケルトン。その胸には、人間の頭部大の穴。フェンは、それを見てもまだ、なにが起こったのか分からない、という表情をしている。オレは、懷から煙草を取り出すと、口にくわえて火をつける。

ふうー。なんだか少し、気が晴れたぜ……。

「……ま、こんなもんかな。あれを続ければ、相手の気を感じることで攻撃のタイミング……オレは<機>と呼んでいるが……それを読めるようになるハズだ。ハルマッゾ戦でも、コレがなかったら死んでただろうな」

それにしても、ここしばらく盾剣使いとして生きてきたオレが、こうして堂々と「気」について話しているなんてなあ……。言っても理解してくれるヤツなんてこれまでいなかったが、オレより遙かに才能のありそうなフェンなら、きっとモノにしてみせるだろう。

数千年分の技術を持つハルマツゾのく石のお陰で、己の鍛錬にあまり意味が見出せなくなってしまった今、誰かを育てるということのほうが、もしかすると楽しいのかもしれない……。自分で照明魔術とか使えるようになったのは、たしかに便利なんだけど。

「一朝一夕で身につくもんじゃないが、まあ、気長にな」

「……は、はいっ、ご指導、よろしく願います!!」

はいはい……。それじゃあ、帰りますか。

16. 菓子職人

フェンを伴ったの遺跡探索（というか、あれはただの修行だったけど）を終えて、一度探索者ギルドに戻り、預けていた荷物を受け取ったオレは、知り合いの店に顔を出すことにした。

ちなみに、フェンとは遺跡の出口で別れている。

血まみれになってしまった手を簡単に応急処置してやったが、どうやら急いでアンナの元に帰りたいらしく、かなり慌てていた。その様子が、仕事でなかなか帰れず、自分の子供を家に待たせてしまった親みたいだった。本当に、アンナが大事なんだなあ……。

今日、街中と一緒に歩いてみたが、アンナ以外の子供たちには反応すらなかったし……。幼女趣味というより、その愛情の対象がアンナ限定なだけなのかもしれないな。……なんか、余計にヤバい気もするけれど。

せめて、アンナが成人するまで待ってくれよ、フェン。

「よう」

「あら、ヴェルク、お久しぶりね」

表の看板に「西の風」という名が書かれた店。その裏口から入ると、そこにある厨房では古い知り合いであるナターシャが一人、いつものように翌日の仕込みをしていた。甘い香りが充満している。

「……いつものだ。使ってくれ、ナターシャ」

そう言って、オレは昼間に姫さんの屋敷を訪ねた際に受け取っていた探索の報酬を取り出す。半ば冗談だったハルマッゾ討伐代もきっちり含まれたそれを、ありがたそうに両手で受け取るナターシャは、すまなそうな表情で言う。

「いつも悪いわね」

「気にするな。知らない仲じゃないんだし、当然のことをしてるだけだ。……あの子達、どうしてる？」

「みんな元気よ。貴方に会いたがっているわ」

それを聞いて、思わず微笑む。どうやら、忘れないでいてくれるようだ。

「オレも会いたいが、今は無理だな。最近、周りがちょっと血生臭いことになってる。本当は、ここに来るのもどうかと思ったんだが……」

「私のことは、気にしないで。いざとなったら自分の身くらいは守れるわ。お菓子作りって、結構腕力使うのよ？」

そう言ってガッツポーズをとり、笑うナターシャ。オレも思わず、それにつられて笑ってしまう。

結局、オレは店内にあるテーブル席でナターシャの対面に座り、出してくれたコーヒーを飲みながら、最近の経過を報告していた。

ちなみに、姫さんから得た情報も話してしまっているが、コイツからその情報が漏れたりすることは、絶対に無いだろう。オレがそのくらいには信頼できる、数少ない人間だ。

「……そう。そんなことになっているの」

「まあ、心配すんな。ハルマツゾから受け継いだく石のお陰で、そうやられることなんて無いだろうしな」

一通りの説明を終えると、眉をひそめて心配そうな顔をするナターシャに、オレはなんでもないことのように笑った。

「ソレって、そんなに凄いものなの？」

「凄い凄い。そもそもハルマツゾが本来の肉体だったら、オレなんか、あつという間にやられてたさ。鎧に魂を移してパワーダウンしていたから、たまたま勝てただけで」

「そんなに？ ヴェルクでも勝てない相手って、あんまり想像つかないわね……」

「はは、オレくらいのヤツらなら、王都あたりに沢山いるだろ」

そう、例えばそれが、ハルマツゾの力を受け継いだ今のオレであっても、な……。

千年モノのく石を受け継ぐ貴族らで構成される「聖貴士団」。そして、彼らが持つとされる「秘匿された13本の魔剣」か。姫さんほどじゃないけれど、敵に回したくは無いな……。

マリアの報告書を読んで明らかに変わった聖貴士団の名前は、かつての戦場で王と共に活躍したと語り継がれているが、やはり魔剣調査員の存在と同じく公にはなっていない。こうして見ると、この国って結構、秘密機関が多いんだな……。

「そういえば、この店ってそんなに有名なのか？」

「え？ どうしたの、今頃」

雰囲気が重くなってきたので話題を変えてみると、ナターシャは驚いた表情をする。いや、たしかに以前、この店の評判をナターシャ本人から聞いたことがあったから、本当に今更なただけれど。

いつも、こうして店の閉まった夜にしかやってこないからなあ……。

「いや、こないだパーティ組んだヤツらに、オレがお前と知り合いだって言ったら、全員すごく食いついてきてね。なんでも、お前は街の女子連中にとって神様なんだとか、なんとか」

「あらあら、それは嬉しいわねえ」

さつきとは打って変わり、にこにこしだすナターシャ。それだけ評判だっというなら、褒められなれていそうなものだが、本当に嬉しそうだ。ただし、ヴィーのそれと違って態度に余裕がある。この違いはどこからくるものなのかね？

そういえば、ヴィーと同じで、コイツとこういう他愛も無い会話をするのも久しぶりか。この街にくる以前からの、かなり長い付き合いになるのだが、街に来てからは探索で稼いだ金を渡しにくくらいだったしな。甘い物のことは、良く分からないし……。

「さて。それじゃあ、そろそろお暇するよ」

「もう？　夜も遅いし、いっそのこと泊まっていけば？」

ナターシャの言葉に、オレは席を立ちながら笑う。

「はは、遠慮しとくよ。……そうだ。今度、そのパーティ組んだヤツらに特製ベリーパイを奢るハメになってな。街じゃ中々手に入ら

ないそうだが、頼めるか？」

「あら、そのくらいお安い御用よ。事前に連絡してくれば、店を貸し切りにしたって良いわ」

「いや、なにも別に、そこまではしなくても良いんだが……」

肩をすくめて、そんな本気とも取れる冗談を言ってオレを慌てさせると、ナターシャはうふふと笑う。流石のオレも、街中の女子供を敵に回すようなことはしたくない。ヤツら、時折モンスターよりも凶暴になるからな。

ナターシャは、オレを表の入り口から送り出すと、軽く手を振って言う。

「それじゃおやすみなさい、ヴェルク」

「ああ、おやすみ」

17. 焦燥

あれから数日。

例の約束は、ヴィーのやつが中々捕まらなくて、果たされていないままだ。他のやつらも、どうせならあの時にいた全員一緒に……という希望で、しばらくは各々自分のやるべきことに専念することになった。

あの日以来、オレは毎日のようにフェンと共にあちらこちらの遺跡に潜って修行に明け暮れている。ちなみに、街に近い遺跡内でのモンスターを討伐すると、いくらかの報酬が受けられるので、生活費稼ぎも兼ねていたり。

先日、またティアの研究に付き合って、少し良い収入があったんだが、溜まっていた家賃（食費込み）に消えてしまったからな……。そりゃあ、この間から宿屋の二人がどこことなくオレに冷たいワケだ。

そういえば、研究室に訪れた際、ティアから魔剣に名前を付けることを勧められた。どうやら、それによって魔剣を使役する際の精神負担を軽減する効果があるらしい。

『私たちだって、名前も知らない人と一緒にいるより、知ってる人と一緒にいるほうが安心するでしょ？』

……とのことだった。たしかに、魂で繋がっている、なんていうくらいだし、理屈は合っているかもしれない。こないだの戦闘でも大分消耗したわけだからなあ。ただ、ハルマツゾが魔剣に名前を付けていたという記憶は無く、そういう知識も無かった。

それでも一応、ティアに言われたとおり、適当に名付けておいた。

『うーん。それじゃ、ハルマツゾの持っていた魔剣だから、ハルマ
ーで』

……正直、オレの言葉を聞いたときのティアの白けたような視線は、少し心にグサツときたね。魔剣ハルマー。そんなに悪くないよなあ……？

まあそんなこともありつつ、今日もオレは、いつものようにフェンに気の捉え方を教える予定だった。

とはいえ、元々センスの塊みたいな童顔の男は、数回の実戦をこなしただけで、その技術を手にしつつある。そろそろ、次の段階に進むべきかと考える。

このまま、かつてのオレを超えるのも時間の問題だな。……など
と思って弟子の先行きに安心しきっていたら、フェンが珍客を連れ
てきた。

「毎日毎日、生傷さこしらえてきて、一体なにしてるだか!？」

それは、珍しく怒った様子のアンナだった。いつもどおり、マスクとフードのちんちくりんなファッションで、腰に両手を当てて胸を張り、怒りを表現している。なんか、こうして見ると、ぬいぐるみみたいだな。

「す、すいません、師匠。どうしても、止められなくて……」

「……なんかオレが悪者になってねえ？」

「いくら修行つっても、フェンがあんなに怪我するなんておかしいべー!!」

「ちょ、ちよっと、アンナ……」

たしかに、昨日は少し、大きい怪我をしたんだよな。フェンがアンナを心配するように、フェンのことを心配をしているだろうアンナの怒りはもったもかもしれない。しかし、こういう状態の子供の相手は、苦手なんだよなあ……。

それからどうにかフェンが説得を続け、アンナがこの修行に同伴するということが決着がついた。まあ、怪我をすぐに治してくれるのは、万が一の保険という意味でも、修行の中断を避けられるという意味でもありがたい。ハルマツゾも、回復魔術はあまり得意じゃなかったみたいだしなあ……。

ただし、普段のアンナは、昼間は教会での回復術師としての治療活動に従事しているので、休みが取れたときに限り……ということになったが。

探索者としての経験の浅い理由がそこにあるアンナだが、こないだのパーティの中で、一番忙しいのは最年少のコイツなのかもしれない。姫さんだって、ステイナーゼの家を継いでいて、ヴィーはその護衛についている。フェンだって、ついこないだまで四六時中アンナを守っていたのだ。

……ってアレ？ 最年長のオレが、一番暇じゃねえ？

いやな思考の結果に頭を振り、フェンの様子を伺う。恐らく、アンナに余計な心配をさせたくなかったのだろう。複雑そうな表情で、遺跡内の通路を歩いている。

「まあ、そんなに気に病むなよ。アンナにだって、お前を心配する権利はあるさ」

「そうですね……。ただ出来れば、この修行が成果を出すまで、アンナには安全な場所にいて欲しかったのですが……」

もしかすると、ハルマツゾとの格の違いを見せ付けられたあの日から、アンナを守りきるという自信を喪失しかけているのかもしれない。

「今の自分がアンナが守れるか、不安か？」

「……………」

オレの質問に、フェンは黙ったまま俯く。あの日までのフェンは、どこまでも自信に満ち溢れて決して揺るぐことの無い、生意気な小僧だったんだがなあ。一度の敗戦でここまで弱ってしまうのは、やはり若さからだろう。

「だけどなフェン、それで良いんじゃないか？」

「え？」

生きていく上で、一度も負けない人生など無いだろうしな。……
そう思いながら続ける。

「自分より強い相手と戦って運よく生き延びたんだ。あとはソイツを超えられるように努力し続けて、より強いヤツになっちまえば良

い。ま、口で言うほど簡単じゃないけどな。……それまでは、オレがフォローしてやるよ」

「……はい。ありがとうございます、師匠……っ！」

などと、ちよつと良い感じの師弟っぽい会話をしているオレたち二人は、ジト目で見つめ続けるアンナの怒りの「気」に、気がつかないふりをしているのだった。その怒りがフェンの身を心配した結果生まれたものだけに、フェンも、過酷な修行を課しているオレも、文句の言いようがない。

「二人でブツブツと楽しそうだな。毎日怪我ばっかして、そんなに修行が面白いのか？」

「い、いえ、とんでもありませんよ、アンナ……」

首をちょこんと傾げて、うーん、と疑問の表情を浮かべている……であろうアンナ。冷や汗をかきながらそれに答えるフェンの声は裏返っている。……そんなにアンナを怒らせるのが怖いのか、コイツ。

と、そこで――。

「……ん？」

「? どうかしましたか、師匠？」

急に立ち止まって集中しだしたオレに、フェンが問い掛ける。

「……ああ、くそっ!! お前、アンナ連れて来い!!」

「あつ、どこさ行くだ!？」

二人に説明をする時間も惜しんで、オレは全力で遺跡の奥へ走り

出した。見つけた階下へ続く階段を一気に飛び降り、「そこ」に辿りつくまでに漆黒の魔剣ハルマーを召還して、幅の広いタイプの投げナイフ8本に変化させる。

たしかに、心なしか負担が軽いような気もするが、元々魔力を消費しない魔剣であるハルマーでは、その効果は判別しにくい。

「はあ、はあ、だ、誰か……」

通路の角を曲がり、そこに現れた人影……否、スケルトンたちの群れを見る。その中には、たった一人うずくまる女の姿。その呼吸は浅く、地面には血が広がっている。

それを目で確認する間に、スケルトンの発する気を頼りにナイフを全て投擲。それぞれの首の骨を断ち切られたスケルトンたちが、地面に崩れ落ちる。

それを尻目に、動かない女のそばに駆け寄ったオレは、腰の探索用ポーチから包帯を取り出して止血を始める。手足に裂傷、そしてわき腹を刺されているが、見た目の割に傷は深くない。しかし――。

「……か、顔。わたしの、顔が」

女の命であるその顔に、縦横の大きな裂傷が走っている。特に、横に引かれた傷は鼻を上下に裂いて頬骨を露出させていて、端整だったであろう顔に凄惨な印象を与えている。

「今、腕の良い回復術師が来る。少し辛抱してろ」

そこへ、アンナを背負ったフェンが現れる。

「はあ、はあ。師匠、これは……?」

「話はあとだ。アンナ、こいつを治せるか?」

オレの言葉に、よいしょ、とフェンの背中から降りたアンナは、その女に近づいて容態を調べる。その間にも、女の傷に掌をかざし、痛みを和らげる効果のある魔術を掛けているのが分かる。

「ああ、このぐらいだったら、こないだヴェルクの腕さ繫いだ時より大分楽だあ」

アンナはあっさりとそういうと立ち上がり、肩から提げた大きな鞆から短い杖を取り出してかざす。その先端には、魔力を一定量増幅させる宝石がはめ込んであり、アンナの魔力に反応して、淡い緑色に輝きだす。

その輝きが女の体を包み込み、傷ついた部分を補うように光が集まっていく。手足の裂傷と、腹の刺し傷、顔に刻まれていた傷とが、みるみるうちに修復されていくのがわかる。まるで、時が巻き戻っているかのような、不思議な光景だ。

「ほれ、終わりだべ」

そう言って、アンナは杖を鞆に仕舞ってしまおうと、女のそばに屈みこんでオレの巻いた包帯を外し始める。その手つきは慣れたもので、普段の教会での姿を伺わせる。

アンナはフェンから水筒を受け取り、傷口に水をかけて血を落とす。すると、そこにはまるで傷跡のないまっさらな皮膚が存在している。すでに、傷のあった場所が分からないくらいだ。女が心配し

ていた顔の傷も、キレイに治っている。

回復術による傷の完治度は、その資質によるところが大きいというが、まったく大したもんだ。今日、こいつがいなかったら、この女は運よく助かったとしても、心と顔に深い傷を残してしまうところだったかもしれない。

「失くした血の量が多くて体力が落ちてるで、さっさと上に運ぶのが良いだよ」

「ま、待って……」

オレとフェンとを促して、地上に上がろうと提案するアンナを、その女自身が引きとめた。

「待って、わたし、一人じゃないんです……」

「ほかに、探索者仲間がいるんだな？」

通常、探索者が一人で遺跡を探索することは許されていない。よほどの実力者であれば別だが、その実力者たちだって、何が起こるか分からない遺跡の中へ、進んで一人で入っていったりはしない。そんなことをするのは、よほどの自信家か、先の考えられない馬鹿だけだろう。

だから、恐らく生き残りの仲間がいるのだ、と言うと思っていたのだが、女は首を横に振った。息も絶え絶えといった様子で、言葉を続ける。

「6人いた、仲間たちは、全員、殺されました……私の、恋人も」

「……一体、なにがあったんだ？」

「ミノ、タウロスが、突然現れて……」

遺跡に現れるモンスターの中でも、最上位レベルのミノタウロスが、街にほど近いこの場所にいる。周囲への影響や脅威度だけで言えば確実に、封印されていたハルマツゾ以上だ。

その事実におれたちが驚くより前に、ドォン、という遠い音が、遺跡の更なる奥から響いてきた。……女の言葉は続く。

「殺されそうになった、わたしを、逃がそうと、偶然居合わせた、女性の探索者が……」

その言葉に、いやな予感が全身を駆け抜ける。

「ソイツ、名前は？」

「聞いてません。……でも、赤毛で、大剣使いの――」

それを聞き終わる前に、オレは猛然と走り出していた。修行って……一人でなにやってんだ、あの馬鹿娘！！

18. 光の剣

オレは、これまでにないスピードで、遺跡の中を駆け抜ける。

迷宮状になっているソレを、魔剣で壁を斬り抜き蹴り倒しながら直進。聞こえてくる遠い場所での轟音と気の流れを辿って、遺跡内で最高クラスの戦闘力を持つミノタウロスと、それに挑んでいるであろう一人の女剣士の元へ急ぐ。

時折聞こえる破壊音は、まだ遠い。オレが辿りつくまで、生きていてくれよ……！！

ミノタウロス。巨大な人の体と、牛のような頭部を持つ異形の怪物で、遭遇率は国内でも年に数例と極めて低いものの、その戦闘力は他のモンスターたちと比べて群を抜いている。

更に、その中にも個体差がある。

種族の中でも比較的多いのは、自ら岩などを削って作り出した石斧やハンマーなどを持って武装している通常タイプ。そして、ごく稀に存在するのが、全身の筋肉が異常に発達し、瞬発力と怪力とを持ち合わせている変異タイプ。巨大で、血のように赤い角が特徴で、十年に一度、報告されるかされないかのレア種だ。

通常ミノタウロスでも、人間と比べられないほどの怪力の持ち主だというのに、変異タイプのミノタウロスに至っては、武器などには頼らず、自身の素手で探索者を鋼鉄の鎧ごと切り裂く。過去に

は城門どころか城壁をも一撃で粉碎してみせた、なんて記録もある。まさに怪物だ。

正直、なんの準備もなしにこのタイプのミノタウロスと出会って生き残ることは、不可能に近い。探索者に登録する際の簡単な講習では、遭遇したらまず逃げることを考えろ、と教えるくらいだ。：ましてや、倒すなど。通常の間人なら、一撃を食らっただけで即死は免れない。

しかし、今回現れたのは、運悪く――。

ヴィーは、変異種タイプのミノタウロスの攻撃を、全力で回避し続けていた。それは、以前の彼女では難しかったであろう所業で、たった数日間とはいえ、これまでの修行の成果を伺わせた。

しかし、直撃はおろか、掠るだけでも内臓をはみ出させかねない攻撃を高速で繰り出し続ける相手に、ソレがいつまでも続くはずもない。そして、遂にかわしきれなくなり直撃を受けようとしたその瞬間。

突然、通路の壁を切り裂いてオレが現れ、彼女を横から突き飛ばして代わりにその直撃を受けると、無様に吹っ飛んでいった。

たとえば、ヴィーを突き飛ばさず、一撃でミノタウロスを仕留められたとしても、高速で迫る質量はそのまま止まらずに彼女を襲っただろう。魔剣を盾状に変化させようかとも思ったが、あまりに状況が逼迫していて、なにもできなかった。

その強烈な一撃を食らって、咄嗟に防御した両腕の骨は粉碎されてひしゃげ、そのままの勢いで壁に打ち付けられる。その衝撃で、背骨と肋骨は背後の岩壁ごとバラバラに破壊され、内臓が破裂したのだろうか、口や鼻からも血が溢れ出し、俯いた顔には赤く染まった髪が垂れ下がる。

周辺には、先ほどの女の仲間だろう死体が、バラバラになった状態で血溜まりの中に転がっているのが判るが、自分の血で、その視界も赤く染まっていつてしまう……。

「……ヴェルク!? ……コイツ、よくもッ」

オレが、まるで死んだように見えたのかもしれない。ヴィーは、その手にしている大剣を力の限り握り締めて、真っ直ぐにミノタウロスを睨み付ける。逃げろと叫びたいが、声が出ない。それも当然だった。恐らく、肺を潰されているのだ。オレも、このままだと持つて数分の命か。

ていうか、オレのほうからミノタウロスの攻撃に突っ込んでいったわけだし、それって逆恨みじゃねえかな。だからホラ、な? こうなっちゃう前にさっさと逃げろよ、ヴィー。コレ、結構痛いんだぜ……?

だが、残念ながらヴィーは、オレの願いどおりに逃げてはくれないだろう。コイツが、仲間を殺されて背中を見せるような場面を、オレは想像できない。だからせめて、フェンがここにやってくるまで凌いでくれ。ある程度、気を使いこなしているアイツなら或いは、この状況を打破できるかもしれん。……十中八九、そのころにはオレは死んでいるだろうが。

しかしヴィーは、オレの思い描いた最善の想像を、遥かに超えた行動をとり出した。

先ほどまでミノタウロスの攻撃を避け続けて上がっていた息を、体内の気を操作することで整え、加えて、己の中に潜在している魔力をも引き出す。それを気と共に練り上げてみせると、その身と手にした武器とに纏わせる。……一瞬、ヴィーが何をしているのか判らず、啞然としてしまう。

恐らく、ヴィーは無意識にやっているのだろうが、それはハルマツゾの知識にも無い技術だ。挙句には、そのハルマツゾがオレに対して使っていた気の放出のように、周囲の空気をピリピリと震わせ始める。

……ククク、どうだよハルマツゾ。オレたちの想像を簡単に超えるヤツが、目の前にいるぜ……？ 血塗れで鈍い思考の中、思わず笑ってしまう。

ミノタウロスも、その雰囲気の異常さに気付いたのか……荒い息を吐いてヴィーへと振り向き、両腕を地面に着いて前傾姿勢になる。そして、一瞬の静寂。

オレのすぐそばで、壁の欠片が地面に落ちて静寂を破った、その直後。ミノタウロスは溜め込んだ全ての力を開放し、途轍もないスピードで突進。足元を踏み壊しながら、異常発達した筋肉を震わせて進む。そして、既に血塗れになっている巨大な赤い角で、相手を刺し貫き四散させる……ハズだった。

「遅せえよ……ッー！」

しかし、そこに残っていたのは輝く残像。実体はそこにはなく、ヴィーはすでに天井スレスレに飛び上がっており、その気迫と共に、光を纏った大剣を上段から一気に振り下ろす。剣筋は遺跡の天井を挟り、ミノタウロスの異様に発達した筋肉の遥か上で空を斬る。

しかし、ヴィーの攻撃はそこでは終わらない。

斬撃の延長上に、気と魔力とを練り上げて作られた、光り輝く衝撃波が放たれたのだ。その強烈な光の衝撃波によって、一瞬、視界が白と黒、二色のモノトーンに変化する。

その視界の中で、かなりの速度を出していたミノタウロスはあっけなく左右にスライスされる。そればかりかヴィー渾身の斬撃は遺跡そのものを切り裂いており、切断部に残る光の雫が、遺跡の奥まで続いている。……それはもはや、魔剣の所業だ。

ヴィーのヤツ、己に秘められた力だけで、変哲も無い大剣を無理矢理に魔剣へと昇華させて見せやがった。……まったく、凄いヤツだよ、お前は。冥土の土産には、勿体無いくらいだぜ。

斬撃の衝撃波によって縦に真っ二つにされたミノタウロスは、その内部を中空に晒し、勢いの止まらぬまま壁に激突。バシヤバシヤと音を立ててその血肉を床にぶち撒けた。

一方のヴィーは、何事も無かったように遺跡の通路に着地。手にした大剣には、光の粒子がその魔力の残滓となって煌き、その軌跡を明るく照らしている。そして、オレの方を向き、その瞳に涙を溜めて駆け寄ってくる。

おいおい、泣くなよ。ほら、大事な大剣を、落と、し……た……ぞ

………？

「ヴェルク……ッ！！」

血で赤く染まり、段々と暗くなる視界の中で、オレの名を必死に叫ぶヴィー。その姿がなんだか可笑しくて、残された力で少しでも微笑んで見せると、そのままオレの意識は暗闇の中へと急降下していった。

19. 女剣士の休息

「最近、こんなパターンが多い気がする」

いつもの見慣れた景色を前にして、ついつい嫌気が差してそんな言葉を放つ。……多いうか、そもそもこんなパターンしか無いような気がするぞ。一体どうなってんだ？

「……起き抜けに、なあに言ってるだか、この男は」

隣から聞こえる舌足らずで高い声の主は、まあ、例に漏れず、我らが治療の女神アンナ様だ。しかしこれだけ、気絶して、女が傍にいる状態で目覚めるってパターンが続くのは、まさかハルマツゾの影響じゃないだろうな……？ まさかオレ、これからなにか起こるたびに気絶することになるのか……？

嫌な予感に戦慄していると、訝しげな表情のアンナが、オレの顔の前で小さな手をヒラヒラと振る。

「ヴェルク、なにボーッとしてるだ？ 半分死にかけだっただが、怪我はとっくに完治してるだよ」

うーん。アレは流石に死ぬかと思って格好つけてたが、そんな状況からでも呆気なく、完全な状態に復活させてみせられると、オレの立つ瀬が無いというか……。しかも、それをなんでもないことのように言うのだから、子供ながら格好良いぜ……。

ていうか、今回のオレ、ほとんど活躍してねえな。いや、別に良いんだけどさ。……フェンほどじゃないし。

「? どうしただ?」

「いや……また、お前に助けられたみたいだと思ってな。そう言え
ば、この間の礼も言っただけだ」

そう言うのと、アンナは首を振る。

「なに言ってるだ。そもそも、こないだ腕さ繫いだときだって、ヴェルクにはオラの呪いさ解いてもらったべ。今回だって、ヴィーさんを庇って怪我したんだもの。礼はいらねーだよ」

「そのヴィーも、他人を助けるために行動したワケだしな……。っ
てか、お前ってなんでオレを呼び捨てなんだ? いつからだっけ?」

ふと思い浮かんだ疑問。こないだの探索が初対面だったワケじゃないが、そこまで親しかったワケでもない。姫さんやヴィーはさん付けだしなあ。フェンとは昔からの付き合いだって言うし……。

ヴェルちゃん以外なら、大抵なんて呼ばれようと別にあまり気にはしないんだが、一体、なにがどうなったら、アンナの中でそういうコトになるんだ? オレ、あの中で一番年上だぞ? 自分で言うのもなんだが、下手したら父親でもおかしくない年齢だ。

「ありゃ? 言っただけだか?」

と、アンナが答えようとした瞬間。コンコンとドアをノックする音。

「よおアンナっちー。うちの甲斐性なしは起きたー?」

「おおミントっちー。甲斐性なしのヴェルクは、さっき起きたところだべー」

……ああ、はい。理解しました。すごく。

「ところで、ヴィーのヤツはどうした？」

「おやおやヴェルク。起きたばかりで、もうヴィーお姉ちゃんの心配？」

「いや……、まあな」

また変な方向に話がいきそうで咄嗟に否定したくなったが、素直に頷く。心配なのは本当なんだし。

ここにアンナだけがいるってことは、フェンのヤツは恐らく、助けた女に付き添ってゴード爺さんに探索の報告でもしてるのだろうと思うが……。ヴィーのヤツ、あれだけの気と魔力とを消耗して、果たして無事でいられたのだろうか？ 最後に見た記憶では、一見元氣そうだったけど……。

「ヴィーさん、あんの女の人の傍から動けなかったオラたちんトコまで、瀕死のヴェルクを運んでくれただよ。オラがヴェルクを治療したあとも、ここまで運んでくれて……」

そこまで言って、俯くアンナ。

「だけどヴィーさん、そこで力尽きて倒れただ……」

「……今、どこにいる？」

アンナの沈んだ表情と口調に、オレは緊張して顔が強張る。もし万が一、アンナの手に負えない状態になっていたとしても、ハルマツゾのく石>から得た知識を総動員すればどうにかなるかもしれない……などと考える。

しかし、そんなオレの様子を見ていたミントは、ぷぷぷ……と口元に手をやり、一言。

「今も、ヴェルクの隣にいたりして」

「……は？」

その言葉に、慌てて毛布を捲る。すると――。

「すう……、すう……」

気力と魔力を使い果たし、いつぞやと同じように、ゆったりとした呼吸で気持ち良さそうに眠るヴィーの姿。よく見ると、オレの服の袖部分を掴んだままだ。少し腕を動かしてみるが、まったく離そうとしない。それを見て、心配そうな口調でアンナが言う。

「意識は無いんだとも、ヴェルクの服を全然離してくれなくてなあ。仕方なく、そのまま一緒に寝てもらったんだべさ。きっとヴィーさん、よっぽど疲れていたんだべなあ……」

「うふふ、これぞ愛のなせる業よねー」

オレは、意見の違う二人の言葉に耳を傾けることもなく、ヴィーの顔にかかった前髪をそっと払って、毛布を掛けなおしてやる。名前も知らぬ他人を助けるために、見たら誰もが逃げ出すような怪物に挑んだ女剣士、か……。その安らかな寝顔に、思わず笑みが浮かぶ。

父親が娘にするように、自然とヴィーの頭を撫でていたこの時の

ことを、オレは度々からかわれる事になるワケだが。……まあ、そのくらいは仕方ないだろう。

「……おつかれさま、ヴィー」

20. 武術大会

「おぬしら、武術大会に出てみんか？」

ある日、遺跡での修行を終えてギルドに探索の報告をしにきたオレとフェンの二人に、ゴード爺さんから武術大会に出ないかとの誘いがあった。

フェイド王国武術大会というのが確か正式名称のそれは、王国中にある比較的大きな街で予選大会を行い、それぞれの優勝者を王都に招き国内最強の武術家を決定する大規模なものだ。武器の制限はないが、「武術」大会というだけあって、魔術の使用は禁止されている。

この大会、先の戦争以降は国力回復が最優先事項とされて開催を見送られていたのだが、つい先月になって開催が決定され、各地ではそろそろお祭り騒ぎの準備が始まっていた。

ただし、今回の大会は一般参加は受け付けておらず、各ギルドや、騎士団、貴族などの有力者といったものたちからの推薦を受けたものたちだけが出場できるという手筈になっている。どうやら、まだ国境沿いがキナ臭い中での開催ということもあり、今回の大会に不穏分子が紛れ込むのを防ぎたいという意図があるらしい。

ゴード爺さんの話によると、どうやら探検者ギルドから出場する代表の一人として、この街の予選大会に参加して欲しいとのことだった。

しかしオレは、その話を聞いた瞬間に答えを出していた。ゴード

爺さんに対して、肩を竦めて見せ、非常に面倒臭そうな顔をして答える。

「オレは遠慮しとくよ。面倒臭そうだし……」

大体、帝国が魔剣を奪いに来た件以来、目立つ行動を避けているというのに。アレ以来、あの行きつけの酒場にも行っていないな。べ、べつにマリアの一件が尾を引いているわけじゃないからな。多分。

一方、フェンもオレに追隨するように頷く。こちらはゴード爺さんに対して非常に申し訳なさそうな表情をして。

「そうですね。僕も、アンナと一緒にいなきゃいけませんし……」

ゴード爺さんは、オレたち二人を見比べて溜息をつく。

「仕方あるまい……。ヴェルクはともかく、街で人気者のフェンには是非出て欲しかったんじゃないか。うちの孫も、期待しておったし」

「爺さん、孫いんのかよ！　ってか、オレはともかくってどういう意味だ！？」

「ま、まあまあ、師匠。……しかし、ゴードさん。大変申し訳ありませんが、僕にはアンナを護衛する義務が――」

しかし、そこまで断りかけたところで、思わぬ声がフェンの言葉を遮る。

「なあにオラに遠慮すつことあったか。出れるもんには出たら良いべ」

今日は教会の活動の予定だったはずだったが、それが早めに終わったのか。いつも通り外出用のマスクとフードを被った姿で探索者ギルドのカウンター前にあらわれたアンナ。フェンが絶句している中、その言葉を続ける。

「出たくても出れない人だっているだ。出て欲しいっていうなら出るべきだべな」

「ア、アンナ……、しかし僕には貴女を守るといふ大事な仕事がある……」

なんだか、娘から「子離れしろ」と宣告された父親みたいに衝撃を受けているフェン。

「なに言ってるだ。街の人らを幸せにするのが、こちら教会の人間の仕事だべ」

「うぐっ……」

もったもな正論で反撃を封じられたフェン。もはや、大会に出たい出たくないじゃなく、出来るだけアンナの傍にいたいという信念とのせめぎ合いが始まっているらしい。今もアンナを守り続けるために辛い修行に耐えているフェンに、オレはひとつ思いつきを提案をすることにした。

「フェン、お前は大会に出てみろよ」

「師匠……?」

「そろそろお前も、自分がどんだけ強くなったか試してみても良い頃合だろ。遺跡のモンスター相手じゃなく、手練の人間相手に試してみるのも悪くないさ」

ただし、相手を殺さない程度にな……などと思いながら、オレが

師匠面してそんなことを言うと、アンナも大きく頷く。

「んだんだ。もし王国で一番強いってことになったら、もう修行なんかしねで、ずっとオラの傍にいてもらえるべ？」

果たして、どちらの言葉がフェンにとって一押しになったのか：
：答える必要は無いよな？ アンナに向かって感涙さえ浮かべる愛弟子の姿に、オレは肩を竦める。まあ、師弟なんてこんなもんだよな？

「ふむ。それじゃ、無事に決まったようじゃの。わざわざアンナに来てもらった甲斐があるというもんじゃわい」

……この狸爺、最初から仕組んでやがったか。

「へえー。フェンさん、武術大会に出るんだー？」

宿屋に戻って、探索者ギルドでの出来事を話すと、ミントは楽しそうに言う。やはり、

「ああ、探索者ギルドの代表としてな。まあ、修行の成果を見るには良いチャンスだろ」

「……ぐうたらのヴェルクが、ギルド代表になっちゃうような人の先生かあ。なんか変なの」

「ガハハ、たしかにな」

「お前ら……って、なんか食堂から良い匂いするけど」

いつもどおりのやり取りの中で、ふと食堂のほうから漂ってくる

匂いに気付く。どうにも食欲をそそるソレは、まさに今調理中のものだろう。この宿の食事は普段、父娘が分担して用意しているが、その二人がカウンターにこうやって座っているということは、一体誰が調理してるんだ？

そう思ったところで、その父娘のニヤニヤした表情に気付く。

「……もう、言わなくて良い」

そのまま、ニヤニヤ微笑み続ける二人に見送られて食堂に入る。まだ、食事は準備中だというのに、宿屋の泊り客たちが席について、チラチラと調理中の厨房のほうへ視線をやっている。それに対して、なんだか少しだけイラッとするのは気のせいだろうか？

ちなみにこの食堂、たった二人で経営している小さな宿屋のものだということもあって、厨房からも食堂全体が見渡せるようになっている。そんな訳だから、厨房でせっせと調理に励む人間の姿も、食堂から丸見えだ。

そしてそこには勿論、赤毛の女剣士の姿。

「姫さんが、里帰り？」

オレを含む宿泊客らに思わぬ美味が振舞われた夕食の後。人のいなくなった食堂で、オレはヴィーから姫さんについての意外な近況を聞くことになった。行方不明の兄貴以外に家族のいないらしい姫さんが、里帰りって……。一体、どこに帰るんだ？

「ああ、執事のラスティジャーさんを引き連れてな」

「しかし、それはまた急だな。大体、姫さんの故郷ってどこだよ」

「ヴェルク……。マジでそんなことも知らねーのか？ 王都だよ、王都」

呆れた様子のヴィーは、続けて言う。

「シルヴィんとこのステイナーゼ家は、古くは王家に連なる血筋の、超有力貴族なんだよ」

……。へえ。

「それは知らなかったな。オレはほとんど、探索者としての姫さんしか知らんしなあ」

「……それは、いくらなんでも反応が薄いぞ、ヴェルク。巷ではむしろ何故シルヴィが探索者やってるのかって方が疑問に思われてるんだぞ？」

「いや、それはオレも思うが……」

探索者なんかより、黒幕とかのほうが似合ってそうだしな。

「そんでまあ、暇になったから、アタシはヴェルクのところに……」
「ん？」

オレンとくに、なんだって？ オレの不思議そうな視線に気付いたヴィーが、突然わたたと両手を振る。どうしたんだ、そんなに慌てて。

「じゃなくてっ！！ そう、ミント。ミントのところに遊びに来たんだ！！」
そして、アタシが暇だってことを話したら、また料理を作

って欲しい、なんて言われたから……」

「……なるほどなあ」

ミントのヤツはヴィーに大分懐いているからなあ。いつのまにかアンナとも友達になっていたみたいだし、修行前にオレを迎えに来るフェンとも、結構よく話しているようだ。意外に大物かもな、アイツ。将来、姫さんみたいになったりして……なんてな。

「そ、そういえばさ……ヴェルク？」

「うん？」

オレが一瞬、恐ろしい想像をしていると、なにやらヴィーが俯く。……どうした、ヴィー？

「ア、アタシさ、無事に、修行が終わったんだよな」

「ああ、そりゃあんだだけの力を使いこなせるようになったんだから、とりあえず十分だろ」

あの日、ミノタウロスの変異種を屠ったコイツの技、どうやら、いくらかの修練を経て完全に使いこなせるようになったようだ。あれはヴィーの気と魔力を練り上げる大技で、オレや今のフェンのように気を知覚してすらいなかったハズのコイツは、それを一足飛びに習得してみせた。ただし、気・魔力の消耗量が激しく、多用できる技では無いみたいだ。

絶対的な魔力量の少ないオレに、あの技を使うことはできない。今のヴィーと勝負して、そう簡単に負けることは無いとは思うが、一撃の威力はオレのそれより遥かに高いだろう。……まあそもそも、まずコイツと勝負しなきゃならん状況が想像できないけれど。一方的に殴られる想像なら容易なんだが。

そういえば、そもそもあの技は魔術の範疇に入るのだろうか。コイツが武術大会に出たら、どうなるんだろう。……うん、武術大会のでかい会場が、あの技で真っ二つにされる映像が頭に浮かぶな。

……と、ヴィーが顔を上げるとなんだか赤い。そして、やけに弱い口調で呟く。

「や、約束を……」

「ああ、アレか」

ヴィーのヤツ、全然掴まらないから完全に忘れてるかと思ったが、きちんと覚えていたみたいだな。さて、どうするかなあ……。

「そうだなあ。今はフェンの修行もあるからちよつと忙しいけど、武術大会が終わったら恐らく暇になるだろうし、その時にしようぜ」
「ほ、本当か!？」

赤い顔のまま立ち上がり、身を乗り出してくるヴィーの勢いについて押しされて、オレは仰け反る形になる。なんかヴィーのやつ、すっげえ嬉しそうだな。

……そんなに特製ベリーパイが食いたかったのか？

21. 美女、再び

目立つこと、面倒くさいことを嫌い大会への不参加を決めたはずのオレだったが、予選大会当日の試合開始直前……なぜか観客席ではなく、大会参加者の控え室にいた。

「どうしてこうなったんだ……」

オレは、頭を抱えて呟く。

時は遡り、予選大会当日の朝。

その日は一日、会場の客席で酒でもあおりながらフェンの成長した姿を楽しませて貰おうと、オレは珍しく早起きをして、出発の準備をしていた。……ハズだったが、どうせ試合開始は昼ごろだからと誘惑に負けて前の晩から飲み明かしてしまい、ベッドの上で毛布にくるまったままウトウトとしていた。そこへ、部屋のドアがノックされる音。

「ヴェルクー、お客さんだよー」

どうぞ、の一言も言わせないまま、この宿屋の主と言っても良い存在である少女が、オレの部屋へ勝手に入ってくると、慣れた様子でカーテンと窓を開け、日の光と外の空気を室内に取り込む。そして、

「じゃ、これは洗濯するから」

と言われた瞬間に、オレはくるまっていた毛布を剥ぎ取られていた。その勢いで、ベッド脇に落ちる。イタタ……。寝ていたとはいえ、ミントの「機」が全く読めなかったんだが、こういうことだ？

「ほら、人を待たせない」

「これが客に対する仕打ちかよ……」

オレが床から起き上がり、打ち付けた頭を抑えてブツブツと文句を言っていると、ミントは続けて言う。

「下で美人のお姉さんが待ってるわよ」

……なぬ？

「つて、お前かよ……」

「あら……。あの夜以来の再会だというのにご挨拶ね」

急いで準備しエントランスに下りると、そこには……。いつぞやオレを騙してくれた魔剣調査官殿の姿。たしかに美人には違いないが、朝から見るにはヘビーな顔だぜ……。

絶世の美女と一夜を共にした挙句、危機と一緒に乗り越えたという輝かしい想い出は、実は自分の持ち物欲しさに近づいてきた悪女の策略だったという、ドロドロとした悪夢の記憶に変わった。

女に騙されたことが無いワケじゃないが、アレは流石にトラウマものだったぞ。出会って即、問答無用で薬を使われるとか……。オ

レに対して、人としての感情が感じられなさ過ぎる。まさかコイツ、ティアの親戚じゃなからうな？

「猫なで声でなに言ってやがる。人に葉まで盛りやがって」

しかしその女……マリアは、オレが事の真相を知っていることに對して驚く様子も無く、軽く肩をすくめてみせた。

「そう、知っているのよね。まったく忌々しいこと……」
「……？」

どうやらマリアの話によると、王の元に届いた彼女の報告書に、シルヴィア・ステイナーゼ直筆の署名付きで「拝読いたしました。しかし、ヴェルク氏は信用に足る人物ですのでご心配なく……」と添え書きがされていたらしい。

機密文書を盗まれるという失態をやらかしておきながら、何故か責任こそ問われなかったマリアだったが、行ってきた調査自体を無駄足にされてしまい、魔剣調査官としてのプライドをいたく傷つけられたようだ。

……すげえな姫さん、オレなんかとは格が違う。騙されていたオレとしては、心からの喝采を送ってやりたいところだ。ていうか、国王に対してそんなことしても平気なのかね？

「それで、今日は何しにここに來たんだ？」

一通りの話を聞いたオレが、抱いた疑問を目の前の美女に投げかける。姫さんの報復的行為によって、オレの中の恨み辛みも大分薄れていた。そもそも、王国を裏切るつもりなんて毛頭無いしな。

すると、そのマリアは懷から一枚の手紙を取り出しヒラヒラ。それを見て、あの時の執事……ラスティ爺さんを思い出す。

「なんだ？　また報告書でも読ませてくれるのか？」

「あのね、そんなワケないでしょう？」

はぁ、とため息をつくマリア。そんな姿も絵になるのだから、嫌になる。こんな女が仕事の為にオレみたいな男を華麗に騙してみせるのだから、世の中信用ならねえなあ……。

マリアは、そんなことを考えるオレにお構い無しに続ける。

「これは国王直筆の指令書よ。悪いけど貴方には、今回の武術大会で優勝して貰うわ」

そして時間は戻る。

「どうしてこうなったんだ……」

マリアに大会優勝を依頼（というか強制）されたときはなんの冗談かと思ったが、その後、実際会場へ来てみると、通されたのは観客席ではなく大会参加者の控え室。オレは、その隅にある丸椅子に座り込んで頭を抱えていた。

正直、目立つのは好きじゃないし、ギルド内でも地味な盾剣使いに徹して防御的な役割のみを担ってきた。そんなオレが、こんなところで本気を出して戦った場合、どう考えてもカドが立つ気がする。

頭に思い浮かぶのは、一部の嫌味な探索者ども。姫さんも嫌味を言ったりはするが、ヤツらのソレには品性の欠片もなく、嫌がらせを受けて探索者をやめたり、他の街へ移っていった者だっていたという話だ。そんなヤツらが何故、ギルド内でのうのうとしていられるかと言えば、ギルド内でも大きな派閥に属していて大きな後ろ盾があるからだった。

いざこざに巻き込まれるのが嫌で、ギルド内のどの派閥にも付かずののらりくらりしていたというのに……どうしよう、嫌がらせが頭にきて、そいつらをボコボコにしちゃったら。ギルドにいられなくなるんじゃないだろうか？

フェンの修行だって、出来るだけ目立たないように、討伐したモンスター数を過少報告していたというのに。全てが水の泡だ。

……と、そんなわけでオレは、ここに来るまでに予選大会の祭り騒ぎに合わせて開店した土産屋で、貧相な仮面を買って被っていた。周囲にはイロモノ的な格好をして、ウケを狙おうとしているようなヤツらもいるため、それほど目立ってはいない。

しかし、「気」が読める人間には、そんなものは通用しない。

「……あれ？　もしかして、師匠ですか？」

ギクツ、と体を強張らせるオレ。その声の持ち主と台詞の内容に、周囲がざわめくのが分かる。おい、やめろ。そんなに嬉しそうな顔をして、こっちに来るんじゃない。

「ああ、やっぱり。師匠も、この大会に出場することに決めたんで

すね!」

「……なに言ってるんですかフェンさん、オレは貴方の師匠なんかじゃありませんよ? どなたかと勘違いされているのでは?」

顔を背けてそんなことを言い、暗に「オレとは関係ないフリをしろ」と伝えたつもりだが、フェンはにっこり笑って応える。

「やだなあ、師匠こそ何言ってるんですか。僕は探索者ヴェルク以外に師事したことなんてありませんよ。……あ、分かりました。この大会が終わるまで、僕たちが師匠と弟子の関係じゃないと思えてことですね?」

フェンは、表情を引き締めて深くお辞儀する。その行為に一切の邪気は無い。

「師匠の胸を借りるつもりで頑張ります!」

……天然かよ、この野郎!!

22. 血の祭

フェイド王国武術大会予選トーナメント、一回戦。

会場である街の闘技場の真ん中でオレに対峙するのは、体中に大量の傷跡を残す2メートルを超える大男。端から見たら、どう考えてもオレに勝ち目は無いだろう。

しかし、よりもよってコイツとはね……。

この初戦の相手は、先ほど思い浮かべていた探索者ギルド内の派閥のトップの一人、斧使いのギーグだ。それぞれの開催地において、各ギルド2名の参加枠が与えられているらしいから、こいつはオレの代わりに推薦されたことになるんだろうな……。

本来、同じギルドから推薦された同業者同士は、初戦で当たらないよう配慮されるはずだが、オレは探索者ギルドからの推薦枠からの出場というワケではない。……まあ、言うならば国王推薦ってことか。まったく、会ったことも無いというのに、迷惑なことだ。

「貴様、ヴェルクとか言ったか。この街の探索者らしいが……あのいけ好かねえ双剣使いの師匠だったのは、本当か？」

「ああ、まあね。つっても、フェンのヤツが弟子になってから、まだひと月も経たないが……」

控え室でのフェンの言動のお陰で、もう隠す意味がなくなってしまったので仕方なく頷く。被っていたお面も、ここに来るまでに外してきた。……無駄な出費だったな。

さて、どうやらギーグの口振りから察するに、フェンはともかくオレのことはよく知らないらしい。それも当然か。オレはコイツと話したことも、パーティを組んだことも無いのだった。

……というよりも、大抵派閥に属している人間というのは、同じ派閥内でしかパーティを組まない。そうすることで、探索で得られる利益を他所に回さないようにしているのだ。

特に、コイツ等の間では、探索によって得られた遺物など、利益の一部を派閥の上位者に譲ることで上納金代わりにしているという話だった。

それによって、派閥上位者は探索実績を積んでギルド内の地位を上げ、納めた側は派閥内の有力な探索者とのパーティを組めるようになるなど、派閥からの恩恵を受けられるようになるのだ。上手いこと考えたもんだと思わなくもないが、オレ個人としてはそういう面倒なのは御免だ。

利益を収めなかった者には、陰湿な嫌がらせや脅迫をしているという噂もある。……噂といっても、その出所が姫さんな以上、ほとんど真実なんだろうけどな。

そういえば、特に有力な探索者の派遣には、派閥メンバーであってもかなりの金額を積む必要があるらしく……たしか、この男もそんな有力探索者の一人だったはずだ。あまり人付き合いをせず世情に疎いオレが、名前を知っているくらいだからなあ。

「おい貴様、ここはオレに勝ちを譲らねえか？ ギルドでも優遇するし、金ならいくらでも用意できるぞ？ なんだったら、とびっきりの女を用意したって良い」

しかし、そんな男にもフェンの実力は耳に届いているらしい。その師匠だというオレに対して買収を始めるギーグ。ある意味、潔いというか、諦めが早いというか……。

たしかにフェンほど、腕前、資質、容姿の揃った探索者なんてそうそう……ってあれ？ ヴィー、姫さん、そしてフェン……オレの周りには結構いるな。たしかアンナも、マスクを外せば可愛い女の子らしいと言うし。むしろ、逆の意味でオレだけ浮いてねえか？

と、とにかく、ギーグは手段を選ばぬほどにこの大会で確実に勝ち残り、更なる名声を手に入れたってことなのだろう。うん、なんか、それだけ必死だと、むしろ持たざる者としての親近感が沸いてくるな。

ちなみに、オレたちの会話は、周囲の声援に遮られて他の者には聞こえない。

「まあ、悪くない提案だが……」

オレは視線を巡らせて、ある人物の「気」を探る。特徴的な気の持ち主であるそいつはすぐに見つかる。その赤毛の女は、隣に座るアンナと共に、オレに声援を送ってくれているようだった。

……ていうか、たしか試合の流れによっては凄惨な場面になる可能性もあるから、15歳未満は観戦禁止のはずだが、アンナはどうやって入ってきたんだ？ まさか、無茶してねえだろうな。

「ま、今回ばかりは、そうもいかないみたいだね」

「そうか、それじゃあ……仕方ねえなッ!!」

目の前で余所見をし、提案を蹴ったオレに対し、ギーグは両手に持った手斧を同時に投げつけ、背中の大斧に持ち替え突進。投げられた二つの斧は、オレの後方をぐるりと回って背中に迫り、前方からはギーグの巨軀が迫ってくる。……意外と器用だな。

「死ねえええええいッ！！！」

相手を殺したら、反則負けだけどな。コイツ、ルール解ってるんだろーか？

そんなことを思いながら、オレは己に迫る大小三つの斧のうち、背中に向かって飛んできた小さな二つの手斧を、後手にひょいと掴む。そして、ギーグの巨体ごと突っ込んでくる残りの大振りな一本をかわして相手の背中に回り、その男が突進の勢いを止め振り返ろうとしたところで……両の踵を縦に切り裂くように手斧を投げつける。

ガガッ、と無機質な音を立てて、二本の手斧の切っ先が闘技場の地面に突き刺さる。

「ギヤアアア——ッ！！？」

両足を地面に縫い付けられた大男が、巨軀を震わせて絶叫する。いちいちうるせえヤツだな、などと思いながら、オレはそれを無視してギーグの進んでいた方向へつかつかと歩く。そして、そこで彼の落とした最後の斧を拾い上げて片手にぶら下げるように持ち、そのまま振り返る。それを見て、痛みに震えていたギーグは、目を見開いた。

ある理由から、オレはこの大会で優勝しなきゃならないが、かといって普通に勝ってしまつては、コイツらとの間に遺恨が残るだろう。穏やかにいきそうにない相手となれば、いくらか脅しておかないとな。中途半端が一番いけない。

「ぐぐ……や、やめてくれ、金、金なら、いくらでも払う!! オレが悪かった!!」

「? 何故、謝る必要があるんだ?」

「な、何故って、オレが、アンタに不意打ちを……。殺さないでくれッ!!」

どうやら本当に、ルールを理解してなかったらしいな。開会式で、何聞いてたんだコイツは。当たったのがオレやフェンみたいな人間じゃなかったら本当に死んでたぞ。

「不意打ちなんて卑怯のうちに入らねえよ。まあ、金をくれるってんなら貰っておこうか」

オレはそう笑って、手にしていた斧をギーグの方へ無造作に放り投げる。それは回転しながら綺麗な弧を描いて、ギーグの頭部を舐めるようにしてその背後へ落ちる。頭髮の一部を失い、逆モヒカンとなった大男は、痛みからか、それとも恐怖からか……白目を剥いてその場に気絶した挙句、失禁してしまう。

闘技場の地面に広がる、血と尿。大の男が失神して見せたその姿に、ここまで声援を送りながら試合を見ていた観客が、シーンと静まり返る。……あれ? もしかして、やり過ぎた?

と、その中で一際響く一人の声。

「良いぞ、ヴェルク!!」

それが誰の声かは言うまでもない。正直、ことの本人であるオレが言えたもんじゃないが、ちよつとは周りの空気を読めよな、ヴィー。……と思った次の瞬間、ヴィーのその勢いにつられるようにして、周囲の人々の大きな歓声が、闘技場を覆った。おいおい、マジかよ。

それを聞いて、満足そうに頷くヴィー。……まるで自分が勝ったみたいな顔してやがる。

……結局その後、オレは何の障害にぶち当たることもなく、予選決勝まで駒を進めた。

23. 隠し子

「初めまして。探索者ヴェルク」

「これはご丁寧に、どーも」

フェイド王国武術大会予選トーナメント、決勝。そこでオレと相対しているのは、ここしばらく徹底的に鍛え上げた愛弟子のフェンではなく、白い鎧に身を包んだ色男。

この男、トーナメントを圧倒的な実力で勝ち進み、その甘い容貌と相まって、闘技場には女共の黄色い声援が飛び交っていた。準決勝で探索者ギルド随一の美男子であるフェンと当たったときの女共の悲鳴ときたら……。

今現在、オレの応援をしている大部分が男、対戦相手の応援をしている大部分が女と、非常にわかりやすい構図になっている。ただし、一名だけ確実にオレの応援をしている女がいる。

「負けんな、ヴェルク！！ フェンの仇をとってやれ！！」

はあ……、アイツめ。人の弟子を勝手に殺すなよ。大体、そんなヤワに鍛えたつもりはないぞ。……まあ、かなりの大怪我を負ったことは確かで、その治療のためにフェンのそばについているアンナの姿は、この場には無い。

そもそも、アンナの観客席への入場が許されたのは、いざというときに回復術を使って参加者を治療するという条件と引き換えだったらしい。高位の回復術師を雇うのは、確かにかなりの金がいるからなあ。アンナなら、身元も確かだし。

ちなみにギーグのヤツも、気絶したままアンナに治療されていた。オレだって、あの場面でアンナの姿を目にしていなければ、あそこまで無茶なことはしていない。……多分。

「私達の目的についてはご存知ですか？」

「一応な。アイツに、そんな大役は務まらんと思うんだが」

オレがそう言うと、白い鎧の男はにこやかに笑う。普段、同じく敬語を使うフェンとは違い、まさに慇懃無礼といった感じで……少し癪に障る。

「それを決めるのは貴方ではありませんよ、探索者ヴェルク。……さて、そろそろ始めましょうか。会場の淑女たちを待たせるのは忍びない」

「別に、待っちゃいねえと思うが」

お前の負ける姿はね、なんてことは言わないでおく。コイツとフェンとの戦いを見ていた限り、そんな簡単に勝てる相手ではないだろうしな。

……なあ？ 元聖貴士の魔剣使い、ジュールさんよ。

『13人の聖貴士たちが、陛下の元から離反したのよ』

『……はい？』

あの宿屋での、その後のマリアとのやり取りは、衝撃的な内容だった。……衝撃的過ぎて、理解できねえ。

『聖貴士って、あの、お前の報告書に載ってた、魔剣封じだか魔剣殺しだかの？』

『そうよ』

『いや、ていうか、貴士って、騎士みたいに忠誠とか誓わないのか？』

『もちろん誓うわ』

オレの問いに、マリアはあっさり頷いていく。

『でも、彼らは貴族なのよ。血筋さえ違えることさえなければ、決議によって国王を決めることのできる立場にあるの。歴史ある貴族たちで構成される貴士と、有力貴族たちの同意があれば、陛下を失脚させることだってできるわ』

『国王を、自分たちの手で……』

『ま、あまり知られていないけどね』

なんだか、貴士ってのは随分と力を持ってるんだな、など考える。しかし、よくよく考えてみれば、こんなことはこれまでに聞いたことがない。王家と貴族の対立など。……そうだ。

『しかし、＜石＞はどうなる？ 王家の＜石＞は、今の国王が受け継いでるんだろ？』

そう。王であるための資格の代表的なものに、王家に引き継がれている＜石＞の後継者であることが挙げられる。前王の遺言とも言えるそれを受け継いでいるものこそ、王に相応しい……ということになるはずだ。

『そういうことになっているわね。……だけれども、陛下が＜石＞

を受け継いでいないとしたら？」

『……どういふことだ？ 話に聞く現国王の実力は、並の人間のそれじゃないぞ』

オレの疑問に、マリアは肩をすくめて答える。

『彼ら王家の血筋を引く者には、元々＜石＞なんて必要ないのよ。生来、能力と資質に優れていて、＜石＞があろうがなかろうが、たちまちソレと同じものを得てしまう。彼らにとっては、そこらの魔剣すら脅威では無いの。貴方の魔剣、ハルマーでさえもね』

魔剣の名前を誰かに言った覚えもないが、こっちの動向は今でもチェックしてるっていうことか。しかし、そもそもどうしてそんな話をオレにするんだ？ 疑問は尽きないが……。

『今の国王が＜石＞を持ってないってのは、どういうことだ？ まさか、前王が他に誰かを指名したってのか？』

可能性としては、ありえないわけじゃない。そう。姫さんこの親父さんみたいに……。

『その通りよ。前王が＜石＞を託したのは、隠し子である女の子。聖貴士団の面々は、その意志を尊重すべきと考えているのよ』

前王の隠し子？ 女の子？ ……なんだか、嫌な予感がするな。そんなオレの気持ちを知ってか知らずか、マリアはそのまま続ける。

『ただ、彼女は当時、王位継承の争いに巻き込まれることを避けるために、信用できる騎士とともに、それまで暮らしていた王都を抜け出し、各地を流浪していたの』

マリアは、これまでに無く力強い瞳と口調で、言う。心なしか楽しそうに見えるのは、オレの癖みか……？

今、オレの脳裏には、アイツと出会ったばかりの頃の様子が思い出されている。ま、女の子っつー感じじゃ、なかったけどな……。

『本名、ヴィクトリア・フェイド。……ここから先は、言わなくても分かるでしょう？』

そしてフェイド王国の王女様は、やがてある街の探索者となり、今はヴィーと呼ばれている、か。

オレは、アイツが最近見せた「力」を思い出す。王家の血、か……。アイツ、本物のお姫様だったのかよ。姫さんは、知らなかったのか？ オレには考えられないが……って、待てよ？ じゃあ、アイツが今も尊敬し続けている、死んだ親父さんというのは……。

『その騎士からく石>を受け継いだ今でも、彼女は本当のことは知らないままよ。一方、彼女よりも先に真実と現状とを知った聖貴士団はというと……』

マリアは、オレのことを指差す。

『彼らはまず、彼女の後見人であり魔剣使いでもある、貴方の実力を量ろうとしているらしいわ。とても、原始的なやり方だね』

オレは、先日コイツと一緒にいた夜に行った、魔剣を使った初の戦闘を思い出す。あの時は、姫さんのフォローもあって街に被害が出ることはなかったが……。しかし、魔剣使い同士の戦いに周囲を

巻き込まないようにするというのは、非常に難しそうだ……。

なるほど、相手も愛国者であるならば、恐らくこちらと同じことを考えるだろう。そうになると、戦いの場は――。

『どうする？ 聖貴士団の思惑通り、あの子に真実を告げる？ それとも、彼女の想い出を守るために、戦うのかしら？』

そう言っ、やはり楽しそうに微笑むマリア。……この悪女め。地獄に落ちやがれ。

そして、オレとジュールは同時に一步を踏み出した。ジュールは豪華な装飾の腰の鞘から、オレは右手の先の空間から。その手に、それぞれの魔剣を携えて。その光景に、またしても周囲の声援が一瞬、止まる。そして響くのは、やっぱりアイツの声。

「頑張れ、ヴェルク!!」

……分かってるよ、お姫様。

24. 聖貴士の思惑

闘技場には、どよめきと歓声が混在していた。

一方は、オレの手にしている如何にもな魔剣に対して。そしてもう一方は、そんな魔剣使いを相手にして一步も引かず、むしろ優勢に戦いを進める美剣士に対して。……ジュールのソレだって、一見分からないだろうが魔剣なんだけどな。

上段、下段、多数のフェイントを入れて、再度下段。

オレの繰り出す斬撃は、ジュールの振るう細身の剣によってことごとく撃ち落されてしまう。かつて鋼鉄の剣を相手ごと断ち切った魔剣ハルマーも、同じ魔剣相手ではそうもいかないらしい。

一度、バックステップで間合いをとる。相手も足を止め、お互いが試合開始時に戻ったかのような位置に。オレはそこで、ようやくため息をひとつ。

「……ふう。さすが、元聖貴士といったところか？」

しかし、オレの言葉にジュールは「いいえ」と首を振る。

「元、ではありませんよ。貴士とは、貴族でありながら最前線で戦う騎士であり、この国の王家に忠誠を誓う者たちです」

そう言って、ジュールは笑う。本当に、心底楽しそうに。

「つまり現在の私たちは、正当なる後継者であられるヴィクトリア

様の聖貴士なのです」

機。

次の瞬間、ジュールの姿はそれまでいた場所から掻き消え、その魔剣の切っ先が、オレの喉元に迫っていた。それを、首を掠めながらギリギリで躲し、さらにバックステップ。しかし、飛びのいた先には、またしてもジュールの姿。横から斬りつけられ、それを魔剣ハルマーで受け止める。

手が痺れる。魔力の塊であるハルマーによって衝撃は軽減されるはずだが、その剣圧は、ハルマツゾのそれと比べても遜色ないものだ。

「速えな、オイ……ッ！」

「ありがとうございます。それだけが取り柄なものでして」

にこやかに笑うジュール。嫌味なほど爽やかなやつだ。

コイツが持つ魔剣の能力は、恐らく「加速」だ。非常に単純かつ強力な能力だが、それを千年分を超える知識と技を蓄えたく石を得ている達人が扱うと……たとえばオレが魔剣を持っていようが、数千年分の知識と技を得ていようが関係ない。……フェンも、コレにやられたのだ。

オレは意識して、魔剣ハルマーを二本の剣へと変化させる。ジュールはというと、それを見て微笑んでいる。まさに余裕の笑顔だな……。

「果たして、それで私のスピードについてこれるでしょうかね？」
機。

先ほどよりも高速の斬撃が、オレを襲う。オレは両手に持つ二本の魔剣を駆使してそれをどうにか凌ぐが、それでもまだ足りない。その剣戟の最中、双剣となった魔剣ハルマーの、さらに柄の先にも、それぞれ刃を作り出し、計4つとなった刃で相手の攻撃を迎え撃つ。

しかし、ジュールはそれを見て楽しそうに笑う。

「ははは、まるで奇術師ですね」

魔剣の加速能力によって、超高速・超高压で繰り出される達人レベルのソレは、オレの神経をも削り取っていく……。このまま戦っていたのでは、勝ち目はない。

「……ッ」

ジュールの斬撃が体に触れる直前、相手の剣と己の体との間に魔剣ハルマーを無理矢理ねじ込む形で防御。しかし、相手の加速という能力によって威力が上乘せされた斬撃は、受け止めた魔剣ハルマーごと、オレの体を後方へとふっ飛ばす。

そのまま、衝撃の勢い余って地面を転がる。

「……凄いですね。ここまで私の剣を凌いで見せたのは、貴方が初めてですよ」

余裕の表情でそう言うジュールに、オレは息を荒げ、地面から立

ち上がりながら応える。

「ハア、ハア……。それは、こっちの台詞だ……」

どんなに正確に「機」を読んでも、その実際の攻撃との時間差があまりに少なく、対応がどうしても遅れてしまう。逆に相手も＜石＞の知識なのか、こちらの「機」を読んでいるようで、それを捉えると加速された剣捌きでオレの攻撃をあっさり封じてしまう。

こちらにも、魔剣を双剣に変化させたり、ハルマツゾの知識から「気」を使って身体能力を上げたりしているのだが、それでもまだ追いつけない。こちらがあの手この手を使って追いつこうとするにつれて、向こうも加速能力の出力を上げているようだった。……一体、どこまで加速できるんだ？

「どうにも、うまくねえなあ……」

「この状況を前にして、それだけ冷静でいられるのもまた、凄いものですね」

相手の魔剣は、魔力を周囲へ放出するタイプのものでは無い。そのため、魔剣ハルマー最大の特徴である「魔力吸収」も意味を成していない。拳句、ジュールは攻撃や回避で加速するその瞬間にだけ魔剣の能力を発動させているらしく、魔力消費による疲弊の色も見られない。

……いや、そもそも姫さんのような魔力容量の多い人間が多い貴族という人種にとっては、魔剣の行使など対したことではないのかもしれないが。

能力が意味を成さず、スタミナ切れも望めない。……くそっ、マ

リアの報告書にあった「魔剣封じ」だかつていうのは、こういうことか。たしかに、いくら強力な攻撃ができようが、これでは意味が無いな。

それこそ、現国王の持つ光の魔剣ヴィジターのように、文字通り光速の攻撃を放てるのであれば、また話が変わってくるのだろうか……。

オレは、ちらりと観客席のヴィーへと視線を向ける。声は聞こえないが、どうやら応援に熱が入りすぎて、大分ヒートアップしてるようだ。あ、ぶつかった大男をぶん殴った。おいおい。

「あいつが、女王にねえ……？」

オレの言葉に、ジュールも一度そちらを見て苦笑いし……意外な言葉を口にする。

「前王の意思ですしね……それに、あの方が国を治める必要はありませんよ」

「……どういう意味だ？」

ジュールは、オレに視線を戻してニヤリと笑う。それは、それまでの爽やかさとは一線を画した、壮絶な笑み。

その口から語られる内容は、思いもしないものだった。

「あの方には、王に相応しい貴族の誰かと婚姻を結んで頂ければ、あとは何もしなくて構いません。……そうですね。我々貴士なんて、お相手には丁度良いのかもしれないね」

そう言つて、くつくつと、心から楽しそうに笑うジュール。

しかし、それを見ても、思考が止まってしまっているせいかな憎らしいとも感じない。……ちよつと待てよ。なに、言つてやがるんだ？

「あの方の仕事といえば、その人物との間に跡継ぎを作ること……ぐらいでしょうか」

……………。

オレは、魔剣ハルマーを空中で分解。霧消させる。そして体内へと意識を集中する。無数に分離した魔剣ハルマーが、体内で骨や筋繊維に纏わりつく。それぞれが、身体能力を補助し、限界を超えた力から肉体を守る働きをするように。

「おや？ どうしまし——」

次の瞬間、オレは己の「気」を密かに消し、体内の魔剣の形状を操作することで肉体の動きを加速、ジュールの脇を高速で駆け抜ける。ハルマーを変化させた、手の平に収まるような極薄刃のナイフによって、ジュールの腕はその魔剣ごと宙を舞う。

ジュールと、観客席の女共の口からは声にならない絶叫が漏れる。おいおい、腕の一本や二本で、オーバーなヤツらだな。オレは、くるくと回転しながら落ちてきた魔剣を空中で掴む。背後では、ジュールの鎧に包まれた腕が、ぐしゃりと落ちる音。会場が、またしてもシーンと静まり返る。

「それじゃあ結局、お前ら全員を殺すしかないワケだ」

限界を超えた動きに対して、己の体が訴える痛み。オレは、それに耐えて笑ってみせる。目を見開いて、あまりに意外そうな顔を見せるジュール。

「油断大敵ってヤツだな。……元、聖貴士さんよ」

……まずは、一人目だ。

25. 悪夢、再び

ヴィーに、実の父親だと思っていた人間が血の繋がりの無い他人だったと伝えるだけでなく、担ぎ上げるだけ担ぎ上げておいて、自分との間に王家の血を引く子供を産め、だと。

まったく、ふざけたことをぬかしやがる……。

オレは、怒りに任せてジュールを殺そうと一步を踏み出す。コイツは、コイツらは、殺しておかなくてはならない。……今、ここで。

歩きながら、右手に持ったナイフを振りかぶる。

「ヴェルクー!!」

……………ッ。

ヴィーの声を聞いて、オレが動きを止めたその瞬間、横合いから酷く強い殺気を感じた。目でそれを確認するより早く、咄嗟に振り上げた右腕を出して防御する。体内に巡らされた魔剣ハルマーによって、その鋭い刃は腕の骨部分で防げたが、衝撃で数歩分後ずさる。

ジュールのそれより幾分軽いが、スピードは上だな。

「ジュール様に、それ以上手を出すな……ッ!!」

女の声だった。見ると、そこに立つのは全身を白い鎧で固めた女

騎士。……いや、女貴士か。手には、今オレが左手に握っているジュールの魔剣と同じ意匠の、少し小振りな剣。

おいおい。さっきの攻撃といい、まさかあと11本も、同じ魔剣があるんじゃないだろうな？ 一人相手ならまだしも、「加速」能力を持つ12人相手に立ち回るなんて、不可能だぞ。

「ジュール様、ご無事ですかッ？」

「くっ……。ラフィ、貴女には待機を命じていたはずですが。どうして来たのですか……？」

「団長を守るのが、私の使命ですから」

コイツ、聖貴士団の団長だったのかよ。それにこの甲斐甲斐しい女も、フルフェイスの兜で覆われてよく分からないが、声の調子から相当美人な気がする。いや、そもそも貴族には美形が多いんだが……。

このクソ野郎、このうえにまだ欲しいものがあるのかよ。……同じ男ながら、呆れるぜ。

ヴィーのお陰で、一気に黒い感情が霧散してしまったオレは、そんなことを考えて溜息をつく。なんだか醒めてしまって、くだらない怒りしか沸いてこない。

「……行けよ」

オレの言葉を聞いて、ジュールが目を見開く。ラフィとかつていう女のほうは、オレに殺気を送ってくるが、そっちは無視する。女に嫌われるのは得意じゃないが、残念なことに慣れてるんでね。

「この私を、見逃すというのですか？」

ジュールの言葉に、オレは肩をすくめる。

「お前をここで殺したら、失格になっちまうし……」

一応、フェンがやられた分の仕返しも済んだしな。そう言って、ヴィーのいる方を見る。そこには、アンナに支えられて立つ愛弟子の姿。……まったく、心配かけやがって。もう一度、鍛え直しだな。

「後悔、しますよ」

フェンと同じように、女貴士に支えられて立ち上がったジュール。その強気な言葉に、オレは笑って応える。

「もうしてるさ……二度と、アイツには近づくな。次はきっと殺しちまう」

「立场上、お約束は出来ませんが……その言葉は、胸に刻んでおきましょう」

目を瞑り、頭を垂れるジュール。恐らく、誓いのつもりなんだろう。

「覚えていろ、探索者」

人の話を聞いていないらしい女の方がそう言って、ジュールを支えたまま魔剣の力で飛び退く。オレは、控え室へ繋がる闘技場の通路へと入っていきこうとするそいつらへ向かって、声をかける。

「おい、忘れもんだぞ」

そして、拾い上げたジュールの腕を投げ渡す。腕の良い回復術師がいれば、まだ繋がるだろ。……って、おいおい、わざわざ教えてやったのに、そんな殺気を送ってくるなよ。なんだか、いつぞやのフエンを思い出すな。

「ま、とにかく終わったか……」

二人の姿が通路へと消えると、オレは静まり返った会場内を見回す。まあ、色んなことが起こりすぎて、混乱するわな。……仕方ない。

オレは、左手に握ったジュールの魔剣を高々と掲げる。

右腕は、先ほどの女貴士からの攻撃で、血が出ているしな。けれど、深い傷ではないが……乱入者に、しかも女につけられた傷を堂々と晒すのは、流石に格好がつかない。全身を鎧に包んだあの貴士が女だったのは、声を聞いたオレにしか分からなかっただろうけど。

やがて、戸惑っていた人々は状況を飲み込み、この大会の勝者に気付いてくれたようだった。じわじわと広がる歓声。一部、女共からはブーイングが聞こえるが、気にしないことにする。

……まあ、たまにはこうして目立つのも、悪くないかもな。

「ご苦労様」

「……お前に言われると、すげえ苛立つのはなんでだろうな？」

「あら、なぜかしらね？」

闘技場から、選手用の通路を通って控え室へ帰ろうとしたところで、マリアに声を掛けられる。背後からは、未だ鳴り止まぬ拍手と歓声が聞こえている。……ま、たしかに魔剣同士の戦いなんて、そう見れるもんじゃないだろうしな。

「オレを旁いに来たってワケじゃあ、無いんだろ？」

「そうね、悪いのだけれど……」

こうなることはなんとなく予測していたので、何の用か、などとは尋ねない。

左手に持っていた戦利品の魔剣を、壁に寄りかかるマリアに向かって放り投げる。抜き身のその柄の部分をきちんと掴んで受け取り、微笑むマリア。

「ありがとう。これで、陛下に良い報告が出来るわ」

憎らしいことこのうえないが、どうしても憎めない。その顔とプロポーションは、ズルイよなあ。男の性に逆らえないこの身が恨めしいぜ……。

「それじゃ、またいずれ会いましょう」

オレから魔剣調査官としての獲物を受け取ったマリアは、鞘を失ったその魔剣を魔術で細工されているらしい布に包むと、壁から背中を離して言う。完全なる仕事モード。

「……………。オレの方は、もう会いたくないんだがな」

マリアの言葉に、思わず眩いてしまう。……と、そこでひとつ思い浮かぶ。

「ああそうだ。マリア、その魔剣のことだがな……」

「なにかしら？　悪いけど、これはもう渡せないわよ？」

オレの先に立ち、去って行こうとする背中に声を掛ける。別に、名残惜しいわけじゃないが、是非言っておきたいことがあったのだった。

「いや別に、元々王家のもんだろーからソイツを返すことに抵抗は無えんだが……次はもっと、まともなヤツに預けてくれねえか？」

半ば本気で言うオレに、くすくすと笑うマリア。今のが、まるつきり冗談だと思われたのなら心外だ。マリアは、オレに視線を合わせる。

「ふふ……。分かったわ。陛下に、そう伝えておいてあげる」

……いや、別にそこまでしなくても良いんだけどな。

「それより王都での本選も頑張っただね。私が出た情報によると、他の予選大会では残り11人の聖貴士たちが順当に勝ち上がっているそうだから」

……………え？

「元々、聖貴士の力を王都の有力貴族たちに披露するのが目的だったみたいけど……。その筆頭である団長が倒された今、彼らは貴方を倒そうと躍起になるでしょうね」

「え？ ヤツら、ヴィーの保護者であるオレを倒しに来たんじゃ……」

オレの疑問に対して、マリアは首を振る。

「ああ、それは嘘。そもそも、この大会に貴方が出ることになったのは、今朝のことだもの。いくら彼らだって、そこにいきなりねじ込むことなんて出来ないわよ」

……………。

じゃあ何か？ アイツら、事前にヴィーのことを調べていたから、オレのことを知っていただけだったのか？ いや、それにしてもオレが魔剣使いだってのも知ってた様子だったし、ジュールには「私たちの目的を知っているか」なんてことを聞かれた気もするが……。

そこで、オレは目の前の女の楽しそうな表情に気付く。……コイツ、……まさか、ジュールたちにも情報を流してたのか？

「今日は貴方の魔剣ハルマーの能力を十分観察出来たし、聖貴士団長ジュールの魔剣回収までして貰って、実に有意義に過ごせたわ。本当にありがとう」

手をひらひらと振って、今度こそ去っていくマリアを、オレはただ見送るしかなかった。

「生きていたらまた会いましょう、ヴェルク」

ま、また、騙された……。

26. 寄り道

実に不本意なことに……マリアの策略にハマったオレは、街で行われたフェイド王国武術大会予選を勝ち抜いて、王都で行われる本選大会にも出場するハメになってしまった。

実は、通路でマリアと別れたあと、急いで大会関係者に出場辞退を掛け合っただが……。

『申し訳ありません、ヴェルクさま。貴方はもう王都の大会選手に登録されてしまっています。こうなってしまうと、辞退するには自ら王都へ出向き、違約金を払っていただく必要があるんです』

オレは、受付の綺麗なネーちゃんのその言葉に首を傾げ、眉を顰めた。

『なんだそれ、聞いてないぞ？』

『いえ、出場者には、もれなく誓約書を交わして頂いているはずなのですが……』

うん、これは罨の香りがプンプンするな。恐る恐る、口を開く。

『……ちなみに、その違約金の額は？』

……はい。聞くんじゃありませんでした。

チクショウ。出場者に対して、そんな面倒な義務が課せられるな

なんて知らなかったぞ。

あの女、そこまで計算に入れてたのか？ いやそもそも、この制度そのものが、オレを逃がさないために仕組んだことなんじゃないかと勘ぐってしまうのは、自意識過剰か？ もしくは、王が聖貴士どもにいやがらせを仕掛けたって可能性も……無いかな。ヤツらは貴族、お金持ちだもんなあ。オレと違って……。

いつその事、違約金を踏み倒して逃げてしまうっていう手もあるな。と、そう考えたオレは……大会後に行われたささやかな祝勝の宴で、とても楽しそうにしていたヴィーの姿を思い出してしまう。

はあ……。こればかりは、投げ出すわけにもいかなーよなあ。

ということで結局、オレは素直に本選に出ることにした。いや、ていうか借金生活が嫌なら出るしかないんだけど……。で、本選の開始が約1ヶ月後と、大分時間が空いていることに気付く。この街からなら、普通に馬車を乗り継いでも一週間とかからないハズだが……。

どういうわけか、再度関係者に尋ねると、どうやら予選の勝者が怪我をしていた場合の治療期間や、地方の街から王都へと観客が集まるまでの時間とを計算されてのことらしい。……お祭り騒ぎは当分続きそうだ。

なにはともあれ、聖貴士が大量に待ち伏せている可能性のある王都へ早々と向かう気にはなれず、こちらでいくらか時間を潰してから向かうことにした。

ヴィーを守るためには、彼女を連れて行くべきか置いて行くべき

かで迷ったが、どうやらアイツの中ではもう王都行きは決定事項らしい。……まあ、考えてみれば、王都には今、姫さんもいるもんな。

あ、なんだか余計に王都に行きたくなってきたぞ……。

「ふむ？ どうしたんじゃ、ヴェルク」

「……いや、なんでもないよ、それで、その遺跡がなんだって？」

いつかと同じように、急に頭を抱えたオレを変な顔で見つめるゴード爺さん。ここは、探索者ギルドのカウンターだ。オレは、定例となっているティアの魔剣研究に協力して旅費を稼ごうとしに来たのだが、そこをゴード爺さんに呼び止められたのだ。

なんだか、新しい遺跡がどうのこうのと言っていたが……。爺さんは、自分の話をよく聞いていなかったオレに対して、大きく溜息をつく。指をくるくる回す、いつもの癖。

「……まあ良い。とにかく、新しく発見された遺跡をおぬしたちに調べて欲しいんじゃよ」

「おぬし、たち？」

オレは、その言葉に首を傾げる。……なんだか、激しく嫌な予感がするんだが。

そして翌日。オレの予感は当たってしまった。

正直、昨日の今日で、よくもまあこんな簡単にこの面子が集まるものだ、というくらいに面々が揃っている。たしかに金は良いんだ

が……。未開の遺跡となれば、高価な遺物が見つかる可能性もあるし。

とりあえず、最近はずっかり馴染みになってしまっている、オレ、ヴィー、アンナ、フェンの四人が、この場に揃っている。ちなみに姫さんは、未だ王都から帰らず、今回は不参加だ。少し、ホツとしている自分がいる。

「なんだか、探索も久しぶりに感じるべ」
「そうですね、アンナ」

あの日使った例の会議室で、楽しそうに話をしているアンナとフェン。その隣に座るヴィーが、オレの肩を人差し指でとんとんと叩く。

「ところでヴェルク、アイツらって……」
「言うなヴィー。なにも、言うな……」

……そう。それ以外のヤツらが、少し、その……面倒だった。この街のギルド内最大手の派閥。そのエースたちが揃っているのだ。

その一人が、先日オレに武術大会予選一回戦でボロ負けした斧使い、ギーグだ。なんだか知らんが、こちらをギロリと睨んでいる。いやまあ、オレのせいなんだろうけど。

ギーグ以外にも二人、有名な探索者がこの場に同席していた。槍使いのテイルと、ナイフ使いのジャックスだ。うん、テイルは中々の美人だな。ジャックスは……顔の下半分を黒い布で隠しているし、そもそも男だ。興味が沸かない。

ギーグ、テイル、ジャックス。そしてオレが名前を知らない……恐らく格好からして魔術師か回復術師の類であろう二人の探索者。ちなみに、どちらも男。そもそも、探索者に女はあまりいないんだが……。こちらのパーティは、やっぱり少し特殊なんだろうなあ。

と、そこでアンナが辺りをキョロキョロ見回しながら口を開く。

「で、今回のパーティーリーダーは誰だべ？」

「決まってねえよ。そもそも、このミッションはギルドから直々に下りてきたモンらしいからな」

「はあ、そうなんだべか……」

いつも通りの舌足らずな訛り口調に対して、律儀にもそう返したのは、意外にも最高に厳つい大男、ギーグその人だった。うん？　なんか表情が硬いのは気のせいかな？

すると、ギーグの隣に座っていた人物、槍使いのテイルが立ち上がる。

「ヴェルク殿。ここは、私に仕切らせて欲しいのだが……」

「……なんで、オレに聞くんだ？」

意外にお堅い口調だな。たしかこの女、元騎士だなんて噂もあったけど……。

「貴方が一番、強いからだ」

「そりゃ……どうも」

自分を含めたギルド屈指の使い手三人を差し置いて、オレをこの中で最強と断言してしまうテイル。それに対して文句一つ言おうと

しない二人。……うん、気の乱れも感じない。意外と、派閥内の意思疎通は図られているんだな。

ただ、こちらとしては非常に気恥ずかしいうえ、ヴィーの能力とフェンの将来性を考えると、容易く領けない。アンナだって、種類こそ違えど極まった実力の持ち主だし、実績だけで言えば、パーティリーダーを務めてもおかしくはないレベルだ。ただし、流石に12歳じゃ、いざというときの責任を負うことができず、こちらがソレを彼女に問うこともできないのだが。

「別に良いのではないですか、師匠」

「んだべんだべ。九人パーティのリーダーなんて面倒なことをわざわざやってくれるって言うだ、素直にやってもらえればいいべさ」

お互いのことに関係が無いと、人を疑うってことを知らないよなあ、コイツら。良いことなのか、悪いことなのか。そういえば、ギルドらにとって遺跡で発掘された遺物は、ギルド内の地位を上げるために必要な重要アイテムなんだっけ？

まあ、今回の仕事で得られる名声なんて、オレには興味も無えしな……。そもそもオレには、パーティリーダーの経験があまり無く、これだけの人数のパーティとなると……。やって出来ないことは無いだろうが、やっぱり面倒だし他人に任せたほうが気が楽だ。

「オレは金さえ貰えれば、それで良いさ。……あとは勝手にしてくれ」

「……感謝する」

そういつて、テイルは深々と頭を下げた。

26. 寄り道（後書き）

試しに、アルファポリスさんに登録してみました。

27. 新たな遺跡へ

ソレを見て、まずヴィーが口を開いた。

「……入り口は随分、小さいんだな」

「まあ、だからこれまで見つからなかったんだろうな」

その遺跡は、街から馬で東に向かって数時間ほどと、少し離れた山の中にあつた。まるで、木に隠れるように地下へと続く入り口が存在している。

ぽっかりと口を開けたソレは、忘れ去られた炭坑のようで、一見ただけではそう危険なものだと思わないだろう。周辺で、モンスターを見たという話も聞いていない。しかし――。

「冒険者ギルドでも手練だった6人編成のパーティが、一人を残して全滅している。気を抜くな」

パーティリーダーとなったテイルは、オレたち全員に向かってそう言う。

話によると、この入り口を発見した冒険者パーティが、そのまま遺跡の探索へと移ったそうなのだが、後衛一人を残して全滅したらしい。で、錯乱状態だった生き残りのソイツがこの辺りで発見され、ようやく探索者ギルドへお鉢が回ってきたというワケだ。

うーん。意外に冒険と探索に必要な能力は違ってくるからなあ。そいつらが冒険者として手練でも、相手がどのくらいの脅威だったのかは、まだ見当がつかんな。生き残りの一人からも、情報は得ら

れなかったらしいし……。

「前衛は、我々三人とヴェルク殿が務める。他二人は後衛組の護衛をお願いする」

「かしこまりました」

「ちっ、しゃーねえな……」

オレは前衛か。まあ「気」の読めるようになったフェンとヴィーが殿を務めてくれるなら不安は無い、か。二人の成長が嬉しいような、でもどこか寂しいような、不思議な気持ちだ。

「それでは、行くぞ」

テイルのその一声で、オレたちは地下へと踏み出した。

「随分、湿気があるな……」

「恐らく、近くに水源があるのだろう」

階段状になった岩場を軽い足取りで進みながら、オレはこの遺跡の感想を呟く。ソレに対して、律儀に返してくるテイル。

その身には、騎士の如き白銀の鎧を身にまとっている。とはいえ、探索用に作られたのであろうか、いくらか軽量化はされているようで、ジュールなんかを着ていたものよりは比較的身軽そうな鎧だ。ただ……。

「この湿気の中でそんなもん着込んで、暑くないのか？」
「暑いな。今すぐ脱ぎたいくらいだ」

それは、オレとしては嬉しいが……。前を向いて集中したままのテイルに、オレは溜息をつく。振り返り、後衛をぴよこぴよこ歩く回復術師を見る。

「アンナ」

「ああ、了解だべ」

そう言っ、アンナは鞘からあの杖を取り出して、小さく呪文を唱える。たちまち、不快な湿気がメンバーそれぞれの周囲から消えていく。テイルが、その魔術発動の早さに驚いてみせる。

「今の、一瞬で……？」

「教会の治療でよく使う魔術だべな。体温の維持って、人間にとって意外と大事だかなあ」

言うは易し、行は難し。この外気から身を守る魔術は、通常は気休め程度に過ぎないが、アンナがやってみせたコレは、姫さんの繰り出す炎の余波にも耐える質の高いものだ。恐らく、多少の火にまかれたくらいでは破られないだろう。それを一瞬で、これだけの人数にかけるのは、常人には不可能に近い。他の術師二人も、それを感じたのか言葉を失っている。

「教会でのアンナの治療は、10人単位で行うこともザラですからね。慣れているんです」

「なんだ」

「慣れでどうにかなるモンじゃ無えだろうが……」

フェンとアンナの言葉に、ギーグが呟く。……まったく、その通りだ。

「アンナ殿、感謝する」

「いいべいいべ。オラもそろそろ暑いなと思っていたところだったべ」

テイル以上に着込んでるといえなくも無い、マスクとフードを被った状態のアンナが答える。たしかに、その格好は暑そうだ。いそいそと杖を鞘にしまう姿を見ていると、アンナと目が合う。照れたように、頭をかくアンナ。

「いやあ、オラが宝石駄目じゃなかったら、ずっと持つとくだが……」

「そんな凄え術師なのに宝石アレルギーってのも、おかしな話だよなあ……」

「えっへっへ。見るのは嫌いじゃないんだども、昔からの体質だからなあ」

宝石には、魔術の効果を増幅させる力がある。

それぞれ、宝石の色によって増幅できる属性が違う。炎の魔術を得意とする姫さんの場合は赤い宝石、回復術を得意とするアンナの場合は白い宝石……といった感じだ。

その宝石に特殊なカットを施して加工することで、術者それぞれの個性に応じたものが出来上がる。故に、そう簡単に他の人間の杖を使って魔術を強化、というワケにはいかない。そこらへんは、魔剣と同じだな。

宝石の入手にも、その加工にも結構な金額がかかる。武器や防具の手入れや買い替えが必要無い魔術師たちの、一番の出費要因は、

この宝石だろうな。

苦手な魔術を補助するために、宝石を複数持つ場合もあるが、そんな非効率なことが出来るのは、よっぽどの金持ちだけだ。その人間の持つ本来のもの以外の、伸びしろの無い属性を強化しても、大して意味が無い。

アンナは、そんな宝石に対して鉱物アレルギーを持っているため、普段からマスクとフードを着用している。……術師なのに、面倒だろうな。

「大変だなあ」

「もう慣れたもんだべ。まあ、宝石なんか無くても、結構イケるだよ」

歩きながらそう言って、ガッツポーズを作るアンナ。

……ま、まあ、実際にその効果を体験している身としては、頷かざるを得ないな。流石にあの時は死んだと思ったのに、今はこうしてピンピンしてられるのだから、脅威の回復能力だ。

それを、教会ではほとんど無償で提供しているのだから、偉いヤツだ。通常、そんな質の良い回復術を受けようと思ったら、個人の年収を上回るくらいの金がかかる。

「おい、もう少し緊張感を持てよ」

歩きながら顔を横に向け、背後のアンナと話していたオレは、ギグの不快そうなその言葉に前を向き、ニヤリと笑う。タイミングが良いな。……ヴィーとフェンも、気付いたようだ。

「ああ、分かってるさ。……早速、来るぞ」

オレの言葉に、半信半疑ながらも身構える前衛組。……いや、ジヤックスだけは、オレの言葉より先に警戒しだしていた。もしかして「気」を察知できるのか？

やがて、オレたちの前に姿を現したのは、人間やモンスターの死体の群れ。……いわゆる、ゾンビってヤツだった。

恐らく、その一群の中にいる比較的状态の良いアイツらは、先刻話していた冒険者のパーティだろう。死んでから時間が経っていないからか、苦悶の表情まで容易に読み取れる。しかし、それ以外のヤツらは……この湿気のせいもあるのだろうか、かなり腐敗が進んでいた。

……アンナの魔術が無ければ鼻が曲がっていたな、これは。

オレは、最初に飛び掛ってきたゴブリンゾンビを魔剣で切り殺して、歩き続ける。正確には、相手はもう死んでいるんだが。更に二匹、今度は走ってきたハウンドドッグのゾンビを切り刻む。

ソイツらから飛び散って壁や床に付着する血と肉片を見て思う。オレの得物は形の無い魔剣だから良いものの、他のヤツらは後々武器の手入れが大変だな。……まあ、どうでも良いことか。

……何者かの手によって死霊術の呪いを掛けられた、哀れなコイツらに比べれば。

27. 新たな遺跡へ（後書き）

ようやくアルファポリスのWebコンテンツランキングの仕組みを理解しました。バナーつけなきや駄目だったんですね……（汗

28. 死体の群れ

大量に湧く敵を、斬って、斬って、斬りまくる。飛び散るゾンビ共の血肉と内臓とで、辺りは凄惨な光景となっている。

ヤツらは首を狩るか、一定量の体液を失うと活動が不可能になる。その血がやけに黒ずんでいるのは、その浄化作用が最初の死によって失われているからだそうだ。別に、毒素を含んでいるわけではない。

オレ以外のメンバーも上手く連携して、主に首を狙っての攻撃を繰り返している。初めて共闘するテイル、ギーグ、ジャックスの三人も、非常に手馴れた連携を見せていた。

「いくぞ、ジャックス、ギーグ!!」

「了解した」

「おう!!」

まず、静かなる男、ナイフ使いのジャックスが、コートの下に隠していた無数のナイフを相手にピンポイントで投げつけ目を潰した後、テイルのリーチの長い槍で串刺しにし、相手の動きを止める。そして巨漢ギーグの斧がその首を目掛けて振るわれる……といった様子だ。これを繰り返すことで、一定の間合いを保ったままの戦闘を行っている。

うーん。会議室での様子といい、意外にちゃんとしたパーティなんだな、コイツら。

……しかし、ゾンビの腐った肉体は、血と肉を残しているためス

ケルトンなどのソレより幾分斬りにくく、血糊ですぐに刃が駄目になってしまう。数体程度なら問題ないのだが、ここにいるヤツらの数はあまりに多い。気を察知してみるが、まだまだ奥から現れそうな雰囲気だ。

実際、オレ以外の連中は、繰り出す攻撃を最小限に控えているのにも関わらず、武器の切れ味が鈍ってきているようだ。……その身体の動きと共に。

「はあ、はあ……コイツら、キリが無えなツと!!」

グシャリ、という音を立てて……もはや、ギーグの斧は相手を斬っているのではなく、叩き潰しているような状態だ。ジャックスが、静かに言う。

「ギーグ、突出しすぎるな……」

「くそっ、分かってらあ!!」

体格もあるのだろう。一撃の威力は高いが、スタミナの消費が激しいらしいギーグは、既に呼吸が荒い。そういえば、武術大会でも一撃で決着をつけようとしていたが、アレにはこういう理由もあったのかもしれない。

と、そのギーグのすぐ横、壁の向こう側から敵の気を察知。ずいぶんデカい気配だ。

「ギーグ……ッ!!」

気付いたジャックスが叫ぶ前に、オレは瞬時に体内に魔剣を仕込んでダッシュしていた。その衝撃に、ギシギシと骨と筋肉がきしむ。

高速でゾンビと仲間たちの間をすり抜け、ギーグとその壁との間に滑り込む。ソレを呆然と見るギーグ。

鈍い音を立てて、石積みの壁が崩れ落ちてくるのを、一つ一つ魔剣ハルマーで覆われた拳で粉碎する。……もはやこうなると魔剣というより魔拳だな。

そのまま前方にジャンプ。現れたオーガゾンビの肩に跨り、薄い刃と化したナイフ状の魔剣で、その首の周囲にぐるりと円を描く。

そこから飛びのいたオレが着地するのとはほぼ同時に、体長は優に5メートルはあろうかというオーガゾンビの巨体が膝から崩れ落ちる。首の上で静かに切り離されていた頭部がゴロリと転がって、呆然としているギーグの足元へ。

目を見開いてオレを見る前衛組に、告げる。

「お前ら、ここで戦ってろ」

「ヴェルク殿？」

このまま大量の敵相手に長期戦となれば、こちらは疲弊していくだけだろう。かといって、同じ街に暮らしていた冒険者たちをゾンビにしたまま撤退するのも気が咎める。万が一、第二第三の被害者が出た場合、きっと後悔するだろうしな……。

「奥のヤツらは、オレ一人で終わらせる」

オレは、体内に纏わりつく魔剣に神経を集中させて、敵に向かって駆け出した。……相手は、ソレを認識すらできなかっただろう。床を蹴り、壁を蹴り、天井を蹴る。その間に振るわれる、極小の魔

剣が二本。

——その一瞬で、大量の首が宙を舞う。

死霊術は、禁忌の魔術だ。大抵の場合、術者は人間やモンスターの死体を使い、そこに別次元から呼び出した邪悪な魂を宿して使役する。

ただ、その個体数が増えれば増えるほど、完全なる支配は難しくなっていく。歴史の中では幾たびか自滅する形で街や国を滅ぼしているという話だ。王国内では、それに関する書物を持つだけで死刑になるというほどなのだから、その脅威はおおよそ事実なのだろう。

実際、ハルマツゾの知識の中にも、ソレらに関するものがいくつもあったが、術の使用法といった本格的なものではなく、対処法がそのほとんどだった。恐らく、古代の英雄であるハルマツゾも、かつては死霊術師相手に戦ったことがあるのだろう。

たしかに、切れ味が落ちることの無い魔剣ハルマーは、うってつけの武器ではあるが。

「ハア、ハア、ハア……ッ」

あれからどれだけの時間がたったのか。途轍もない密度の高速戦闘を続けたせいで、時間の感覚が狂っている。隣にゾンビの沈む血だまりの中で、オレは大の字になってぶっ倒れていた。服や体が汚

れるのを気にする余裕も無い。そもそも、既に全身は血飛沫で血塗れになっているのだが。

長時間の魔剣使用による過度の精神負担と、身体の動作を無理矢理加速させるという荒業による過度の肉体疲労および過負荷のせいで、体が動かねえ。いつか、街中で戦闘を行ったときのように急速に意識が薄れていくということはまだ無いが……うぐぐ、これは痛えぞ。

ようやく体を起こして周囲を見回すと、周囲には死体、死体、死体……。元々死んでたのを、また冥土に送り返してやっただけ……ではあるが、正直あまり気の良いものじゃない。見ると、あちこちの壁や床、天井には、オレが蹴り出し加速した度に出来た穴が多数開いている。この技、価値のある遺跡や建物なんかでは使えないな……。

と、全身の痛みに気が散漫となっていたところに、背後から物音。

「グルルルル……」

……殺し損ねたミノタウロスゾンビだ。最後のほうは、オレも肉体的、精神的疲労でボロボロだったため、攻撃の精度が落ちていたのだろう。人間より遥かに巨大な体躯だったソレが、上半身だけとなってもまだ、こちらへと這いずり寄ってくる。オレは立ち上がろうとするが、膝に力が入らない。かといって、この状態で魔剣を使えば、その瞬間に気絶する可能性が高い。

腕のリーチが人間のソレより長いソイツは、意外なほどのスピードでオレに近づいてくる。涎と血を、地面にこぼしながら。

「おいおい、マジかよ……」

だが次の瞬間。光の帯がオレのすぐ脇を通り抜け、ミノタウロス
ゾンビの頭部を真つ二つに切り裂いた。ついに物言わぬ死体となっ
たソイツは、最初の勢いを失いながらズズズ……とオレのすぐ近
くまで滑ってくる。

「ヴェルク!!」

その声に振り向くと、大量の死体の向こうからヴィーがやってく
るのが見える。その手にある大剣には、まだ光の粒子が纏わりつい
ている。どうやら、上手く力をセーブしてあの技を使っただけらしい。
うーん、便利だなあ。

恐らく、向こうは無事に片付いたのだろう。疲れ果てて気の察知
もままならないが、やはりさっきのヤツがここいらでは最後の一体
だったようだ。

「無事かよ、ヴェルク……」

「ああ。おかげさまでな、ヴィー」

ヴィーに脇を支えて貰って立ち上がりながら、オレは言う。オレ
の体に纏わりつく血と汗に服や装備が汚れるのも気にせず、ヴィー
は微笑む。

「あの時は、ヴェルクをこうして助ける日がくるなんて、思いもし
なかったな……」

急に昔を懐かしむような表情になるヴィーに、オレは一瞬ドキリ
とする。なんだか、そうしてると随分と大人っぽいなあ。

「……一体、いつの話をしてるんだ？」

「そうだなあ。もう、5年も前になるかな」

「5年？ お前と出会った時ぐらいじゃねえか。……まあ、お互い若かったな」

「なんだよ。ヴェルクと違って、アタシはまだ若いぞ」

そう言って笑うヴィーに、オレはついついムキになる。

「オレだって、まだ30だ。去年までは――」

「20代だったって？ もうすぐ、31の誕生日じゃんか」

まあ、そうなんだけど……あまり大きな声で言わないで欲しい。

去年までは20代だった、という辛うじての言い訳が使えなくなるのが、少し悲しい。……ああ。なんだか、我ながら哀れだな。

「……って、アレ？ オレの誕生日なんて覚えてたのか？」

「ま、まあな。……お、フェンたちが来たぞ」

ヴィーがそう言って、オレが顔を上げると、通路の角からフェンたちが姿を現す。

「師匠！？」

「あー、心配すんな。ちょっと、疲れただけだ。……今はとにかく、水を浴びたいぜ」

心配そうな表情で、こちらに近づいてくるフェンをよそに、オレは呟く。しかし、ソレを聞いたヴィーは、それに応えるように呟きを返す。

「無茶ばかり考え付くその頭も、ついでに冷やしてくると良い。…心配、すんだろ」
「……すまん」

本気で心配そうな表情を見せるヴィーに、オレはただ謝るしかなかった。

ひとまず、コレで初日の探索は終了となった。

29. 小休止と喜劇

街より東の山中で発見された遺跡の探索一日目を終えて、オレは宿营地となった場所から更に奥まった、小さな部屋の隅っこで頭から水を被っていた。

「ああ、生き返る……」

髪に付いた血を粗方落とすと、組み立て式の木桶に水を溜め、そこに浸しておいた布で身を清める。乾いた血と共に、心身の疲れが落ちていく気さえする。……あくまで気分的なもので、疲労した腕にはあまり力が入らないままだが。

別に、遺跡内で水源が見つかったわけではない。というのも、テイルたちが引き連れていた術師の一人が水魔術使いだったのだ。

大氣中にこれだけの水分がある場所のなら、魔術を使うことで水を作り出せるというソイツの提案に、オレは飛び乗った。戦闘ではあまり活躍していなかったその年若い魔術師だったが、オレの中でコイツの評価は一気に上がった。名前はヌークとか言ってたな……：……ようやく覚えたぜ。よく見ると、なかなか端正な顔立ちをしている。

最悪、着替えだけしてそのままで過ごすか、持ってきている飲み水を使うハメになるところだったからだ。水源が見つかるのが、一番良いのだけれど、長時間戦った皆の疲労度を考えると、今日はコレ以上の探索はムリだろうしなあ。

「しかし、水魔術ねえ……」

水魔術、とはいえ、水が無から作り出せるワケではない。氷点下だったり、乾燥していて周囲に水分のないところでは使えないなど、使用に制限があることが多く、攻撃力や範囲も限定されてしまうことから、普通は水辺や船の上くらいでしか使わないものだ。探索者にはその術者自体をあまり見かけないのだが……これは意外に便利だな。

ハルマツゾから受け継いだものの中に、こうした水魔術の知識自体はあるのだが、実際にこうして探索中に使ってみると、そのありがたさが身に染みる。オレに、もっと魔力があればなあ、と思わずにいけない。

ちなみに、テイルたちの探索では当たり前のように使われる術の使用法らしく、ギーグが背負っていた荷物の中には、簡単な沐浴セツトすらあった。考えるに、これはテイルのための物のような気がするんだが、まさかギーグのヤツ、あの女に惚れていたりするのかな？

ちなみにもう一人は、やはりテイルたちの派閥に所属する回復術師だった。名前はヘンリー。今はテントを張った宿営地で、アンナを前に正座してその回復術の講義を受けている。意外に友好的な態度のソイツらに驚いたオレだが……まあ、親交を深めるのは良いことだよな。

「ヴェルク殿」

「ん？ テイルか。どうしたんだ？」

体を粗方拭き終わったところ、これもやはりテイルのために持ち込まれたと思われる衝立の向こうから、その当人の声が聞こえる。感覚が鈍っているのか、気は感じられなかった。うーん、けっこう重

症だなあ。これじゃ足手まといになりかねん。

「着替えを持ってきた」

「ああ、そっか。サンキュー」

「ついでだ。どうせ次は私が使わせてもらうからな」

どうやら、使い物にならなくなったオレの服の代わりを持ってきてくれたようだ。汚れても良いように黒い服を選んではあるが、さすがにあれだけ血塗れになってしまうとなあ……。今はアンナの魔術で誤魔化せているが、おそらく酷い匂いを漂わせているだろう。

衛生状態が劣悪であることが多い遺跡の中では、意外に着替えや食事などの衛生面に気を遣う。どこで、どんな毒素が付着するか分からないため、食事前には必ず回復術師の解毒魔術がその食事に対して掛けられる。長期探索に、彼らの存在は欠かせない。

実際、浅はかにも彼らを欠いたパーティが地下で食中毒になり、戦闘中に腹を下して糞尿まみれになりながら帰還したなどという笑い話もあるが……。周りからしてみれば喜劇でも、本人たちにとっては悲劇だったろうなあ。自業自得だが……。オレも気をつけよう。

そんなことを考えながら、衝立越しに服を受け取り、さっさと着衣を済ませたオレは衝立を避けて外に出た。

「さてと。テイル、待たせ、た……。な……。？」

しかし、オレの目前には、予想外の光景があった。

「……ん？　どうかしたのか？」

「いや、どうかしたのかって……。お前、なんでもう裸になって…

…って、うわ!？」

思いがけない事態に年甲斐もなく動揺したオレは、疲労から抜けていない足を転がっていた石に引っ掛けて前方につんのめる。

咄嗟に、近くの瓦礫の上に置いてあったテイルの鎧を引っ掴むが、それはまったく支えにならず、そのままテイルの胸に飛び込む形になってしまう。オレを受け止め、そのまま後ろに倒れていくテイル。

彼女の鎧が地面に落ち、大きな金属音を辺りに響かせる。

「イタタタ……。すまん、大丈夫か？」

「ふむ、流石だな。そんな状態でも私を庇ってみせるのか」

倒れこむまでの間に、上手くテイルと身体を入れ替えて、どうにか彼女を自分の下敷きにすることは避けられた。しかし、テイルの下敷きになっているこの状況はなんというか……。色々な意味で危険な気がする。あ、意外と胸がデカイな……。じゃなくて。

「ヴェルク……。なにやってんだ？」

つつい引き寄せられるテイルの肢体から視線を上げると、そこには赤い髪を逆立てた女剣士の姿。恐らく、先ほどの鎧が落ちた音を聞いてやってきたのだろうが……。

……感覚が鈍っていても、殺気って分かるんだな。

「ちょ、ちょっと待て! 誤解だ!」

「その、一体どこが、誤解だってんだあ!」

そう叫ぶヴィーの身体が光の粒子を帯びていく。……このままだと確実に殺される。テイル、さっさとそこからどいてくれ……!!

「いやあ、申し訳ありません。羞恥心に欠ける姉で、いつもああなんです。ほら姉さんも、ちゃんと謝って」

「……む？ 私が、なにかしたか？」

「はあ……。何度も言うけれど、一般常識の問題だよ、姉さん……」

深く頭を下げるヌークに、首を傾げるテイル。……コイツら、姉弟だったんだな。オレは、ヴィーに酷くぶたれて盛大に腫れ上がった頬をアンナに治療して貰いながら、ため息をついた。

「あの女、そういうトコは全く学習しやがらねえしなあ……。その上、昔騎士だった名残か貞操観念は強いし、腕っ節もオレたちより上、だからなあ……」

「その無防備さに、彼女を襲って教会送りにされた探索者は、数知れない……。災難だったな、ヴェルク……」

同じ焚き火を囲むギーグとジャックスもそう言ってため息をついているのを見ると、どうやら初めてのことじゃないらしい。いや別に、コレはテイルにやられたワケじゃないし、大体お前ら、分かっているなら止めろよ……。

あの時、ヴィーが帯剣してなかったから助かったものの、そうでなかったらオレの首がゾンビ共よろしく撥ねられていたところだ。……と、そこへ、しおらしい表情をしたヴィーが、オレに近づいてくる。

「わ、悪かったな、ヴェルク……」

「……まあ、別に良いさ。転んだオレも悪いんだし……」

……ヴィーのヤツ、あーいうのはてんで駄目らしい。以前、姫さんも、オレが女……ていうかマリアを宿に連れ込んだって話を聞いて怒ってた、なんて言ってたし。そういうのに対する耐性が、無さ過ぎるんだろうな。

探索者としての実力は既に一流だが、中身はまだまだ子供、か。……うーん。男と付き合うようにでもなれば、変わってくるんだろうけれど。

「女の人の裸さ見て動揺するなんて、ヴェルクにもカワイイところがあるべ」

「いつもは冷静な師匠も、心根は男の子……ですねえ」

うるさいぞ、その二人。

30. 疲労感

探索二日目を迎えて……オレの体調は最悪だった。

前日に行った、魔剣を使つての長時間の戦闘。それが肉体的にも精神的にも、オレの体力、気力をごっそり奪ってしまったようだった。一日目はほとんど探索できず、ただただ戦うだけだったからなあ。正直言つて、距離的には全然進めていない。

「体力とか気力とか、そういったもんまでは流石に治せないべ……」

アンナが言うには、そういうことらしい。確かに、腕を繋いで貰った時も寝込んだし、ミノタウロス変異種の攻撃を食らった時に死の淵からあっさり呼び戻されたときも、すぐに覚醒はできなかった。あの時にアンナが傷を治してやった女も、すぐには動けなかったようだしな……。

「……ま、そりゃそうだよな」

万能そうに見えるアンナの回復魔術も、やはり魔術という一定のルールの上に成り立っているんだな……。アンナならどうにかしまうんじゃないかねえか……と、一瞬思ってしまう。

いや、ハルマツゾの知識によると、手段がまったく無いワケではないのだが。……帰ったら、試してみるか。

というワケで、現在のパーティ構成は、前衛がテイル、ギーグ、ジャックス、フェンとなっており、オレはヴィー、アンナ、ヌーク、ヘンリーと共に後衛となっている。ヴィーでなくフェンが前衛にな

ったのは、ヤツの双剣がテイル達と相性が良さそうなこと、ヴィーは光の剣で後衛からでも援護攻撃できることが理由だ。

ヴィー曰く、対ミノタウロス変異種戦以降の修行で、光の力をコントロールする術は手にしているようだ。しかし、あの遠距離攻撃は、威力といい速度といい反則レベルだな……。最初に見せた肉体の強化といい、フェイド王家の血筋ってのは、どれだけの潜在能力を秘めているんだろうか。加速能力があっても、あの斬撃はかわせないんじゃないか……？

「ヴェルク。本当に、大丈夫か……？」

考え込んでいるオレを、ヴィーが必要以上に心配する。同じ後衛になったことで、位置的にも話しやすいのだが、正直、オレばかり気にされても困る。今、このパーティの柱となるのは、愛弟子のフエンと、コイツなのだから。テイルたちも確かに強いが、恐らくこの二人には敵わないだろう。そもそも、魔剣がなければ街の武術大会予選で優勝したオレでも危うい。……まあ、自分で言うことじゃないんだろうけど。

「二日酔いよりはラクなもんだ。……それより、最後尾の守りは任せたぞ」

「……ああ、わかったよ」

軽い口調で強がりと言うオレに、まだ何か言いたそうな表情だったが、ヴィーはたったそれだけ返事をして周囲の索敵に集中しだした。うん、気が察知できないのがもどかしいが、いざというときのヴィーの集中力は本物だ。これならオレも安心できる。

しかし、考えてみれば魔剣使用後は毎回、体調が回復するまで休

息をとって、この状態で歩き回るのは初めてなんだよなあ。あの時は、そんなに心配しなくても……なんて思ってたんだが、たしかに、これはなかなか厳しいな……。全身痛いし、気が重い。体の痛みは体内で魔剣を使用しているからだだろうけど。まるで、一年分くらいの疲労感を心身に背負ってるような気分だ。

よっぽど酷い顔をしていたのか、先ほどはヴィーやアンナに一時帰還を勧められた。とくにヴィーは、自分だけでも付いていくからと言ってくれていたんだが。……残念ながら、そうはいかない理由があった。

「一体どうして、あんなに大量のゾンビがいたんでしょね？」

「んだべなあ……。この遺跡くらい大昔の呪いが、未だに効いているなんてことは、まずねえだろうけども。こないだ入ったばかりの冒険者だってゾンビになってたべ」

もはや己の弟子のようになっていくヘンリーの問いに、アンナはのんびりと応える。ヘンリーは、良家のお坊ちゃんらしい容姿の持ち主で、どこことなく頼りない印象を持たせるヤツだ。

昨夜聞いたところによると、テイル、ヌーク、ヘンリーの三人は、王都にいたところからの知り合いらしく、とくにヌークとヘンリーの二人は、まるで双子の兄弟のようにも見えた。どこことなく、雰囲気や見た目の印象が似ているのだ。本当は、テイルとヌークが姉弟らしいんだが……。

「しかし、たしかに凄い数のゾンビだっただなあ。一体全体、どんだけの魔力があれば、あんなだけの死体を動かせるんだべか……」

「たしかに、凄い術者なんでしょうねえ」

アンナの言葉に、うんうんと頷くヘンリー。この二人のやり取りには、どこことなく緊張感が欠ける。オレにビミョーな表情を見て、ヌークが苦笑する。

「ヘンリーは、昔からああなんですよ。いつものんびりしてるっていうか……」

「たしかに、アンナのヤツもそのタイプだな。だから、馬が合うのかね……」

そんな言葉を交わすオレたちをよそに、アンナとヘンリーの会話は続いていく。歩きながら、聞くでも無しに聞こえてくるその内容。

「だども、どんな凄い術者でも、死んだ人やモンスターを勝手に道具にするなんてのは、絶対に許されないことだべ」

「モンスターも？ それは、やはり教会の人間として……ですか？」

「んなの関係ねえだ。あくまで個人的な意見だべさ。そもそもオラ、教会の人間だども、あんまり神様や教典ばかり頼りにするのもどうかと思うべ」

「えっ？ そうなんですか？」

「まあ……オラが元々、田舎の人間だからかもしれないけども」

アンナの意外な言葉に、驚くヘンリー。……まあ確かに、教会きっての回復術師が、その教会のあり方を批判してるってのは、あまり良くはねーんだろうけど。とくに、アンナの場合は、教会でも有名な存在だからなあ。

「ウチげらみみたいな地方の街はそうでもねえけども……王都なんかの教会の偉いさんの間では、親兄弟より何より、まず神を信じるこ

とこそが信仰だっという空気だべ。むしろ、信仰心の無い人間は人間に非ず、なんていう人もいるくらいだ」

「たしかに、そうかもしれません」

アンナの言葉に、王都出身のヘンリーは頷く。

「……だども、本当の心の拠り所ってのは信仰じゃなくて、例えば親だったり兄弟だったり、恋人だったりすんだべさ。信じるものは救われるってのは、拠り所を見つけて精神的に救われるっていう話であって、けして信者だけが神様に救われるっつーことじゃねえべな」

うーん。オレみたいな信仰心の欠片も無いような人間には、よく分からん話だな。……心の拠り所、か。

「救われたいから善行を行うなんてのも、変な話だ。みんな、神様なんかよりもまず、もっと周りの人間を信じるべきだべ」

「それは、そうかもしれないが……。本当に神がいようと、世に理不尽が無くなるワケではありませんし……」

いつになく饒舌に語るアンナの言葉に、ヘンリーは一瞬だけ眉根を寄せて何か考える様子を見せる。ていうか、アンナのヤツ、そんなこと考えてるのか。その能力といい、12歳の女の子とは思えないなあ……。

……そういえば、アンナの受け継いだく石の主は、元は王都の偉い聖職者だとか、フェンから聞いたことがあるような。その知識が、彼女の思考に影響を与えているのかもしれない。

「いざという時、神様よりよっぽど助けになってくれるはずだし、

みんなが信じあえばもつと幸せになれると思うんだけどなあ……」

アンナは、うーんと唸って腕を組み、首を傾げる。

「オラみたいのがいつまでも教会にいるのも、悪いのかもしれないけども……」

最後に、教会から「聖女」と呼ばれる少女はそう呟いた。

アレ以降、モンスターやゾンビの姿は見られず、探索は順調に進んでいった。今のところ遺物や金目のものはまるで見当たらなかったが……。しばらくして、辺りが人工的な遺跡から、自然によって作り出された洞窟といった様相になり、そいつが目の前に現れた。

「……これは、なかなか壮観な眺めだな」

立ち止まった前衛組にオレたちが追いつくと、テイルが感慨深げにそう言う。たしかに、こんな景色はなかなか見れないだろうな……。遺跡内の湿気の原因は、コイツか。

「姉さん、皆の前で裸にならないでよ。絶対に」

「……む？」

鎧に手を掛けたテイルの腕を掴むヌーク。……コイツの弟やるのも、大変だな。それを見て苦笑しながら、ヴィーが呟く。

「あー、でも水浴びしてえな……」

「だどもこんだけ広いとモンスターがいるかもしれねえだよ」

「心配ありませんよ、アンナ。僕とヴィーさんがいれば、気配は察知できますし」

ヴィーの発言を心配するアンナ。そこにフェンが声を掛ける。たしかに二人がいれば、あまり心配はないだろうけれどな。ジャックスもいるし……。テイルは、一瞬オレの顔を見たあとに、よし、と頷いて皆へ振り返る。

「周囲の索敵を済ませたら、ここでしばらく休憩しよう」

ということ、そこにあった巨大な地底湖の畔で、オレたちは一旦休憩することにした。あー、完全に気を遣わせちゃってるなあ……。...

31. 地底湖の畔にて

薄暗い地底の底で発見した巨大な地底湖を前にして、オレたちは簡単な食事を摂っていた。

まあ、探索に持ち込める食料なんてたかがしれてるし、日持ちのしないものは昨日の夕食に食べ切ってしまったが、それでも葡萄酒や蒸留酒とがあれば、一瞬だけでも疲れを忘れることができる。酒の飲めない年齢のアナには悪いんだけど。

「へえ。それじゃお前ら、姫さんの言ってたような性質の悪いヤツらとは別口……だったのか？」

「……よくもまあ、そんなことを本人たちを目の前にして言えるよな……」

酒が入って口が軽くなったのか、派閥の内情を話してくれたティルたちに、オレは言う。それに対して、ギーグが顔を歪めて不快そうな表情を見せる。

「我々の長が変わって以降、派閥内の雰囲気が変わってしまってたな。それまでは、そう悪くない組織だったんだが……。私たちは、それに反対するためギルド内の地位を上げようとしているんだ。派閥内での発言力は、ギルド内での地位と比例するからな」

ティルの言葉に、オレはなるほど、と思う。

「同じ探索者から、成果である遺物を買収取るのに、そんな理由があったとはね……。となると、あの大会に出てたのも……」

「まあ、地位向上活動の一環……といったところだな」

テイルはそう言って、肩をすくめる。……そういうことだったとは露知らず、こないだの武術大会ではやり過ぎちまった気がするなあ。まあ、向こうもオレを殺そうとしてたし、お相子だとは思うんだけど。

「そりゃ、悪いことをしちゃったな」

「全くだぜ。あの醜態を晒しちゃったせいで、オレの派閥内での地位は底辺まで落ちたと言っても過言じゃねえ」

「それは仕方ないぞ、ギーク。確かに優勝できれば、賛同者を募って派閥内の勢力図を変えることは出来たかも知れないが……私は元々、分の悪い賭けだと言っていた筈だろう？」

「ちっ、わかってるっての……」

なるほど。一言に性質の悪い巨大派閥と言っても、内情は色々あるんだな。ていうか、ギークがそんな殊勝な考え方の持ち主だったとは、意外すぎるな。

「まあまあ、元々の派閥長は、ギークさんのお兄さんでしたからね。変わってしまった組織を思っ、気持ち先走ってしまったのでしょうし……」

「うっせえよ、ヌーク。オレはただ、本来就くべきだった長の座に登り詰めたいただけだ。あんのバカ兄貴、よりにもよってあんなクソ野郎を後継者に据えるなんてな……」

「仕方あるまい。今の派閥長は、前派閥長の義兄上だったのだろう？」

「……兄貴の後を追うように病気で死んだ義姉貴は、良い人だったんだがなあ」

うわあ、複雑……。派閥内事情っていうか、家庭内事情っていう

か……凄く面倒な話を聞いてしまったなあ。テイルは、こっちのそんな心境を知ってか知らずか、佇まいを正してオレを見る。……なんだよ？

「というわけで、遺物が出たら安く譲ってもらえるとありがたい」

「……お前、そのためにこんな話したのか？」

「うむ。最近、遺物を買ひ漁りすぎて、あまり金銭的に余裕が無いのでな」

「姉さん、それじゃ正直すぎるよ……」

道理で、派閥の内情をスラスラと語ってくれるワケだぜ。オレはハア、とため息をつく。その視界の端に、地底湖がうつすら波打つのが見えた……ような気がする。

「……………ん？」

……なんか、盛大に嫌な予感がする。こう、ピリピリと、自分の中から警告を発する声が聞こえるというか。十数年ぶりに気を察知できなくなった、不安感からくるもの……だろうか？

「？ どうしたんですか、師匠？」

「いや……気のせいだと思うんだが。お前は、なにも感じないんだな？」

気を察知できないオレは、フェンとヴィーとに索敵を任せきってしまっている。そのオレの言葉に、フェンはきよとした顔をして答える。

「え、ええ。モンスターの気配も、不審な気も感じませんが……」
「アタシもだ。何も感じねーよ……」

オレは、対面に座るフェンとヴィーから視線を外し、テイルの横に座る男に視線を向ける。ジャックスは、蒸留酒の入ったボトルを片手に、焚き火をじっと見つめている。

「ジャックス、お前はどうか？ お前も、気を読めるんだろ？」
「……気？」

オレがジャックスに質問を振ると、隣のテイルが首を傾げる。

「簡単に言えば、人間やモンスターなんかが持つてる生命力とか、気配のことだよ。オレとフェン、ヴィーは、その気配を察知することができるんだ。……そしてジャックス、お前もな」

「……………」
「お前ら、これまでも、コイツのお陰で何度か危機を回避してきたんじゃないのか？」

「そ、そう言われてみりゃあ……」

ギーグが、なにか思い出したように呟く。恐らくジャックスは、かつてのオレのように、仲間たちの危機を察知しては、それとなくソレを回避するように仕向けていたのだろう。ギルドで調べれば、オレと同じように、組んだパーティの死亡率がかなり低い数字になっているハズだ。

「そうなのか？ ジャックス……」

テイルの質問に顔を上げたジャックスは、呟くように言う。

「……俺も、ソイツらと同じだ。何も気配は感じない。ただ……」
「ただ……？」

「ここは静か過ぎる、と思う」

その言葉に、オレはハツとする。ハルマツゾから受け継いだ知識と、現在の状況が重なった。急いで立ち上がり、なけなしの魔力で湖面に照明魔術を放つ。パパパッと、一瞬だけ周囲が明るく照らされる。

「……お前ら、ゆっくり後ろに下がれ」

オレが言い終わる前に、術師以外の人間が立ち上がっていた。術師組は状況を理解しておらず呆けていたが、アンナとヌークはそれぞれフェンとテイルに手を引かれてゆっくりと水辺から離れる。

「え？ え？ なにが起こったんです？」

「お前もだ、ヘンリー。さっさと立て」

たった一人、未だ焚き火のそばに一人茫然としているヘンリーの腕を掴んで立たせ、オレは言う。

「死にたくなかったら、走るぞ」

やがて、風も無いのに関わらず湖面が波打ち、ソレが姿を現した。存在そのものがあまりに無色透明で、気配の察知すら難しいモンスター。照らし出された湖底にあったのは、コイツが養分を吸い尽くしたと思われる人間やモンスターの死骸。

古代には多勢いたという気の使い手たちも、この気配の無い怪物は恐れていたほどだ。外敵もなく、地底でぬくぬくと育ったソレは、あまりに巨大で、まるで冗談のようだった。

「な、なんだありゃあ……?」

それを見て、ヴィーが呟く。そのあまりの脅威に、死霊術同様ハルマツゾの生きる時代に、絶滅させられたはずのコイツを、知らないのも無理はない。オレたちの方へ意外なほどのスピードで這いよってくるのは、古代にデススライムと呼ばれた、遺跡でも最凶のモンスターだった。

焚き火がソイツに飲み込まれて、ジュツと音を立てて消える。オレは、皆に向かって叫ぶ。

「……何も考えるな、走れ!!」

32. 真実の姿（一部改訂）

「ぜっ、ぜっ、ぜっ……ヴェ、ヴェルクさん、もう、ダメ」

「もう少し、頑張れヘンリー……こちらとら、まだ全身が痛えんだよ……ッ!!」

「や、っぱり……ヤセ我慢、だった、んですね……ッ？」

「うるせえ……ッ!!」

黙って走ってろ。しかし、コイツにもバレてたなんて、どれだけ酷い顔してたんだ、オレは。……こうして走ってる間にも気を失いそうなのは、流石に言えないけれどな。この魔剣、不良品なんじゃないのか!?

オレたちは、遺跡内を全速力で駆けていた。

水の流れと同じような速度で迫るソイツから逃れるのは、至難の業だった。地底湖そのものかと思うくらいの巨大なデススライム。遺跡の通路では、その全体像が全く掴めない。

死霊術によって、人間やモンスターの死体から得られた水分で作られ出されたハズのソレは、一体どれだけの数のソレを元に作り出されたのか……。少なくとも、あの地底湖の底はビッシリと死体で埋まっているのだろう。

死霊術によって生み出された魔物は、総じて日の光に弱い。遺跡の外まで逃げる事ができれば、こちらの勝ちなのだが……。

「うわっ……!?! ヴェルクさん!?!」

「くそったれ……ッ!!」

と、最初は巨大なソイツから地底湖まで来た道に戻るよう逃げ
ていたオレたちだが、どうやら横道もそちらへ繋がっていたらしく、
途中で二手に分かれていたらしいデススライムに、前方へ先回りさ
れてしまう。

「くっ、ヴェルク殿!!」

「ヴェルク!!」

「師匠!？」

先行していたテイルたちと、オレとヘンリーの間に、デススライ
ムの透明な巨体が現れる。咄嗟に壁の出っ張りを掴み、横にあった
小道へと進路を変える。いやていうか、誰かヘンリーの名前も呼ん
でやれよ……。

「お前ら、先に帰ってろ!!」

叫ぶ皆にそう言い返して、オレはヘンリーの手を引いて駆ける。
こんな時にも、これが女だったらなあ……とは思わなくもない。道
が狭くなったことで、後方から押し出されるデススライムの勢いは
増している。オレの背後を走るヘンリーに、その魔手が伸びる。

追いつかれる!! ……そう思った瞬間、デススライムの勢いが
落ちたように見えた。

「……ああ？」

……どういうことだ、くそっ。とにかく、行き止まりにはぶつか
ってくれるなよ……!! やがて、開けた場所に出る。向かってく
るように吹き抜ける風に、オレは照明魔術を放つ。しかし……。

「おいおいおいおい。マジかよ……」

そこにあつたのは、巨大な断崖絶壁。向こう岸にも、こちらと同じような通路が続いているということは、昔はここに橋か通路が存在していたんだろう。

確かに、行き止まりにはぶつかって思ったけどな、行き先が奈落の底じゃあ意味が無い。さきほどの地底湖といい、なんだってこんな巨大なもんがそうポンポンと地下に存在してんだよ……!!

……待てよ？

「ど、どうしましょう、ヴェルクさん」

「ちょっと、待ってろ……」

「ま、待ってろって……!？」

背後を見ると、開けた場所に出たことで勢いが弱まっているデススライムの姿。しかし、あと数十秒もすればオレたちに襲いかかれる位置にまでやってきてしまうだろう。かと言って、幅が10メートル以上ありそうな谷を越えて向こう岸に跳ぶのは、無謀すぎる。

「……ヘンリー」

「……え、なんですか？」

オレはあることを思いついてヘンリーの名前を呼び、その肩と腕を掴む。意味が分からない、といった表情のヘンリー。ああ、この表情を見ていると、いまいち確信が持てないな……。

「悪いな」

オレはそう言って、一瞬だけ魔剣の力を使い、強化された腕力でヘンリーの身体を向こう岸に思いっきりぶん投げた。途中、ガコンッというヘンリーの肩が外れる音がしたが、まあ、不可抗力だろう。無事に向こう岸に落ちたヘンリーは、痛がるでもなく、ぐったりとしている。どうやら気を失っているようだ。とりあえず、これで邪魔になることはない。

「……………つとと」

気力と体力が尽きている中で魔剣を使ったため、足元がフラつき尻餅をつく。……さて、これからが問題だな。さて、ヘンリーが意識を失っても変化が無い。ここからは、一か八かの賭けだが、どうなることやら。

オレは、座ったまま腕の力でデススライムの方へと振り向き、意識を集中させる。やがて見つける、一人の「気」……。今一度、残された精神力を振り絞って、魔剣へと意識を集中させる。もはや、自分の体の感覚すらも遮断して魔剣ハルマーの感覚のみに全てを集中する。

そんなオレの直前にまで、デススライムの巨体が迫る――。



「さてと、どうやら賭けには勝ったようだな……」

オレは、水浸しになった周囲を眺めながら言う。しかしソレは、デススライムの死によって溢れ出したものではなく、先日のゾンビたちの血液によるものだ。嫌な匂いと共に、黒い瘴気が辺りを漂っている。

しかし、あの時に見たゾンビたちより、その数は圧倒的に少ない。血が全く乾いていないところを見ると、あの時の最初の一群を殺した直後なのだろう。周囲には、オレ以外のパーティメンバーも倒れている。

オレは今まで、高度な魔術によって幻を見せられていた……ってわけだ。果たして、そんな真似をしてくれていたのは一体誰なのか。オレは、幻の中から現実の魔剣だけを操作して体を貫いた、その魔術師を見る。近くには、不思議な雰囲気短剣が転がっている。…なるほど、魔剣、ね。

「それにしても、お前だとは思ってなかったよ……なあ、ヌーク？」
「ぐ、ぐふ……ッ！ ど、どうして……!？」

……いや、魔剣使いの死霊術師、とでも言った方が正しいかな。あの死霊術に加え、魔剣を利用した幻術と、記憶の改変か。失われた秘術をあそこまで使いこなすとは、なかなかやるもんだが、ツメが甘かったな。魔剣のほうは、イマイチ使いこなせていなかったらしい。

先ほどまで閉じ込められていたのは、コイツが人の記憶を呼び出して作り出した幻の世界だ。しかし、そこには現実との齟齬がいくつ含まれていた。

「デススライムってのは、ハルマツゾ自身の手で、その製造法を含

めて完璧に絶滅させたハズだからな。そんな都合よく同じモンが作れるワケがねーんだよ。……そもそも、この場所にあるハズじゃあねえんだ、あの景色はな」

「ハルマツゾ……貴方が受け継いだ、＜石＞の主……ですか……。我が魔剣でも、流石に、そこまでは、読めません、でしたね……」

血を吐きながら、独白するヌーク。大体、地底湖のすぐ隣に、謎の大絶壁って、地理的にムリがあり過ぎる。アレは、オレの中に眠るハルマツゾの知識から作り出されたものだ。そう簡単に、ほいほいと拝めるもんじゃあない。それに――。

「ヘンリーに追いつきそうになったデススライムが、何故か速度を緩めたからな。オレはあの時、ヘンリーが術者なのだと思ったんだが……」

「はは、それは、失敗しました……。彼の死こそ、僕は願っていた、はずなのに……。やはり、彼女を、悲しませることは、できない、な……」

さきほどのデススライムの挙動も、現実に戻ったあとにヘンリーをハメるための罫かと思っただが、どうやらそうでは無いらしい。コイツの深層心理の中で、幻の中であってもヘンリーを殺せない理由があったのだ。それは恐らく……。

「お前、テイルの弟じゃねーだろ？　むしろ、ヘンリーこそが、アイツの弟なんじゃねーのか？」

たしかに、ヌークの雰囲気はどことなくヘンリーに通じるものがあるが、あの浮世離れたテイルの弟にしては、しっかりしすぎている気がした。同じく世間知らずそうなヘンリーのほうが、姉弟としてはしっくりくるのだ。……しかも今「姉さん」ではなく「彼女」

と呼んだ。顔を歪めて、コホコホと咳き込みながら、死霊術師は笑う。

「その通り、ですよ。まあ、彼女たちが……起きたら、その辺のことは、聞いて、ください」

そして、ヌークは目を瞑る。呼吸が、段々と浅くなっていくのと同時に、彼の全身を眩い光が覆う。……ヌークは、最後の術を行おうとしていた。彼の胸の位置に、水の属性を持つ人間特有の、青色の結晶が作られていく。

ヌークはそれを見つめながら、穏やかに笑っていた。

「……ああ、失敗したな、僕は、この場所を守るよう、言われてた……だけ、なのに……彼女の弟に、なりたくないなんて……変な……欲を……」

確かに、コイツの持っていた魔剣の記憶改変能力があれば、入れ替わりは可能だっただろう。テイルにヘンリーを他人と思い込ませ、己が弟として入れ替わる。それには、オレたちの記憶ごと改変する必要があったのだ。恐らく、最終的にはモンスターの襲撃によって「ヘンリー」だけが死に、この遺跡には何も無かったってことになるはずだったんだろう。昏倒させたあとに、すぐオレたちを殺していれば、この場所は守られただろうに。

ヌークは、結晶の放つ光から視線を上げて、オレと目を合わせる。

「ヴェルク、さん……お願いが、あり……ます」

「……金は貸せねーぞ」

彼が何を言おうとしているか薄々察しているオレが、そう軽口を返すと、ヌークは笑って……近くに倒れ込んでいるテイルを見つめる。

「これを……彼女、に。……きっと、僕が居なく、なって……こ、まる、だろう……か……ら」

そう言って事切れたヌークの肉体は光の粒となり、全てが結晶に吸い込まれていく。やがて、その光を全て吸収しつくしたその結晶は、青く、淡い光を発しながら、ゆっくりとしたスピードで地面へと向かう。オレは歩み寄り、手の平にその結晶を受け止め、呟く。

「……分かったよ、ヌーク」

これは、彼の＜石＞だ。彼が、最後に思い描いた者がコレを使えば、死霊術使い、水魔術使いとしての知識ばかりか、さきほどの魔剣の適正などを受け継ぐことができる。そして彼の想いも、少しだけ。

その美しい青色の結晶をしばらく見下ろしたあと、オレは「師匠、師匠……」と呟くフェンを叩き起こして後を任せ、通路の奥へと進んだ。

夢の中のように大量のゾンビ相手に戦ってすらいなかったオレは、肉体的、精神的にまるっきりの健康体だった。先ほどまでの疲労感が、まるで嘘のように消えている。……まあ、アレは嘘だったんだが。

「……まったく、こんなモンを勝手に作りやがって」

通路の先にある階段を暫く降りてそこで見たのは、遺跡を利用して作られたらしい、遙か遠くまで伸びる巨大な通路。一方は、街の方向へ続いている。そしてもう一方は……。

「帝国の、クソツタレめ……」

その通路に残る巨大な轍を見つめて、オレは思わず呟いた。

32. 真実の姿（一部改訂）（後書き）

2011. 07. 26 一部改訂

思い描いていたシーンを盛り込み忘れていました（汗

33. 哀しい笑顔

あのあと、オレたちは二手に分かれた。一方は、街の方向へ続く穴を調べる探索パーティ。一方は、来た道を帰って確実にギルドへと報告する帰還パーティだ。

前者は少人数編成で、オレ、ヴィー、テイルの三人。後者がフェン、アンナ、ギーグ、ジャックス、ヘンリーだ。こちらには回復術師がいないが、探索のスピードを優先した結果だった。

オレたち三人の探索パーティは、あの穴を街の方へと暫く進んだ。拍子抜けしたことに、特に罠らしいものも見つからず、ただただひたすらに真っ直ぐと進んでいくだけだった。そして、巨大な縦穴に出た。

上を見ると、光が差し込んでいる……。



あそこから繋がっていたのは、街の近くにある廃坑跡だった。そこからやはり、巨大な何かを運び出した形跡があったのだが、周囲に住む人々に聞いても、何の情報も得られず仕舞いだった。

「……これは、どーいうことなんだ？ あんだけ重いものを引き摺ったような跡があるっていうのに、誰も気付かないもんなのか？」
「簡単なことさ。……コイツだよ」

首を傾げて不思議がるヴィーに、オレは手に入れたばかりの短剣

を掲げて説明する。

「コイツがあれば、何か知られたくないものを隠すなんて簡単だ。……それこそ、いつぞやの帝国の暗殺者どもなんかもな」

「あ……、なるほど」

「相手に幻を見せ、記憶を改竄する能力、か……。その魔剣を持ち続けるのは、危険だな……」

オレの話を聞いて、ヴィーが頷き、テイルが呟く。確かに、これだけ驚異的な能力を持つ魔剣を失って、帝国のクソツタレどもが黙っているワケがない。

「ただ、その役割は十分に果たしただろうけどな……」

数十人の軍人を敵地に送り、なにか巨大な兵器と思しきものをも密かに搬入する。これだけの成果を上げるのに、魔剣一本で用を成すというのだから、驚異的だ。オレの傭兵時代にこんなことがあったら、不意打ちを受けて全滅もやむなし、だな……。

ちなみに探索当初、遺物が出ればテイルたちに売り渡すという約束だったが、この魔剣は、オレが預かることにした。そもそもあそこから発掘された遺物ではないし、ヌークの形見つてことになるのだが。

「ヌークを殺した剣、とも言えるからな。私たちには必要無い。……ヤツに貰ったく石>だけで、十分だよ」

素っ気無くそう言って、テイルはその所有権を破棄してしまった。ヌークとしては、テイルに持っていて欲しかっただろうに。

まあ、こういうのにも慣れてるし……オレの場合、万が一適正があっても魔力が足りないから悪用のしようもないしな。それに、喜んで回収してくれそうなヤツにも心当たりがある。あまり、会いたくねえけどな……。

「最近、面倒なことが多すぎるな……」

しかし一体、帝国のヤツらは、この王国に何を持ち込んだのか……？

◇

「……ここで少し、待ってくれないか」

これ以上の情報収集を諦めて、帰還することになると、テイルがそんなことを言って茂みの中へと入って行く。しばらくして、慎重しやかな花束を片手に持って戻ってきた。それを、廃坑の入り口へと投げ入れる。地下の暗闇へと消えていく、白い花束。

「せめて、穏やかに眠れよ。……馬鹿ヌーク」

普段どおりの口調でそう言うテイルの背中からは、まるで泣いているように見えた。しばらくの間動こうとしなかった彼女の後姿を、オレとヴィーは黙って見つめていた……。

◇

オレたちはそこから帰還し、起こった出来事と調査した内容の全てをギルドに報告した。ゴード爺さんは流石に驚いた様子を見せ、すぐに王都への連絡を入れると言ってくれた。帝国の物と思われる魔剣を、あのティアに見せるのは流石にまずかうとそのまま退散し、ギルドの建物外に出ると、周囲は既に暗くなっていた。

そこで、皆に彼の……ヌークの話を聞いてほしいと、テイルとヘンリーとが提案してきた。自分たちには、それをする義務があると言って。確かにこのままでは、全ての人間にとって、ヌークは売国奴の犯罪者として記憶されてしまうだろう。

オレは、彼の最期の表情を思い出し、その提案に乗った。結局、ヌークを欠いたパーティメンバー全員が、オレの行き着けの酒場に集まることになったのだった。

「ヌークには、姉がいたんです……」

最初にそう切り出したヘンリーの肩をポンと叩いて、テイルが続ける。

「ヌークと彼女は、腹違いだね。ヌークの姉……スザンナの母は、帝国人の血を引いていたんだ。スザンナが生まれたときに彼女が死んで、父親は別の女性と再婚してヌークが生まれた。家の近かった私たちは、すぐに仲良くなってな」

そう言っ、懐かしむように虚空を見つめるテイル。

「最初は良かったんだが、戦争が全てを変えてしまった。……スザンナは、帝国の血を引く娘ということで迫害を受けてな」

「僕たちも、必死に彼女を守ろうとしたんですけど……」

「力の無い子供には、どうすることもできなかった。彼女はそんな私たちを見て、泣きそうな顔をしながら、笑っていたよ……」

二人の話を聞いて、周囲が静まり返る。ヴィー、アンナ、フェンの三人は、辛そうに眉根を寄せる。その頃の世間の様子を知っているであろうギーグは、うーむ……と唸る。

「当時は、そんな差別も珍しくなかったからな……」

「彼らの家は裕福では無かったものの、由緒ある家柄だったのでな。余計に周囲からの当たりが強かったんだろう。そんなこと、やはり子供だった私たちには、よく分からなかったが……」

テイルがそこで言葉を切ると、今度はヘンリーが口を開く。

「結局スザナ姉さんは、自らその命を絶ってしまったんです。誰にも分け隔てなく、優しい、僕たちにとっても本当の姉のような存在だったんですが……」

「王国の人間たちによる、愛する姉への理不尽な迫害。それが、ヌークが帝国へと傾倒することになった切っ掛け、か……」

自身には、その血は流れていないというのに。皮肉なもんだな。

「彼女が亡くなってからはテイル姉さんが、急に姉として振舞うようになったっけ。それまでずっと、僕たちと同じ、彼女の弟妹、だったのに」

ヘンリーの話に、テイルは肩をすくめ、笑う。どこか遠い日々を思い出すような口調で、答える。

「子供心に、彼女の代わりを務めなくては、と必死だったんだ」

「ヌークは本当に、テイルを彼女の代わりに、とっていたんだろ
うな……」

オレの言葉に、ヘンリーは頷く。

「ええ。それには僕の存在が邪魔だったんでしょね。僕たち、連れ子同士で血は繋がってませんから。そういう意味でも、成り代わることは大して難しく無かったと思います」

ギーグといいコイツらといい、どこもかしこも複雑なんだな……。

「……悲しい話だべ」

「そうですね、アンナ……」

それを聞いたアンナが、マスクの下でグズグズと鼻を吸る。フェンが、そんな彼女にそっと寄り添う。今の話じゃないが、アンナと、中性的な容姿のフェンの二人がそうしていると、まるで本当の姉妹のように見える。

しかし、当のテイルは首を横に振って見せた。

「そうでもない」

彼女は、自分の手の平を見つめながら言う。そこには既に、く石くを受け継いだ者特有の刻印が刻まれている。

「ヌークが私たち二人を家族だと思っていてくれたのは、本当だ」

たしかにアイツは、幻の中でヘンリーを殺せなかった。本当に死んで欲しいと思っていたなら、容易く出来ただろうに。あの、数瞬の中で見せられた幻の中でさえ、彼は躊躇ったのだ。

「それが分かっただけで、十分だよ」

そう言いながら、テイルはどこか哀しそうに微笑んだ。それが、彼女たちが子供の時に見たという、スザンナの笑みだったのだろうか……。

33. 哀しい笑顔（後書き）

2011. 08. 14 ご指摘いただいた部分を修正

34. 王都へ

「うっわぁー!!　すごいべすごいべ、人があんなに沢山いるべ!!
見るだよ、フェン!!」

「はいはい。見ていますよ、アンナ」

馬車が王都の門を潜るなり、向かい側の席についていたアンナが、子供のように……いや、実際子供なんだが……はしゃいでいた。それを、まるで本当の兄……見た目は姉のように見えなくても……のように優しく見つめるフェン。

フェンの視線は、まるで本当の親兄弟のような、真の愛情に満ち満ちているような気がする。まあ、片方が子供だからっつーのもあるんだろうが、不思議なヤツらだよなあ。まさか本当に、この二人も兄妹だったりするんだろうか？

ヴィーは国王の妹で、姫さんには行方不明の兄が、ギーグにはギルドの派閥内で対立する義兄がいて、テイルとヘンリーは血の繋がらない義姉弟。最近、周囲の人間関係が複雑で、疑心暗鬼に陥ってしまってるだけなのか……二人そろって金髪碧眼と、見た目もどことなく似ているような気もするけど。

「わぁ、風が気持ちいいべ。ヴェルクには感謝しなっきゃなんねーだな」

「いらねーよ。その代わり、オレが怪我した時は頼むぜ」

「えっへっへ。そんなのお安い御用だべさ」

実は現在、アンナはあのマスクとフードとを外した状態で、そばかすが残り、垢抜けてなくて少女らしい顔を露にしていたりする。

アンナが探索で使っていた保護魔術を、オレの中で眠っているハルマツゾの知識を使って改良し、宝石や、その成分を含む鉱物類などの影響からも身を守れるようにしたのだった。本来、探索中は常時かけ続けている消費魔力の少ない魔術だったし、眠る時にさえ対象の鉱物類に気をつけていれば、以降は素顔で自由に歩きまわれるだろう。

まあ、ハルマツゾの知識を本格的に利用する一環だったが、上手くいったようで何よりだった。なんだか、アンナよりもフェンの方が嬉しそうにしている、オレに対する敬意の念が一層深まってしまった気がする。その視線に込められる期待ってのが、少々重い。オレは、そんな偉い人間じゃねえぞ……。

とにかく、どうやら「アレ」の実用性も期待できそうだ。

「……? なに、人のことジロジロ見てるだ?」

オレは一言そう言つて、馬車の窓から外を見る。確かに、王都は人で賑わつていた。これも恐らく、武術大会の影響だろう。かつて、まだ傭兵だったころにココへは来たことがあるが、流石にここまで賑わつてはいなかった。……兵士だけは、たくさんいたが。

と、今度はアンナが、オレの方をジーツと見ている。正確には、オレの肩の方を、だが。

「……どうした？」

「いやあ、よく寝てるだなあ……」と思つて

「子子子……」

最初は張り切っていたヴィーだったが、3日間の長旅に疲れたのか、今はオレの肩に頭を乗せて寝入っていた。それを、微笑ましそうに見ているアンナとフェン。……くっ、言いたい事があるなら、言ってくれ。なんか言われるのも癪だが、そうしてられるのも微妙な気分だ。

「……あ、そろそろ着きますよ」

やがてフェンがそう言って、オレたちの乗った馬車は停留所のある広場へと入っていく。



広場で馬車から降りたオレたちは、とりあえず自前の荷物を降ろして宿へ向かうことにした。本当は、この王都までの道程にはもつと時間がかかると思っていたのだが、オレの知る頃と比べて、街と王都とを繋ぐ街道は遥かに整備されており、意外に早く辿りついてしまった。

ちなみにヴィーは、アンナに起こされてオレの肩に寄りかかっていたことに気付くと、顔を赤くして恥ずかしがっていた。疲れていたのだろうし、仕方ないと思うんだが。……ま、一応フォローしてくか。

「なに恥ずかしがってるんだ？ 別に、年相応に可愛らしい寝顔だったぞ？」

「かつ……！？」 馬鹿っ、なに言ってやがる！？」

「なについて、思ったままのことだが……つかソコのお前ら、その顔やめてくれないか」

オレとヴィーのやりとりを、またしても暖かい視線で見守る二人に、ついついそんなことを言ってしまう。だがしかし、アンナはオレのその言葉に対して、より一層ニコニコとした笑みを向けてくる。

「仲の良いことは、良いことだべ」

「くっ、言ってる。とにかく宿へ向かうぞ、フェン」

「はい、師匠。テイルさんに紹介していただいた宿は、こちらの方向ですね」

王都に住んでいたことがあるというフェンの言葉に従って、オレたちは歩く。先日共に探索したテイルが気を利かせ、武術大会本選へ進むオレに、彼女の知り合いが経営しているという宿を紹介してくれたのだ。彼女曰く、ヌークの死という業を背負わせてしまった侘びだということだった。

「本当に、凄い人ごみだな」

「そうですね。僕も、ここまで賑わう王都を見るのは初めてですよ」

馬車の中からも見えていたが、王都の大通りは途轍もない数の人々で賑わっていて、フェンはアンナがはぐれないように、その手をしっかりと握っていた。……ヴィーが、それをじーっと見ていることに気付く。オレはそんなヴィーを見て、冗談を言う。

「なんだ？ オレたちも、手繋ぐか？」

しかしヴィーは、一瞬驚いた顔をしたあと、顔を赤くして頷いた。

「……うん」

オレの思考が、一瞬ストップする。……え？ マジで言ってるのか？ いや、言い出したのはオレなんだけど。混乱しながらヴィーを見ると、こちら側の右手を、ほんの少しだけ持ち上げているのが分かる。……ま、減るもんじゃなし、良いか。

そう一人で結論付けると、オレはその手を左手で握る。ヴィーは、オレが触れると一瞬ビクツとしたあと、弱い力で握り返してきた。ふと振り向いたフェンがソレに気付いたようだったが、何も言わずに案内を続ける。……なんか、変な気を遣われた気がしたが、気のせいだろうか？

普段から重い大剣を握るその手は、普通の女の子のソレと比べてけて柔らかいものではなかったが……とても暖かった。それがとてもヴィーらしくて、オレは思わず微笑んでしまう。それを見て、ヴィーが赤いままの頬を膨らませて、言う。

「いい年して子供っぽいって、思っただろ」

「はは。今回はハズレだな」

「なんだよソレ……って待てよ。じゃあ、いつのは当たってたんだ？」

「……それは秘密だ」

オレたちはそんな他愛も無い会話をしながら、手を繋いで、群集の中をゆっくりと歩く。……やがて、目標の建物が見えてきた。



「本当に、この宿がそうなのか……？　ていうか、ホントに宿なのか、コレ」

「ええ……聞いていたのは、ココで間違いないようですが……」

「はああ、立派な宿だね……」

玄関から中へ入って目にした光景に、オレは思わず尋ねてしまう。そこはとても広大な空間で、今いる一階から最上階までが巨大な吹き抜けで繋がっている。周囲には多様な花や観葉植物が置かれ、その空間の中央には、室内でありながら噴水まである始末だ。

先ほど見た外観も「宿」と言うより、ほとんど「城」といった様相だった。……昔は、こんな立派なもんは流石に無かったぞ。フェンも知らないようだから、最近出来たのだろうか？

「……へえ、凄えな」

驚いて立ちすくんでいるオレたちを他所に、ヴィーがすたすたと受付へと進んでいく……と、誰もついてこないことに気付いて振り返る。ちなみに人ごみを抜けた今、もう誰も手は繋いでいない。

「あれ？　どーしたんだ、みんな」

「いや、どうしたってお前……コレ見て、驚かねえのかよ」

むしろオレは、その素っ気無い態度に驚くぞ。ヴィーは、そんな質問に対して、ああ……と頷く。

「シルヴィと一緒にいたら、こんなんばっかだからなあ……」
「……貴族ってのは、一体どうなってんだ」

万年金欠気味のオレには、姫さんの生活がまるで想像出来ない。あの屋敷ですら、オレからすれば桁違いの豪華さなのに……。と、とにかく行きましよう、と言って、フェンが受付に立つ女性へと歩み寄る。その女性は、フェンへ向かって深く腰を折ってお辞儀する。

「いらっしやいませ」

「すみません。僕たち、探索者のテイルさんにこちらを紹介されて来たんですが……」

「はい、伺っております。少々、お待ちくださいませ」

女性はそう言って、遠距離伝信魔術を施された遺物を取り出して耳に当てると、その相手と話し始める。

「……受付です。例のお客様方がいらっしやいました。……はい……はい」

たしかアレ、オレたちの街でなら中古の家を一軒買えるくらいのシロモノだが……遺跡で発掘されたものって、こういうところで使われてるんだな。いや、知ってはいたけど、こうして見たのは初めてかもしれない。姫さんのところでも見なかったしなあ。アレを模写した使い捨ての札なら、傭兵時代に何度か見かけたが……。

フェンの後方でブーツとそんなことを考えていると、不意に背後から殺気を感じて反射的に振り向く。オレの間合いの外に、一人の男が立っていた。

「流石ですね。少し殺気を飛ばしただけで、その反応。感嘆に値しますよ」

「……お前かよ」

そこにいたのは、銀髪の色男。元・聖貴士団、団長のジュールだった。見ると、どうやらオレが斬り飛ばした右腕は無事にくっついたようだ。

……と、隣にいたヴィーが、オレの様子に気付いて振り向く。それに対し、ジュールは目を合わせぬように深々とお辞儀をする。この国では、王族と話す際には目を合わせることを禁じられている。本当なら、この場で跪く必要すらあった。

「あれ、アンタ……たしか武術大会の決勝でヴェルクに負けた、魔剣使いの……」

「ジュールと申します。初めまして、ヴィー様」

「？ ……アタシのコト知ってるのか？」

「勿論でございます」

戸惑うヴィーと、それに目を合わせず、にっこりと微笑むジュール。オレは、そのやり取りを聞きながら、内心舌打ちをする。ヴィーは、まだ自分が王位継承権を持った前王の後継者だということを知らないのだ。未だに、自身を守るために遣わされた騎士が、己の父だと信じている。

以前の戦いは、悲しすぎるその事実をコイツに知られないようにするためのものだったのだが……。もしジュールがこの場でそれらを明かしてしまったら、全てが水の泡だ。

ヴィーにとっていずれ知らなければならぬ事実だったとしても、帝国との間が穏やかならぬ今の時期に、コイツがそういった事態に巻き込まれるのは避けない。無鉄砲なコイツは、全ての責任を背負って前線へ突撃しかねないからな……。

「おい、ジュール……」

「分かっていますよ、探索者ヴェルク。今日は、挨拶だけにしておきましょう。……それでは、失礼いたします」

ジュールは、無言の殺気を己一人に向けて飛ばすオレに向かってそう言うのと、身を翻す。その際、一瞬だけヴィーの顔を直視して。ヴィーは、去っていくその背中を見送ったあと、首を傾げる。

「なんだったんだ、あの男……。ヴェルク、なんか知ってんのか？」
「さあて……。ね。案外、お前にホレてんじゃねえか？」

その質問に肩をすくめて、答えを曖昧に誤魔化す。それに対して、顔を赤くして怒りの表情を見せるヴィー。

「……アレ、もしかして脈ありか？　しかし、アイツはあんまりオススメできねえぞ」

「ばっ、馬鹿言ってるじゃねーよ！！　大体、アタシはヴェルクが……」

「ん？　オレが、なんだって？」

「……ッ！　し、知るか馬鹿！！　朴念仁！！」

そんなに、人のことを馬鹿馬鹿言うなよ。しかし……大会に出場する残り11人の魔剣使い、か。覚悟しちゃあいたが、なかなか大変なことになりそうだ……。

35. 宿泊

「やあやあやあ！　いらっしやいませ、ヴェルクさん！　いやあ、お噂に違わぬオーラが出ておりますな」

「あ……いや、僕はそのヴェルクの弟子で、フェンと言います。師匠は、あちらです」

丸々太ったチョビ髭のオッサンがいきなりやってきたかと思えば、フェンの手を握ってブンブンと振り回す。フェンがそれに戸惑いながら訂正を入れると、そのオッサンもまた戸惑った表情でオレへと視線を向けた。

「ああ、こりゃ失敬！！　……なるほど、こちらの方がそうでしたか」

オッサンはオレをしばし眺めた後、少し残念そうな表情で呟く。

……なんだよ、失礼なヤツだな。

「アンタ、誰なんだ？」

「ああっと失礼、申し遅れました。私、ここの経営者で、名をマルクと申します。テイルとヘンリーは、私の姪っ子甥っ子にあたりましてね、貴方がたのことは手紙で聞いておりますよ」

「……はあ。あの二人、凄いお金持ちの子だっただな」

そうアンナが言うと、マルクは「滅相もございません」と言って笑った。……いやいや、十分に金持ちだろ、これは。これで金持ちじゃないだなんて言ったら、この世から「金持ち」という概念が消えてなくなるぞ。

オレたちはそのまま、今回宿泊する部屋へと案内して貰うことになった。

途中、昇降機に乗って連れて行かれたのは、最上階。昇降機自体は、階層の深い遺跡などを繰り返し探索するために設置されることがあるので、オレたちにとって珍しいものではないが……。しかし建物の中にあるのは初めてだな。しかも最上階って、かなり良い部屋なんじゃないのか？ 本当に、タダで泊まれるんだろうな……？

「うわぁ。フエン、こっちに来るべー！」

その部屋に入るなり、そう言って駆け出すアンナ。向かう先は、部屋の外に置かれたバルコニーだ。ニコニコするマルクを筆頭に、オレたちも後へ続く。部屋の中も、すげえ豪華だ。かといって、調度品に成金趣味的な嫌味がない。このオッサン、意外と良いセンスしてやがる。

「これは、すげえな……」

姫さんの付き添いで、こういったところには慣れていると言っていたヴィーも、その景色には絶句していた。……確かに、凄い。王都の南側に広がる街並みが一望できる絶景だ。丁度、夕日が沈みかけていて、その光に家々が照らされている。

「建設には苦労しましたがね。まあ、こんな景色が望めるのは、ウチが王城くらいのものでしょうか」

「よく、許可が下りたな」

たしか、王都に建物を造る際には、王城の半分以下の高さ限定

されるなんて話を聞いたことがある。しかしこの宿、どう考えても王城並みの高さを誇っているように感じるのだが……。

「そこは、陛下に直接許可を頂きました」

「国王に直接、か？ 一体、どうやって？」

「こう見えて私も元騎士でして、ちょっとした伝手が。……まあ、王城側に窓を設けないことと、非常時には拠点となることが条件だったんですね」

でっぴりとした腹を撫でながら、恥ずかしそうに言うマルク。いや、テイルも元騎士だと言うし、あながち嘘だとは思わないが……まるで想像できんな。

しかし「非常時」ってことは、国王は、かねてよりこの王都が戦場になることを考えているってことか。……いや、それも決して有り得ない話じゃ無いのか。オレは、先日見たあの地下通路を思い出す。

結局、あの後に王都から派遣されてきた騎士団によって帝国方面の通路探索が行われたが、その途中で落盤が起こり、道は完全に閉ざされてしまった。

話によると、どうやら魔術を使ったトラップが仕掛けられていたらしく、帝国の人間以外がそちらへ進もうとすると発動するようになっていたのだろう、とのことだった。今も、あの場所は厳重に監視されている。

……あそこから運び込まれた物は、未だに見つかっていない。

ちなみに、あの時に手に入れた魔剣は、無事にマリアへと届けた。

というより、ギルドに報告した翌日にはウチに現れたんだが。恐らく、例の報告書に記されていた諜報員が、まだ活動しているんだろうな……。ご苦労なことだ。

「こちら、二人部屋になりますので、もう一部屋ご用意させていた
だいております。こちらへどうぞ」

そう言って、マルクは先を歩き始める。いや、あの部屋に4人でも十分だと思うんだが……。まあ一応、男と女に分けたほうが良いか。そろそろと、マルクについて歩くオレたち。

「それにしても、あんな部屋を……良いのですか？」

そこへ案内されている途中、フェンがマルクに尋ねる。確かに、いくら経営者の姪であるテイルの紹介とは言え、こんな豪華な部屋にタダで泊まれるというのは、腑に落ちない。かつてマリアに騙されたオレは、ウマイ話に飛びついた後のことをネガティブに考えてしまう。

「ええ。滅多に頼みごとをしない姪っ子だったの願いですし、それに……陛下からも、お達しがありましてね。今大会の優勝候補に最高の部屋を……と」

「……………はい？」

今、何て言った……？ 国王が、ヴィーの兄ちゃんが、オレたちにあの部屋を？

「いや、私も驚いたものです。テイルの手紙の書かれていた人物が、まさかそのような凄い方だったなんて！ いっそのこと、あの子の婿にと思い……ああ、いやいや……それでは、こちらの部屋へどう

ぞ」

以降のオレの足取りが、一気に重くなったことは……言うまでもない。



部屋の案内が終わり、どうにかマルクが去った後、何故か部屋割りの話になった。

「んなもん……オレとフェンの男同士、ヴィーとアンナの女同士で決まりじゃねーか」

「却下だべ。オラとフェンは同じ部屋じゃないとダメだべさ」

「なんでだよ？ ……おいフェン、まさか！？」

「師匠が何を考えているか知りませんが、その想像は外れていると思いますよ」

結局、理由は有耶無耶にされたままだったが、最終的には多数決という民主的な手段を用いて決議された。……結果は、言うまでもない。いつぞやの遺跡での出来事のように、オレはいつも貧乏くじを引かされる運命にあるのだった。しかも……。

「ヴィー、この場面でお前まで裏切るなんてな……」

「べ、べつに良いだろ！！ それとも、アタシと……その、同じ部屋なのは、嫌か？」

「いや……オレは別に、構わねえんだが……」

そういう問題でも無いような気がする。どこことなく、フェンもホ

ッとしているような雰囲気だったし、絶対になにかあるな、コレは……。

んなワケで、本選が終わるまでの間、オレとヴィーは同じ部屋で過ごすことになってしまった。……って本当にどんなワケなんだよ、まったく。まあ、ヴィーとは最近何度か同じ部屋で寝てるって言えば寝てるのだし、長年の付き合いがあるから気が楽ではあるんだけど。

「とりあえず、もう寝ようぜ。ヴィーも疲れてるだろう？」

さっきもぐっすりだったもんなあ……って、なんだよヴィー。その複雑そうな表情。ホラ見ろよ、すげえ上質なベッドだぞ、コレ。良く眠れそうだ。

35. 宿泊（後書き）

NEWVELに登録してみました。よろしければ投票ください。
……次回、ようやく本選開始です。今しばらくお待ちください。

36. 東方の剣

「お久しぶりですわ」

大会前日。そう言って意外な人物がオレたちの部屋を訪ねてきた。……と言っても、以前のようにマリアがやってきたワケじゃ無い。流石にそれでは、悪夢の再来、いや再々来だ。まあ、美人には違いないが、こちらはどちらかというと「美少女」……だな。と、奥の部屋から、ラフな格好をしたヴィーが顔を出す。……ああ、面倒なことになった気がする。

「ヴェルク、一体誰だった……って、シルヴィー!？」

「あらあらまあまあ……いつの間に、お二人はそんな仲に?」

「えっ、そ……、ち違……ッ!？」

「……落ち着け、ヴィー」

部屋に訪問するなりそんなことを言うのは、オレやヴィーにとってはお馴染みの顔。姫さんこと、シルヴィア・ステイナーゼだ。確かに、王都へ里帰りしているなんて話は聞いていたが、わざわざ向こうから尋ねてくるとは思わなかった。とはいえ、こちらから姫さんの実家に行くのも気が引けるんだが。ヴィーと違って、オレはそこまで親しいワケじゃあ無いし……。金払いの良い探索主催者としての彼女には、色々と世話にはなっているけど。

そもそも姫さんほどの情報網を持つ人間が、オレとヴィーが同じ部屋に泊まっていることを知らないワケが無い……と思ったら、やはり案の定。慌てるヴィーと、うんざりしているオレを見て、姫さんはクスクスと笑っていた。くそっ、人の悪いヤツだ。

「とりあえず、入ってくれ」

「ふふふ……。ええ、そうさせていただきますわ」

「あ……アタシ、アンナとフェンを呼んでくる！」

ヴィーが慌てた様子でドタドタと去っていくと、姫さんはそれを微笑ましい、といった表情で見送る。

「ああ、可愛らしい。まるで、お二人の将来の姿を見ているようですわね」

「あのなあ、姫さん……オレは別になんもしてねーぞ」

「それはそれで、問題アリですわね」

「……はあ？」

その後は結局、久しぶりにそろった「例のパーティ」メンバー全員で、わいわいと過ごすことになった。と言っても、終始騒いでたのは女どもだったけれど。姦しい、とは良く言ったものだ。しかし、これが街での再会ならナターシャントコのベリーパイの約束も済ませられたんだがなあ。あの約束をしてから、もう結構経つんだよね……。



そして、大会当日。

王都に作られた巨大な闘技場。街のソレとは比べ物にならないくらい巨大なその円形の建造物には、また比べ物にならないくらい多くの観客が入っていた。ここからでは確認できないが、このどこかにヴィーたちが座っているはずだ。……しかし、これだけ人が集まると

凄い眺めだな。

その闘技場の中央部には四角形の大きな窪みがあり、その大きな正方形の空間を巨大な壁で9つに分断していた。そのうち中央部を除いた8つの空間に、2人ずつの人間が立っている。その一つで、オレは一回戦の対戦相手と相対していた。

漆黒の長髪を風にたなびかせる、壮年の男。ジュールのように鎧を纏ってはおらず、それでなお歴戦の戦士といった風格のある人物だった。その男が、口を開く。

「我は聖貴士13の剣が一人、ガロと申す」

本来、辺りはその声援で埋め尽くされているはずだが、ここでは魔術によって周囲からの影響が抑えられている。お陰で、こうして相手の声がよく聞こえる。ジュールと言いコイツといい、やはり貴士としての礼儀なのだろう。相手からの自己紹介に、こちらも応える。

「探索者のヴェルクだ」

「ヴェルク殿、いざ尋常に……」

そう言って左足を半歩引き、腰に提げた魔剣の柄に手をやるガロ。鎧も着ず、どこまでも軽装なその姿は、オレのソレに近いものがある。相手の「気」が、文字通り、研ぎ澄まされていくのが判る。…そして次の瞬間。

「勝負ッ!!」

相手は「加速」の能力によってオレの目前まで一気に迫り、居合

い抜きの要領で斬撃を放った。踏み込みの速さはジュールや、あのラフィって女貴士ほどじゃないが、鞘から撃ち出された切っ先のス皮ードは、二人のソレを大きく上回っている。が、その「気」は非常に掴み易く、防御することは容易かった。オレは、腕に仕込んだ魔剣を咄嗟に反応させ、高速の打ち込みを魔剣で受け止める。

しかし――。

「な……ッ!？」

「我が太刀シンカイに、斬れぬもの無し!!」

オレの魔剣は、緩やかな曲線を描いたその片刃の魔剣によって綺麗に切断されてしまった。そのままオレの首を狙うガロの剣が、ギリギリのところでソレをかわしたオレの目前を掠めていく。

「く……ッ」

「チィ……躲されたかッ!!」

呼び起こしたハルマツゾの知識によると、あれは遥か東方の地で生み出された「刀」という武器だ。ただただ斬ることだけに特化し、薄い鉄の刃で同じ鉄の塊をも切り伏せる、東方の「魔剣」。しかし何故、ジュールたちのソレと同じ効果を持つ魔剣の形状がこうも違うのか。……いや、今はそんなことを考えている場合ではないな。

オレは、脚部に施された強化によって一氣に間合いから飛び退く。瞬発力だけなら「加速」を使ったガロにも勝っているのがせめてもの救いだ。まあ、こっちは身体にかかる負担が半端無いんだけど。また同時に、斬られた魔剣を回復させておくのも忘れない。数千年もの間蓄え続けられた魔剣ハルマーの魔力は無尽蔵で、一度や二度、その刀身を碎いたくらいでは真に消滅させることは不可能だ。お陰

で、使用者の魔力を消費しない、というメリットまである。

ただ「魔術の分解・吸収」という真価を発揮するのはやはり対魔術師戦であって、こういう場面でもこうして戦えているのは、魔剣の力というよりも、ハルマツゾの知識や技術によるところが大きい。そもそも、人間の身体構造を熟知しているハルマツゾの知識が無ければ、体内に宿した魔剣によって身体能力を強化するなんて真似ができるわけが無いのだった。

「むう、再生するとは。その魔剣、面妖な代物であるな……!!」
「ソレを斬っちゃうアンタの剣術ほどじゃあねえよ……ッ」

魔剣の能力で加速し距離を詰めてくるガロに、大剣型に変化させた魔剣で相手の間合いの外からの一撃を見舞うが、それも魔剣シンカイの一閃であっさりと両断されてしまう。斬られた魔剣ハルマーの刀身が、空中で霧散する。……おそらく、その剣の腕だけで言えば、ハルマツゾと同等レベルの使い手だ。どれだけの修練を積みめば、それだけの技術を身に着けることが出来るのか……。＜石＞の力があつたとしても、簡単なものでは無い。なんでジュールは、コイツを差し置いて団長なんてやってられるんだ……？

「破ッ!!」

「うおっと……!!」

またしても魔剣ハルマーを両断し、オレの身体を掠めていくガロの魔剣シンカイ。思わず、ラファイに撃ち込まれた時のように、腕に仕込んだ魔剣を使って受け止めようとしてしまうが、そんなことをすればそのまま腕ごと持っていかれてしまうだろう。流石に、ハルマツゾ戦の二の舞は避けたいところだ。

オレは防戦一方の中、神経を研ぎ澄まし、相手の発する研ぎ澄まされた「気」を捕らえていく……。そして――。



「そうそう。ヴェルクさん、コレを読んでおいて下さいませ」

「……なんだよ、コレ」

あの日、帰りのエスコート役にオレを指名した姫さんが、その別れ際にオレへ向かってその小さな手を差し出した。手渡されたのは、丁度、手のひらに隠せるほどの大きさに小さく折りたたまれた一枚の紙切れ。以前に読んだ某報告書を思い出して、思いつきり顔を顰めるオレに、姫さんはにっこりと微笑む。……なんつうか、嫌な予感しかないんだけど。

「あら、お嫌そうですね。私、貴方がたのために結構頑張りましたのよ？」

「貴方がた……って誰のコトだよ」

「そろそろ気付いてもよろしい頃かと思えますわよ？ ……それでは、ごきげんよう」

そう言っ、いつぞやのように優雅にお辞儀する姫さん。オレはその場で手渡された紙切れの内容に目を通し、慌てて視線を彼女に戻す。しかし結局何も言えず、去っていく彼女をただ呆然と見送るだけだった。

ホント、オレたちとは役者が違うんだよなあ……。



「な……ッ!？」

ガロの目が、驚愕に見開かれる。しかし、当然かもしれない。なにせ、オレが行った芸当が芸当、だからなあ。極限まで研ぎ澄ました神経と、相手の発する「機」を寸分の狂いなく察知し反応する身体能力と技量とが無ければ、到底成し得ない技だ。それも、本来は真剣での本気の撃ち込みに対して行えるような技じゃない。オレだって、実戦でこれだけの凄腕相手に使ったのは初めてだ。

「白刃取り、だと!？」

「これも東方の技、だったか……オレ個人の技量じゃ無理だったな。ハルマツゾに感謝しねえと」

相手の「気」が研ぎ澄まされており、「機」が読みやすかったこともあって、その試みは成功した。全身に張り巡らせていた魔剣の反応が少しでも遅れれば、胴体は真っ二つにされていただろう。全てを切り裂かれ、攻撃・防御がまともに出来ない中での、あまりにギリギリの賭けだったが、それ故に相手に与えた衝撃も大きかったらしい。

オレは己の魔剣の力で腕力を強化し、そのまま魔剣シンカイを折るつもりで捻りを加えるが、ガロはすぐに手を離れた。そして「加速」能力を失ったガロは、それでもなお常人としては鋭い動きで跳び退り、そのままその場に膝を着いた。

「……我が命とも言えるシンカイを奪われては、仕方が無い。……」

参った」

そう言って、頭を垂れるガロ。その様は、話に聞く貴士らしく、潔い。……これでようやく一人目、か……。気の長い話だな。神経が磨り減って仕方ねえ。これが、トーナメント戦じゃなければ、心労で死んでいたな。

そんなことを思いながら溜息をついていると、こちらと同じく試合が終わったらしい隣の舞台とを隔てていた壁がズズズ、と下がり降りていく。オレはそれを見ながら、姫さんに貰った紙切れに書かれていた内容を思い出す。

『王都に住まう有力貴族の方々を、説得いたしました。』

結果、ある条件と引き換えに、聖貴士たちの思惑に乗らないとの約束を

取り付けました。これにより、ヴィーさんが真実を知って前王の<石>を

受け継いでも王位継承とは成らず、聖貴士たちの野望は潰えるでしょう。

その条件は一つ。貴方が今回の武術大会で優勝することです。

それでは、ヴィーさんのためにも張り切ってくださいませ。

シルヴィア』

恐らく、このために姫さんは王都へ「里帰り」していたんだろう。彼女にしてみれば、親しい立場にあるヴィーが女王となることはむしろプラスであるはずなのに……ヴィー自身が、それだけ大事だっ

てことなんだろう。ありがたいことだ。

だが、一つ問題が。たしかに、一連の流れに決着が見えたのは本当ありがたいことなんだが、しかしオレに関しては全然事態が好転していないのは、気のせいじゃねえよな？ てか有力貴族との取引条件がオレの本選優勝って、ハードルと重圧上がってねえ？

「……まあ、やってみますか」

たしか、本選登録人数は16人。その内11人が魔剣を持つ聖貴士団の一員で、トーナメント形式のこの大会で優勝するためには、残り3回、勝利する必要がある。果たして、次の対戦相手は、どんなヤツなんだろうか……。

36. 東方の剣（後書き）

「刀」って、武器としてはやっぱり魅力的ですよ。ちなみに魔剣シンカイの元ネタは、昔、刀集めが趣味だった祖父から聞いた「真改」という名前の刀鍛冶だったりします。

37. 夢

「おい、アンタ」

ガガガガ……と、かなりの音を立てながら、隣の舞台との仕切りである巨大な石造りの壁がゆっくりと降りていく中、オレはその場から立ち去ろうとするガロに声を掛けた。ガロが、こちらを振り向く。

「……何だ」

「ホラよ」

オレはガロに向かって、無造作に魔剣シンカイをぶん投げる。ぐるんぐるん、と綺麗に回転しながら、虚空を舞う。ソレを受け取るガロは、両目を見開き驚愕の表情。……まあ確かに、頭良いヤツのやることじゃねえよな。

「何故……?」

「オレがその魔剣持っても、適正無えから役に立たねーしな。それに、あそこまで鍛え上げた技が無駄になるのは、あまりに勿体無え」

千年という時の中で極限まで鍛え上げられたのであろう剣術に、ガロという男個人の才能と身体能力、そして魔剣シンカイが足されて初めて、あそこまでのものが完成したのだ。それはもはや、オレみたいな男からすれば、芸術品と言っても過言ではないほどの価値がある……と思う。

それを軽々と奪ってしまうのは、流石に気が引ける。オレが持つ

てても、この魔剣に適正のありそうなヤツは知らねえし……マリアがやって来て持っていかれちゃうだけだしな。それはそれで、貸しが作れるのかもしれないが、正直、オレの望む形で返してもらえる可能性は、皆無に等しそうだ。……残念だけど。

「その代わり、一つ教えろ。なんでお前ら、そこまでヴィーにこだわるんだ？　今の国王だって、中々の人物だって話じゃねえか」

そう……いくら聖貴士たちがどれだけの団結力を誇っていたとしても、王家の血をきちんと引いている今の国王に対し、全員が全員反旗を翻すというのは、少し違和感がある。ただただ単純な疑問だったが、ソレに対してガロは自分の手の平に刻まれたものを見つめ、そしてそれを強く握る。拳を握ったまま、口を開く。

「誇りだ」

「……誇り？」

「我々は＜石＞を通じて、千年以上もの間、同じく＜石＞を受け継いできた国王に仕えることを最上の悦びとしてきた。我々は、代々受けてきた恩をけして忘れはしない。＜石＞に宿る王家の意志に従うことこそが、我ら聖貴士の誇り。我々はそのためにだけに生きている」

＜石＞に刻まれた記憶に人生を左右される人間は、意外と多い。それは代を重ねるごとに薄れていくものだが、受け継いできた者たちに一貫した意志があれば、それを次の代へとより深く刻み付けることができる。

「……三つ子の魂百まで、か。ジュールの野郎は、少し違ったみたいだけどな」

オレの言葉を聞いたガロが、フッ……と笑う。

「それは、本人から聞くのが一番良からう。話してくれるかどうかは判らぬが……」

気が付くと、丁度巨大な石壁が降りきったところだった。土煙の向こうを見つめるオレに対し背中を向けた壮年の剣士ガロは、控え室への通路へと歩みながら続ける。

「もう一つ、教えておこう。この大会に参加している者たちは、ジュール殿が無事にヴィクトリア様の夫となられた際の、次の団長の座を競っている。相手を殺したら反則負けというのも、同士討ちを避けたい我々には丁度良いのでな」

「ふうん。……つまり？」

「全員本気で戦っている故、勝ち抜けば勝ち抜くほど相手が強くなるということだ。……それでは御免」

そう言つてガロが通路へ消えるのが早いか、石壁が巻き上げた煙の向こうから、高速で飛翔してくる物体。オレは未だ見えぬ相手の「機」の発露を察知し魔剣ハルマーで防御しながら身を捻るが、それでも躲しきれずに右上腕部を薄く切り裂かれる。……いや、これは切り裂かれるというよりも、挟り取られている、と言った方が正確か。とにかく――。

「痛てえぞ、クソツタレ!! コレって反則じゃねえのか!？」

「ワタシの中にある過去の大会規則の中では、けして反則ではありませんよ。しかし、加速させたワタシの指弾を躲すとは、流石ジュール団長とガロ殿を退けただけがありますねエ。正直、新たな団長への道程には、ガロ殿が一番の難敵だと思っていました」

指弾、ね。飛び道具にあのとてもねえ加速能力を付加とかって……大会ルール云々よりも、そっちの方が反則じゃねえのかよ。確かに、あのおっさんなら撃ち出された指弾を全て斬り落とすかもしれないけど。

煙の向こうから現れた、やたらと豪華な衣装に身を包む男が、大げさにお辞儀する。手足のやたら長いソイツは、まるで道化師のようで、不敵な笑みを浮かべている。

「ワタシの名前は、ミール。魔剣ラクシーの使い手です。……どうぞ、よろしく」



「なあ、ヴィー。起きてるか？」

「ななな、なんだよ、急に」

大会前日の深夜。眠れずにいたオレは、同じ部屋の隣のベッドに眠るヴィーへ背中越しに声を掛ける。すると、なんだか慌てたような返事が返ってきた。お互いがそれぞれのベッドに入ってからそれなりに時間が経っているが、どうやらまだ起きていたらしい。オレは、最近こうしてよく考えることを、そのままヴィーにぶつけてみた。

「お前、将来どうなりたいんだ？」

「どうって、そりゃヴェルクと一緒に——じゃなくてっ」

「？ さっきから様子おかしいぞ、お前」

「う、うっせえ！！」

ごろん、と寝返りを打ってヴィーの方へ向くと、毛布の上から両手で胸を押さえて深呼吸していた。……変なヤツ。

「大丈夫か、ヴィー。その、頭とか」

「……うぐぐ。ヴェルクの頭こそ、どうなってんだよ。こんな雰囲気の良い部屋で、アタシと、ふ、ふたりき……だってのに」

そっぽを向いてブツブツと呟くヴィー。うーん。

「だからこうして、話を聞いてるんじゃないか。ほかのヤツらがいねえところださ」

「……まさか、シルヴィから何か聞いたのか？」

「いや、特には。てか、何か隠してることもあんのかよ？」

「べ、別に良いだろう！！……大体、アタシの将来なんて、ヴェルクには関係無いじゃんか。……まだ」

拗ねたような声でそう言うヴィーに、オレは苦笑する。

「それが意外に、そうでもねえんだよな……」

「え？ それって……」

オレの言葉のどこに反応したのか、こちらを向いて何故か急に機嫌が良くなった様子のヴィー。それを見て、思わず微笑む。子供みtainなヤツだな。

「いや、なんでもねえよ。それよりホラ、お前の将来像だよ。どうなんだ？ こう、お姫様になりたいとか、王子様と結婚したいとか、そういう夢があったりするんのか？」

「お姫様に王子様あ……？ ヴェルクこそ、本当に頭がどうか

しちまったのか？ アタシがそんなタマに見えんのかよ」

「そりゃまあ、そうだが……」

普段の言動を見ていれば、間違ってもそんなことを考えそうには見えない。だが、やはり女の子だったら、城での暮らしや王子様との結婚、なんて憧れそうなものだけだな。まあ、コイツは普通じゃないし、女の子、っていう年齢でもないかもしれないが。ヴィーは、天井の一点を真っ直ぐ見つめて、口を開く。

「探索者を続けているか、それとも別の仕事をしてるか分らないけど……なんにしたって、アタシは自由に生きるんだ。そして困っている人がいたら、自分の手で助ける。……助けられるくらいに強くなる。それがアタシの、今の夢かな」

天井を見つめていたヴィーは、何かを思い出すように、ポツリポツリとそんなことを語った。やがて照れたような表情でこちらを向く。

「……ってのが答えじゃ、ダメかな」

「いや、構わねえけど……しかし随分と、お人好しな生き方だなあ」

そんなオレの感想を聞いて、ヴィーは一瞬目を点にすると……腹を抱えて声を抑えるようにフッフ、と笑い出した。やがてオレの怪訝そうな表情に気付いたのか、上半身を起こしてコホン、と咳払い。少しはにかんだような顔で、オレを見る。

「な、なんだよ……？」

「分からない？ ヴェルクみたいになりたいって言ってるんだよ、アタシ……」



そして時は戻る。

鉄球と、それと同じ大きさに変化させられオレの手から撃ち出された漆黒の弾……魔剣ハルマーが、寸分の狂いなく、空中で芯同士を貫くようにぶつかり合う。その勢いは相殺され、魔剣ハルマーはそのまま空中で霧散し、ただの鉄に過ぎないミールの弾は、形を歪に変化させて地面へと落ちた。

「……な、なんとまア。貴方、国王の次に恐ろしい方ですねエ」

「どういう意味かは知らねえけど、褒め言葉として受け取っておくよ」

オレは、体の数箇所を鉄球に挟まれて血塗れになったまま、ニヤリと笑う。筋肉を膨張させたり魔剣ハルマーを利用して出血を止め、体内の「気」を巡らせて傷の回復を早める。それに気付いた道化師のような男、ミールが口元を引きつらせた。意外と分かりやすいヤツだな。

「不死身のゾンビと戦っているようですよ、まるで」

「ゾンビは、不死身じゃねえよ」

オレは、手の平の中に球状にした魔剣ハルマーを握る。魔剣の力によって加速された鋼鉄の指弾VS強化された肉体から放たれる魔剣製の指弾。鍊度は向こうのほうが遥かに上だが、こちらには数千年戦い続けた男の驚異的なセンスが宿っている。オレは、魔剣が変化させられなくなる直前。つまり球状の魔剣が指から離れる瞬間に、

それを細かな複数の弾状に変化させて撃ち出した。……そして響き渡る、男の悲鳴。

「ギャアアアアア……ッ!!」

地面の上を苦痛でのた打ち回るミールを無視して、オレは思う。自分たちの誇りの為に事を成そうとしているコイツら聖貴士たちと、他人の守るために強くなろうとするヴィーの生き方。そのどちらを尊重すべきかなんて、考えるまでもない。オレは、昨夜のヴィーの言葉を思い出して……笑みが浮かびそうになるのを堪える。

「仕方ねえ。せいぜい、孝行娘の夢を叶えるお手伝いでも、するとしますか」

もう十分、強いとは思うけどな。

37. 夢（後書き）

ぎ、ぎりぎり一週間の更新……ですかね？（汗

38. 想い人

「ぐっ……は……ッ」

ガシャン、という音を立てて地面に崩れ落ちる、白銀の鎧をまとった3人目の聖貴士。随分と年若く、年齢的にはヴィーやフェンと同じくらいに見える。名前は……えーと何だったっけ。ミールとの戦いでつけられた傷の痛みで、よく聞いていなかった。魔術で大分減退されているはずの歓声ですら、傷に響いて嫌になるくらいだ。くそう、さっさと終わらせて、アンナに回復してもらいてえ。

ミールのヤツが言っていたように、ガロ以上の脅威となる使い手は、残りの貴士たちの中にはいないのか。3回戦は、ガロ戦での苦勞が嘘のようにあっという間の決着だった。とはいえ、こちらもガロとの戦いで精神を削り、ミールの指弾によって身体にはあちこち穴だらけ。精神的な疲労と、満身創痍と言って過言でない肉体で戦闘を続けるのは、正直辛い。……昔は結構、無茶してたんだけどな。こういう時に、つつい若くねえな、と思ってしまう。

地面に伏したまま顔を上げ、ぐぐ……と呻きながら鎧を纏った聖貴士が、その年若い顔に悔しそうな表情を浮かべる。

「ま、まさか、ここまでとは……」

「こっちは、初戦でガロほどの使い手と戦って少し期待していたんだけどな……。流石にアレ以上強いヤツがいたら、ジュールの立つ瀬が無いか」

「……所詮、オレは団長の器じゃなかったってことか。しかし、次の貴様の相手は恐らく我ら聖貴士団の副団長、ドルマ殿。そう簡単には勝てないぞ」

「へえ、そんなヤツが残ってたのか。それは楽しみだな」

強いヤツと戦いたい……というのは、オレと、オレの中に眠るハルマツゾ共通の欲求だ。オレの場合は散々愚痴りながら嫌々戦うんだけど、やはり同じレベルの相手と戦うのは楽しいと思ってしまう。これは恐らく、傭兵時代からの悪い癖なんだろう。かつての古い仲間には「死にたがり」だの「病気」だのと言われたことがあるくらいだ。……まあ、そう言うソイツも化け物みてえなヤツだったんだが。

ここのところ、昔に戻ったような緊張感が続いていて、心身の感覚が研ぎ澄まされているように感じる。お陰で、ハルマツゾの知識や技を違和感無く扱えるようになってきている。やはり、生前の＜石＞の所有者とは体格の違いなどから技の使役にも若干の違和感があるものだが、ソレも薄れてきているし。先々のことを考えると、良い準備運動だよな、この大会。オレは、轟音を響かせながら降りていく石壁の向こうを見つめる。

やがて土煙が晴れ、そこに現れたのは……聖貴士の証である白銀の鎧を纏いながら地面に伏せる一人の男と、ソレを見下ろして背中にマントをはためかせる、黄金の鎧を纏った戦士。オレの後ろで伏せる、もう一人の聖貴士が愕然とした表情で口を開く。

「馬鹿な……ドルマ殿が、敗れただと……ッ!? 何者だ、アイツは……!」

「……聖貴士じゃ、ねえのか」

なるほど。確かに今大会本選出場者は16名。うち11名がコイツら聖貴士だが、たしかにオレを除いて残り4名、聖貴士以外の参加者が存在しているハズだ。これはなんとも……王都に住まう有力

貴族たちに良いところを見せたかった聖貴士たちにとっては、格好のつかない話になってきたな。参加者の過半数を大きく上回る11人もの精鋭送り込んで、決勝に残れないとか……かなり印象悪くねえ？

「……これからどうするんだ、お前ら」
「うぐぐ……」



倒れて動けない二人の聖貴士を、大会の関係者が連れ出したあと、オレと黄金の戦士には王都の聖職者による回復魔術が掛けられた。どうやら、決勝戦は万全の状態で望め、ということらしい。これは、かなりありがたい。魔剣による止血を行いながら戦うってのは、思ったよりも面倒だったのだ。

「……アンタの方はほぼ無傷だったみてえだけどな」
「あー、気にすんなよ。俺様も、万全の相手じゃねえと燃えねーかなな」

顔を覆う黄金の兜の下から聞こえる言葉は、意外なほどフランクなもので、声の調子も若い。さて、コイツが一体どうやって、加速の魔剣を持っていたであろう聖貴士を倒したのか。正直、前日に姫さんが言っていた「大会でのオレの優勝」という条件も、今更意味があるのか分からねえが……コレはコレで、なかなか楽しめそうだな。表舞台で目立つのはあまり好きじゃ無いんだが……それこそ今更、か。

「じゃあ、ぼちぼち始めますか」

「おう、良いぜ。どっからでもかかって来いよ」

「なんつうか、随分と余裕だな」

「クッククッ……。俺様は、生まれてこの方、ずっとこんな感じだよ。まあ、お陰でイロイロと敵も多いんだがな」

何を言っているのか良く分からないが、とにかくここまで勝ち残った強者であることは間違いない。オレは細心の注意を払いながら魔剣を構え、相手へと一步一步進んでいく。そして、相手の不意をついて一気に間合いを詰め、斬りつける。体内の「気」を極限まで小さくし、「機」の察知はほぼ不可能であろう必殺の一撃。しかし――。

「ほう、流石だ……探索者ヴェルク」

「……ッ!? ソイツは……!!」

黄金の戦士が、高速で切りつけたオレの斬撃を、一瞬で鞘から引き抜いた剣で防いでしまう。しかし、オレが驚いたのは、そのためだけではない。その手にしている剣が、オレにとって見覚えがあるものだったのだ。一度はオレが手にし、マリアへと手渡したはずの、白銀の剣。

「気付いたか? そう、これはジュールのヤツが使っていた魔剣だよ。銘は確か……グスタフとか言ったかな。使い勝手も悪くない」

黄金の戦士はそう言って、フンと鼻を鳴らす。

「まあ、俺様にはコイツに適正無えから加速能力は発揮できねーんだが、その魔剣と撃ち合える剣となると、そうそう見つからなくてな。有名すぎる俺様の愛剣を、こんな目立つところで使うワケにもい

かねーし」

「……アンタ、何者だ？」

剣の歯を合わせたまま、オレは尋ねる。魔剣としての能力を黄金の戦士の、ニヤリと笑う雰囲気。ソレはまるで「あの日」戦った鎧の怪物を彷彿とさせる。こちらは魔剣の力を最大限に使って剣圧を増幅させているが、相手は魔剣の能力に頼っていない。コイツは、魔力と氣とを練り合わせた技法で、体力を増幅しているのだ。ヴィーと、同じように。

……こうなると、嫌な予感しかない。

「分かってンだろ？ 何故、俺様がこんな鎧を纏って姿を隠しているか。何故、俺様がマリアが持ち去ったはずの魔剣を手になっているか」

聖貴士と同じく秘匿された存在であるはずの魔剣調査官マリアの存在を知り、彼女が持ち去った魔剣を現在手にしていて、しかも、観客に姿を見られてしまうと行動に支障が出る人物、ね……。

「貴賓席で、姫さんの隣に座っているアイツは？」

「姫さん？ ……ああ、シルヴィアのことか。あの男は影武者だよ。帝国の刺客にいつ狙われても可笑しくない世の中だからな、別に珍しくもなんともねーだろう？」

たしかに、地位の高い人間が、暗殺者などから身を守るために公の場では影武者を使うことは良くあることだが……その本人がより危険なこんなところに顔だしてたら、意味無えだろ。偉いヤツの考えることは、よく分からねえ。

「何が目的なんだ？ 聖貴士の暴走を食い止めることか？」

「いや。俺様は、別にヤツらの好きなようにさせても構わなかったんだが、そこらへんはシルヴィアに説き伏せられてな」

「は？」

……あんの小娘、オレどころかこんな大物まで巻き込んだのか！
！ 考えることの桁が違いすぎる……ッ！！

「ちなみに……どうやってアンタを説得したんだ、アイツ」

「いやあ、この大会で優勝したら、求婚に応じてやっても良いなんて言うもんでな」

「聖貴士関係ねえじゃねえか！？ ってか、そんな理由で……？」
「なんだよ、男にとっては大事なことだろ」

いや、ていうか姫さん、この男からの求婚を断ってたのかよ！
貴族として最大の誉れじゃねえのか？ 相手が最低の人間だっていうなら分かるが、コイツは人間としてもそうそう悪いヤツじゃ無さそうだけれど……。まさか他に、好きなヤツでもいるんだろうか。
いや、考えられねえな。

「あとは、楽しそうだったからな。お前と一緒にだよ、ヴェルク」

「オレと……？」

「顔、笑ってるぜ？」

そう言って、黄金の戦士……もとい、王国最強の存在、もとい、光の魔剣唯一の使い手、もとい……ヴィーの兄貴。この国の王者、アーサー・フェイドは喉を鳴らして笑った。確かに、彼の持つ魔剣グスタフの刃に映るオレの顔は、ひどく楽しそうに歪んでいた。兜の向こうに見える、ヴィーと同じ新緑色の瞳が細められる。

そして……、次の一言でオレの思考をストップさせる。

「まあ、兄として、ヴィクトリアの想い人であるお前にも興味があったしな。……未来の義弟候補がきちんと勝ち進んでくれて、嬉しいぜ」

「……………はい？」

38. 想い人（後書き）

2011. 08. 23 ご指摘いただいた点を修正。

39. 巨大なモノ

あれは、かれこれ5年前のことだ。

当時、とある理由からパートナーを失って、傭兵稼業から足を洗おうとしていたオレは、辿り着いたガルジの街で新たな職を探していた。実際、かなり大きな街だったから、働き口はいくらでもあったんだろうが、当時25歳のオレは、まだまだ戦いの日々には飽き足りてはいなかったんだろう。普通の職業なんかがいまいちピンと来ず、ブラブラと毎日を過ごしていた。ギルドを通さない仕事……簡単な護衛なんかをして、日銭を稼ぐ日々だった。

そんなある日。唯一の「家族」を失い街へと一人辿りつき、心身ともに疲れ果て、心を失いかけていたアイツに出会った。13歳だったアイツの見た目はまだまだ子供のなりで、薄汚れ擦り切れた旅の衣装に身を包んでいた。その手には、形見の大剣と、＜石＞を受け継いだ証である刻印……。

知り合ったのは、成り行きというか何と言うか……結局、危なかったしいソイツを放って置けなくて世話をしてやるハメになり、二人揃って探索者となった。オレは戦いのイロハをアイツに教えてやり、しかも保護者兼任というオレらしく無い立場まで手に入れることに。たしか同じ部屋に泊まった最初の夜、オレはアイツにこんなことを言っただけ。

「……お前、女だったのか？」

まあ、それがアイツ……ヴィーに思いつきぶん殴られた最初っでワケだ。今思えば、とんでもねえモンを拾っちゃったなあ……。



黄金の戦士、アーサー・フェイドは間違いなく天才だった。いや、それはもはや「才能」という言葉で片付けられるものではない。数千年を戦い抜いたハルマツゾにも劣らない素質の持ち主だ。鎧に魂を移し、能力的に減退していたあのハルマツゾになら、余裕で勝てたんだろうな、コイツ。もはや「人間」という枠組みでは収まりきらず、「怪物」と呼ばれる類の力だ。

対する、オレはというと……。

「おいおい、急に腑抜けちまって、どうしたんだよ？」

「……うるせえよ、お前の発言のせいだろうが」

「うん？ どの部分だ？」

幾度か撃ち合った後、勢いを殺せずゴロゴロと無様に転がって間合いをとったオレは、思考がまとまらずに精彩を欠いている己に気付かざるを得なかった。そんな男を目の前に行っているアーサーも勿論、オレの動揺っぷりには気付いているようだったが、その理由には思い至っていないらしい。その様子が、先ほどの言葉の信憑性をますます高める。

「……ヴィーが、オレのことを好きだってトコだよ。一体、何の冗談だ？」

「はあ？ こんなトコで冗談なんて言うかよ。……ってなんだ、知らなかったのか？」

「知らねえも何も、初耳だよ。……ちなみにソレ、誰に聞いたんだ

よ？」

「そんなもん、シルヴィアとマリアの二人に決まってんだろーが」

アーサーの口から語られたのは、魔女二人の名前。

「……そうか。アイツらの情報か」

「おおっ！？ 急にやる気を取り戻したな、ヴェルク！！」

オレが全身をきしませながら放った高速の一撃を、気と魔力とで強化された身体能力を使って受け止めるアーサー。黄金色の兜のせいで、その表情を見ることは叶わないが、その口調からは楽しくて仕方がないといった、まるで子供のような感情が伺える。

「あの悪女二人組からの情報だっていうなら、ガセネタって可能性もあるからな！！」

マリアのせいで痛い目見てばかりのオレとしては、その方が説得力がある。シルヴィアだって、オレの反応を楽しんでいるだけという可能性が……。アーサーはソレに対し、怒ったような、呆れたような口調で言う。

「おいおい、マリアはともかく、シルヴィアが悪女だなんて聞き捨てならねーな。そんなにヴィクトリアの想いを認めたくねーのかよ。……腹違いとはいえ、兄としては微妙な気分だぜ」

ヴィーがオレを好きだということを認めたくない、というよりも……認めてはいけないような気がした。兄や父のような気持ちで見ていた少女が、いつの間にか自分を好きになっていたなど……なんというか、格好がつかない気がした。別に、倫理観がどうこう言うような性質じゃねえと思ってたが……自分のことになると、分から

ないもんだな。

「マリアが悪女だったのは、否定しなくて良いのかよ!!」

「……返答しかねる!!」

おいおい。もしかして国王ですらアイツをコントロール出来てねえのか？　ちゃんと、あの女の言動は把握してくれよな。あの美貌であっちこっち掻き回されたんじゃ、たまったもんじゃねえぞ。

「ちなみに、ヴィクトリアの周辺を調べた他の諜報員からも同じ報告がだな……ていうか、お前の周辺では、それこそ周知の事実らしいぞ?」

オレの思考、再びフリーズ。

「マジかよ。……ああもう、考えるのはやめたっ!!」

「おお、危ねえ……ッ!!　よっしゃあ、こちらも本気でいくぜえ……!!」

「ぐっ!?　この……!!」

オレの攻撃を避け、身体強化によって高速の攻撃を繰り出すアーサー。それを、どうにか紙一重の位置で受け止め、そのまま相手の手首、黄金のガントレットを掴んで捻りを加えて投げる。しかし、黄金の鎧の重量を感じさせない体捌きで体の軸を回転させ無事に地面へと着地するアーサーに、オレは思わず冷や汗をかく。猫かよ、コイツ。

「危ねー危ねー。まったく動きずれーな、この鎧。……しかも暑いし」

「んなの知るかよ!!」

確かに、お互い最高の切れ味を誇る武器を使っている以上、その重量と稼動範囲の制限がただのデメリットでしかない重装備をしているアーサーは、分が悪いと言えるだろう。それでも、流れるような動きでこちらの攻撃を躲し、受け流しているのは流石としか言い様が無い。かつて、魔剣ディジターの一振りで、帝国軍数千人を屠ったという噂……あながち嘘や誇張じゃないのかもしれないな。

「そもそもヴェルク、お前はなんだよ？　ヴィクトリアのこと、好きなのか？」

アーサーは剣を構え直すと、その剣身越しにオレを見据えて質問を投げかけてくる。……オレがヴィーを嫌いなワケ、無えだろ……クソツタレ。



実力は拮抗し、戦闘は長時間に及んだ。……とは言え、その要因としてアーサーが本来の魔剣やかつてヴィーが見せたような遠距離攻撃を封印していることや、その身に纏った鎧の重量なんかがあるワケだが。こうして分かりやすいハンデを貰うつてのは、ハルマツゾ戦を除けば初めてのこともかもしれないな……。

その戦いの途中で、王都には雨が降り始めた。一時は体に籠った熱を程よく奪ってくれたが、次第に雨に濡れた体が重くなっていくのが分かる。逆に、周囲の観客たちの熱気は最高潮を迎えている。まあ、ここまで人間離れした戦いを続ければ当然と言えるかもしれないけれど。

「……なあ。周りが、盛り上がってるとこ、悪いが……いい加減に、終わりにしたいんだが」

「奇遇だな……俺様も、同じことを考えてたぜ」

お互いに、ぜえぜえと肩で呼吸しながら、どうにか腕を持ち上げて剣を構える。それにしても、アーサーの身体強化術、ヴィーのソレと比べて遥かに長持ちするのだから、やはり年季の違いなんだろうか。いずれアイツも、このくらい強くなるのか？ ……あまり想像したくねえな。

「しかし、王家の人間ってのは、まるでデタラメだな……」

「……ま、自分でもそうは思うケドな、良いことばかりじゃねーぞ？ お陰で、思いつきり戦えなくて退屈してるしな。こないだまでは、聖貴士連中を相手にして遊んでたんだが、それも出来なくなっちゃったし……」

千年ものの<石>と加速の魔剣を持つ聖貴士相手にして……遊び、ね。確かに、こうして刃を交えていても、コイツの底が見えない。ハルマツゾの知識や記憶の中にも、ここまで才能に溢れたものは、ほとんど見当たらない。まさに、千年に一人というレベルの怪物。オレは、呼吸を整えながら応じる。

「ますますデタラメだな。……まさか、ソレがヤツらが離反した本当の理由、だなんてオチじゃねえだろうな？」

「さあ？ んなもん、離反した当人たちに聞いてくれ。今頃、この王都に集まってるんだろーしな。まあ、今回の離反も、それはそれで面白そうだったから止めなかったんだけれど……マリアのヤツには怒られたし、シルヴィアは呆れてたっけな」

「……それでこうして点数稼ぎしてるワケか。同情するぜ」

お前にも、聖貴士の連中にもな。

オレがコイツとどうにか戦い続けられているのは、単純にコイツの「気」が異様に読みやすいつてことに尽きる。＜石＞を継いでねえってのもあるんだろうが、ガロと同じようにどこまでも真っ直ぐな太刀筋で攻撃を繰り出してくる。研ぎ澄まされた、というよりは無邪気な、といった感じだが。これまで、そんな小手先の技が必要なかっただけなのかな……。

「どうしたんだよ、考え込んで。なあ義弟よ」

「うるせえ。お前の方が、年下だろうが」

たしか、まだ26歳とか、そんなもんだったはず。ヴィーとは8歳差か。それでもまだ、オレより大分年下だもんなあ。……ああ、このまま負けるのが、ますます癪になってきたな。

「お互い、次の一撃で終わらせようぜ」

「……そうだな」

こうなったら、最高の一撃をお見舞いしてやるさ。



しかし、その一撃が繰り出されることは無かった。

強力な防護魔術で守られているハズの闘技場の壁が轟音を立てながら破壊される。突然の爆発に伏せたオレとアーサーが身を起こし

てそちらに視線を向けると、白煙の中から現れたのは……瓦礫の山と、ぐったりと動かない観客の姿。

そして、身の丈10メートル以上はあろうかという、巨大な人型。その金属製のボディには、帝国の紋章が掘り込まれている。オレは……いや、その存在を知る全ての者が思わず目を疑っただろう。あれは――。

「……古代兵器、ゴーレム」

絶望的な響きを含ませたオレの呟きは、雨音によってかき消されていった……。

39. 巨大なモノ（後書き）

更新遅れまして申し訳ありません（汗

……と、誠に勝手ながらアルファポリス様で開催されている「第4回ファンタジー小説大賞」にエントリーしています。もしよろしければ、投票にご参加くださいませ。

40. 魔法の薬

「畜生。帝国のヤツらが地下通路から持ち込んだものって、ゴーレムだったのかよ……!?!」

先日、意外な結末に終わった探索の結果を思い返し、オレは呟く。それを聞き取ったアーサーが、視線を鉄の巨像に向けたまま口を開く。

「ゴーレムって、遺跡でたまに見つかるっていう、動かない石像のことか？」

「あれは、金属製のようにだけどな。……お前、ハルマツゾについては？」

「あ？ ああ、マリアから報告があったな。アイツが調べたところによると、色々と言説はあるらしいんだが……なんでも古代に活躍した英雄で、本当か嘘か分かんが、当時最強の戦士で千年以上も生きたとか」

オレは頷き、相対しているモノについて、簡単に説明する。

「ゴーレムってのは、ハルマツゾの時代から更に古代……現代からすれば超古代とでも言うべき時代に作られたモンだが……ハルマツゾの時代にも、動力切れ寸前のものが遺跡から発掘されてな。ヤツはゴーレムと、一度戦ってるんだよ」

「へえ？ お前、魔剣だけでなく石も受け継いでるのか？ まあ、そうでなきゃ魔剣の適正がそうそう合うハズもねーか。……で、何が言いたい？」

水煙の中で未だ動かぬゴーレムを見やりながらも、首を傾げるア

ーサー。それに対し、オレは背中に汗を浮かばせ、全身を緊張させたまま応える。

「今のオレが足元にも及ばない当時のハルマツゾでも、勝てなかった。……ただ、それだけの話さ」

「……なんだと？」

今、目の前にいる純帝国製と思しきソレが、超古代に作られたモノと同じ性能を持っているかどうかは分からないが……少なくとも、ハルマツゾがゴーレムと戦った際の、相手の動力切れという結末だけは無さそうだ。

ゴーレムが現れた際に巻き起こった霧がようやく晴れ、視界がスツキリすると、その向こうで赤く光る一つ目をギョロギョロと巡らせていたゴーレムが、オレたちの後方にある観客席の方を見据える。……視線の先にあるのは、闘技場内で、いや国内で最も重要な人間たちが座る貴賓席だ。

「なるほど。ヤツらの狙いは俺様や有力貴族たちか。……別に、シルヴィアがいねーなら、放っておいても良いんだがなあ」

「おいおい、それが国王の言葉かよ」

「ま、口うるさいヤツらだが、アレでも俺様の臣民だからな。守ってやるしかあるまい」

「まったく。……おい、来るぞ」

と、次の瞬間、オレの視界が鉄の巨人の姿で一杯になる。その巨体からは考えられないようなスピードでオレたちの目前にまで迫ったゴーレムは、巨大な腕を振り上げている。咄嗟に左右に分かれて飛び退く。オレの方はハルマツゾの知識のおかげでヤツが持っているかもしれないであろう性能を知っているが……アーサーはよく反

応じたな。流石、といったところか。

ゴーレムの巨大な腕が振り下ろされた次の瞬間、轟音と同時に地面は割れ、その周囲を盛り上がらせる。雨によって濡れていた地面からは、多くの水飛沫が跳ぶ。……くそっ、なんつう破壊力だ。

と、飛び退いたまま未だ空中にいるオレに、ゴーレムの目がグルンツと勢い良く向く。スローモーションで動く世界の中で、思わず眩く。

「……勘弁してくれ」

空中で身動きの取れないまま、迫りくる鋼鉄の拳。オレは、両手にハルマー製のガントレットを展開してソレを受け、体内に巡らせているソレを駆使して衝撃を後方へと逃がそうと高速で体を動かす。しかし、それはつまり相手の拳に乗って射出されるに等しい行為で、案の定オレはそのまま途轍もないスピードで後方へ吹っ飛ばされた。

その先には……石造りで、やたら頑丈そうな闘技場の壁。

「くっ……ッ!!」

轟音。オレはゴーレムの攻撃により、遙か後方の石壁にその身を埋めることになった。しかし、壁にぶつかる際にもハルマーで肉体を保護。それによって、アーサーとの戦いでついた浅い裂傷はあちこちに残るものの、いつか赤角のミノタウロスにやられた時のような致命傷を受けずに済んだ。雨のお陰で、濡れ鼠みたいにはなっているが、血塗れになるよりは随分マシだ。しかし……。

「かつ……ハ……ッ!!」

衝撃を完全には殺しきることは出来ず、肺が圧迫され呼吸が止まる。痛え……！！とも言えず、口をパクパクと動かす。己と同じ程度の質量の相手なら、空中からでもどうにかやりようがあるが……あんな巨大なノ相手では、コレが精一杯だ。そもそも、アーサー戦の疲労が溜まりまくっていて、こちらもう動きたくねえってのに。帝国も、空気読めよな……。

「ヴェルク！！ 大丈夫か！？」

見ると、オレが突っ込んで崩れた場所の上方にある観客席に、ヴィーの姿。どうやら、周囲の観客は騎士の先導で既に避難を始めていたらしく、巻き込まれた人間はいないようだった。……この対応の素早さ、国内に帝国のヤツらが潜伏しているという情報があった以上、それなりの備えをしてたんだろうな。呼吸を整えたオレは、展開したハルマーを解除しながら上体を起こす。

「あいてて……全然、大丈夫じゃねえよ」

「……大丈夫、そうだな」

オレの軽口に、ヴィーが安心したような表情を見せる。大丈夫じゃねえって言ってるんだが、まあ……長い付き合いだし嘘はつけねえか。ヴィーはそのまま、瓦礫の中をオレの傍まで降りてきて、手を差し出す。オレは、それに手を伸ばして……先刻のアーサーの言葉を思い出してしまった。思わず、ヴィーの顔をマジマジと見つめてしまう。

「どうしたんだよ？ ……ほら」

「あ、ああ」

オレは一瞬迷ったが、ヴィーの手を握って立ち上がった。そして遠目に、どうにかゴーレムの攻撃を避けているアーサーの姿を確認する。しかしゴーレムはあの巨体であのスピードだ。疲れきった体で、いつまでも避けきれぬハズが無い。ああ、やっぱり魔剣グスタフの刃も通じていないみたいだな。こうなると、あのゴーレムの性能は、ハルマツゾが戦った時のソレとそう変わらないようだ。

オレはヴィーの様子をさりげなく伺いながら、問い掛ける。

「アンナとフェンは？」

「最初の爆発に巻き込まれた人たちを助けに、アンナが飛び出して……」

「フェンもついて行ったと。ハハ、分かりやすいヤツらだな……」

容易に想像できるその内容を聞いて、こんな時だというのに思わず笑う。

「ヴィー。お前、シルヴィアとアイツら連れて、怪我人を安全なところに……って、そうだな。マルクのおっさんとこに向かえ。あそこなら、安全だろ」

あそこは、巨大な宿泊施設の中に、受付で見たような遺物を含め、多様の魔術的な細工が施されていた。なおかつ緊急時の拠点に指定されているということは……ここよりはいくらか安全だろう。そう、遠くも無いし……。

「なっ!？ アタシだって、一緒に戦えるぞ!!」

「んなこた分かってる。でも、あのデケェのが一体だけとは限らねえだろ。万が一に備えねえとな。こっちはオレと、アー……アイツで、どうにかしてみせる」

「本当か……？ 絶対、死ぬなよ？」

「ああ。いざとなったら、尻尾巻いて逃げるさ」

そう言って、懐から小さな水筒を取り出す。探索にも、酒なんかを入れて持っていく金属製のモノで比較的丈夫な造りだが……どうにか壊れずにいてくれたみたいだ。武器を除けば、オレの持ち物の中では比較的金の掛かってるモンだしな。流石に造りが良いねえ。片手の親指で蓋を回して外すと、オレはソレを口に運び、中身を一気に飲み干す。……げ、なんだこの味。

「うへえ……あんまり美味しくは無えな、コレ」

「ヴェルク？ なんだソレ……？」

「あー、ハルマツゾの知識を使って作った、魔法のお薬ってところかな。……って、おおっ？」

ドクン、と己の心臓が脈打つのが分かる。なるほど、こういう感覚なのか、と思う。あまり体に良いものではないということもあり、試飲はしてなかったからな……。

「どうしたんだ？ 手が、急に熱くなったぞ。大丈夫なのかよ？」

未だ繋ぎっ放しの手のひらからオレの肉体に起こっていることを感じ取ったヴィーが、不安げな表情で尋ねてくる。いや、手はすぐに離してくれて良かったんだが、うーん。まさか、先日のアレで癖になってるのか？ それともただの天然か。そこに気付いていない様子のヴィーに、オレは言う。

「あゝあゝ。……あ？」

「ん？ なんだよ？」

「……………」

薬のせいかな？ 一時的に声が出にくくなっているようだ。仕方なくオレは、傍らに立つヴィーに顔を近づける。コレじゃ、周囲の雨音にかき消されて声が届かないだろうしな。

「……え？ ……ッ!？」

……と、ヴィーのヤツはなにを勘違いしているのか、顔を赤くして慌てて目を閉じている。おいおい、なに考えてるんだよ？ オレは、そんな挙動不審なヴィーの耳元に顔を近づけて、囁く。

「大丈夫だから、そろそろ手を、離してくんねえ？」

「え……あっ!？ わ、悪い!!」

手を離し、慌てて飛び退くヴィー。以前なら、このヴィーの反応を「何故か」の一言で片付けていたんだが……アーサーの言ったこと、マジなのかねえ。なんか、コレまでのコイツの行動と反応に、全ての説明がつくような気すらしてきたな。おっさんや、ミントのニヤついた笑顔が、頭に浮かぶ。

「ハルマツゾには悪いが、オレにとっては、ゴーレムよりこっちの問題の方が厄介だな」

「ん？ なんか、言ったか？」

いまだ喉の調子が戻らずに小声で呟くと、ヴィーが首を傾げてこちらを見る。オレは、軽く俯いて口元を緩ませると、意識して、ヴィーへ届くように声を出す。

「なんでもねえよ」

加速していく心音と雨音が、オレの内と響いていく……。こうな
ったら、全部の憂さをアイツにぶつけてやるさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5824t/>

意志を継ぐ人々

2011年9月10日15時12分発行